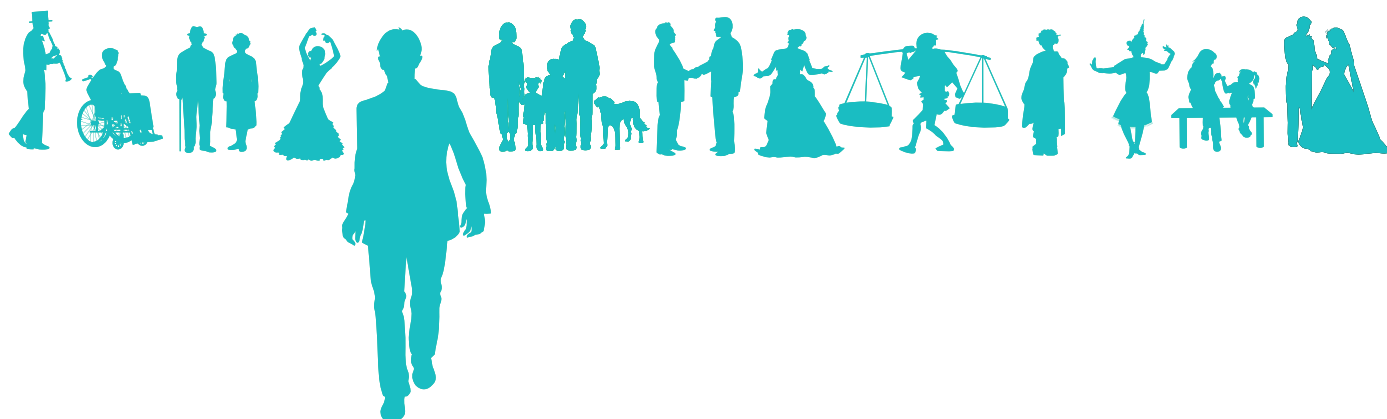


2025 Vol.25

Special edition

GLOCAL



教員の研究紹介



院生の研究紹介



修了生からのメッセージ



研究科の活動報告

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート、GLOCAL Vol. 25（特別号）をお届けいたします。

本研究科は、1991年に国際関係学部を基礎に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、1998年に創設された人文学部を基礎とする2専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が2004年に合流し、名称も「国際人間学研究科」に変更されました。さらに2008年には歴史学・地理学専攻が加わり、4専攻体制となって現在に至っています。

2024年の日本は、令和6年能登半島地震に始まり、常態化する体温超えの猛暑、南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）の発表、進路予想ができないスーパー台風の襲来など、自然の驚異を大いに感じた年でもありました。世界では、長期化するウクライナ戦争に加え、パレスチナ問題も一向に終わりが見えません。負のスパイラルに陥っていると言わざるを得ない状況です。日本社会は、このようなさまざまな国際的な社会・経済情勢の影響を受けながらも、それ自体が国際的な「場」として開かれようとしています。そして、国や地域も多文化共生社会の実現に向けて多様な施策に取り組んでいます。

グローバル化がますます進展するなか、異文化や国際社会への理解を深め、国際的な視野をもって世界で活躍することができる人材が求められています。と同時に、多文化共生社会の実現のためには、自分が暮らすローカルな地域に目を向け、多様な人間や文化への深い関心が必要とされます。本研究科はそうした認識に基づいて、グローバルな視点とローカルな視点の両者を軸とする「グローカル」な教育研究を理念として掲げています。

本誌は創刊から12年が経過し、この間、本研究科における日頃の教育・研究活動の一端を広く知っていただくために発行してまいりました。本号は、国際人間学研究科が誕生して20年目の節目の年に当たることから、従来よりも教員や院生の研究紹介の掲載本数を大幅に増やすとともに、本研究科の活動報告に加えて、4専攻の紹介や修了生からのメッセージを収蔵した拡大版として発行いたしました。人文社会科学の幅広い分野を研究領域とする本研究科の特徴が表れた内容であり、まさに本研究科が標榜する「グローカル」な視野に基づいた研究の一端をうかがわせるものであると言えるでしょう。

このように教員と院生が同じ誌面で相互の研究内容を共有する機会はきわめて貴重なものであり、研究科としてもますます本誌の充実を図って参りたいと思います。小誌を通して、本研究科の日頃の活動の一端がご理解いただければ幸いです。

2025年1月28日

大塚 俊幸（中部大学大学院国際人間学研究科長）



Contents

■ごあいさつ

大塚 俊幸 1

■各専攻の紹介

国際関係学専攻	4
言語文化専攻	5
心理学専攻	6
歴史学・地理学専攻	7



教員の研究紹介

広がり、転がり続ける研究関心	中山 紀子	8
経済学の「内」と「外」 —経済理論とは何なのだろう—	高 英求	10
東アジアの風水に関する学術的研究の評価： 「迷信」は研究すべきでない？	澁谷 鎮明	12
エジプト人気の裏側で	中野 智章	14
現代沖縄のシャーマニズムを再考する 宮古島出身女性のライフヒストリーを書き留める	平井芽阿里	16
地域とメディア表現	河村 陽介	18
デジタルアーカイブへの誤解 地域情報資源デジタルアーカイブを作るということ	柊 和佑	20
失われつつある境界を探って 現代英米文学における人間と非人間の描写	安保 夏絵	22
生成AIと「国際英語論」 —英語教員や英語教育は不要になるのか—	塩澤 正	24
伝統的祭礼行事の継承に関する問題点	永田 典子	26
日本で働く外国人介護福祉士候補者たち インドネシア人介護福祉士候補者の訪日前研修を通して考える	嘉原 優子	28
クライアントさんから学んだこと —「受容」と「共感」の難しさ—	願興寺礼子	30
モンゴル遊牧社会における互酬性への期待の機能／ 奄美大島の民話における多様性の社会生態学的検討	坂本 剛	32
笑顔を集めるフィールドワーク	川上 文人	34
臨床・教育実践のための研究を目指して —IRデータをベースとした検討の試み—	山内 星子	36
天皇の戦争責任について —新渡戸稲造（1862-1933）と満洲事変—	三浦 陽一	38
濃尾地震と名古屋養老院 ～キリスト教徒の役割：佐伯好郎と岩崎義憲～	森田 朋子	40
中世イングランド史に関するデータベースとその利用	佐々井真知	42
都市の持続可能性についての一考察	大塚 俊幸	44
近隣環境による健康影響を分析する	安本 晋也	46



院生の研究紹介

中国人訪日客の日本観光における添乗員の役割	王 蛍雪	48
邦語文献から見るクレオパトラ7世像の変遷と今後の研究について	野崎日向歩	49
音声認識AIによる音の文字化	藤吉 宙	50
ナラティブ・メディスンにおける医療の物語 —そのテキスト・アプローチの特徴とは—	原 由美子	51
日本語学習者から見る終助詞	青木 利華	52
中国人日本語学習者の和製英語の理解に影響する要因	韓 彧	53
中国人日本語学習者における日中同形類義語の誤用 —JFL環境とJSL環境の比較—	劉 雪婷	54
18世紀イギリス史料を用いた計量テキスト分析の試行	中島 亮	55
南北朝期における土岐氏と室町幕府の関係	伊藤 優太	56



修了生からのメッセージ

国際関係学専攻博士後期課程	野中 亜紀	57
国際関係学専攻博士前期課程	セレンメン	57
言語文化専攻博士前期課程	宇津野健太郎	58
言語文化専攻博士前期課程	間地 悠子	58
言語文化専攻博士後期課程	徳永 辰通	59
心理学専攻博士前期課程	伊木 治子	59
歴史学・地理学専攻博士前期課程	佐野 浩彬	60
歴史学・地理学専攻博士後期課程	林 泰正	60



研究科の活動報告

「院生の力」の開催	61
教員研究会の開催	62

国際関係学専攻

国際関係学専攻では、人文系諸科学と社会系諸科学の統合的視点に立つ「国際人間学」を展望しつつ、特に社会・文化的側面から、隣接科学の研究成果をも吸収して、思考力と応用力のバランスの取れた研究能力を備えた高度専門職業人および教育研究者を育成します。留学生が多く在籍していることも特色です。

国際政治経済分野

博士前期課程の国際政治経済研究コースにおいては、「よりよい統治とは何か」を考える政策科学の基礎を掘り下げ、国際社会の政治・経済上の諸問題、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境等、現代的な諸課題を中心とする教育研究を推進しています。「政治経済研究特論」「国際法特論」「国際政治学特論」「国際経済学特論」などの社会系分野の基礎となる科目に加え、「国際機構論」「国際金融論」「開発経済学特論」「国際協力論」など、グローバルな課題群に対応するための科目が準備されています。また「研究指導A～D」では、論文執筆や調査研究法に関する具体的な個別指導が行われます。

博士後期課程では、政治・経済関係の演習科目である「国際政治経済学専門研究演習」を配備して、グローバル社会における政治・経済の展開と問題解決の方向など、理論と実際を考究する学問的思考の方法を習得することとしています。

これまでの修了生は次のような研究内容を扱ってきました。「Rehabilitation Centers of Trafficked Women: Solution or Challenges」、「Big Data and Predictive Policing: Practice in the United States and China」、「The Industrial Development and Climate Change over A Decade : Developing Country Nepal」、「スリランカ・インド・タミル女性における教育問題」、「ネパールの農村における寡婦のサポート・ネットワーク：寡婦の生活状況の概要とチトワン郡の事例研究」などです。

国際社会文化分野

博士前期課程の国際社会文化研究コースにおいては、人類文化・社会の多様性を究明するとともに、個別の民族や国家の社会文化的個

性を明らかにし、そこに内在する普遍と特殊に着目しながら、人類文化の総体的な理解を深める教育研究を推進しています。「社会文化研究特論」「文化人類学特論」「国際社会学特論」などの人文系分野の基礎となる科目に加え、「国際ジェンダー論」「比較文明論」「比較社会史論」「比較宗教論」など、より詳細な課題群に対応する科目が準備されています。また世界の地域ごとの文化社会の多様性に配慮した「地域社会文化研究特論」も配置されています。また「研究指導A～D」では、論文執筆や調査研究法に関する具体的な個別指導が行われます。

博士後期課程では、社会・文化関係の演習科目である「国際社会文化論専門研究演習」を配備して、グローバル社会における社会と文化上の諸問題、さらに途上国地域を中心とした人間と社会の開発など、理論と実際を考究する学問的思考の方法を習得させることとしています。

これまでの修了生は次のような研究内容を扱ってきました。「ジョージア（グルジア）の市場で働く女性たち―何のために働くのか―」、「内モンゴルにおける草原観光の拠点としてのゲルキャンプの特性と運営に関する研究」、「Examining the Phenomenon of Nepalese Curry House Entrepreneurship in Japan through a Diasporic Framework」、「徳王政権に関する歴史資料のデジタル化」、「古代モンゴル法における女性の規制―「ハルハ・ジロム」を中心に」、「「蒙疆政権時代」における貝子廟地域の都市形成（1935年～1945年）」などです。

国際交流と研究活動

国際関係学専攻では、協定校をはじめとした海外研究者、留学生と学部生との交流を積極的に行っています。例えば2018年度以来、本学協定校マレーシア科学大学（USM）から研究者を招聘し、研究会を行いました（2018年3月Dr. Atikullah Hij Abdullah “Malaysia:

History and Religions (A Study on USM Students' View on Religion)」、2019年3月Dr. Suraiyati binti Rahman “What is necessary to protect the world heritage in George Town and the problems”など）。



図1 USM Atikullah 氏のセミナー

一方、2017年より、中国の内モンゴル大学との相互訪問と研究会を行っています（フムチル博士「清朝統治下における蒙漢混住地域の土地利用と社会関係」、財部香枝「科学技術と観光：世界最大の博物館・研究所群スミソニアン協会の事例から」、澁谷鎮明「日本中部地方における産業観光：企業とその歴史を見せる」など）。

また内モンゴル大学からの留学生を最初に受け入れた際には、留学生が中心となり本学学部生向けに、モンゴル文化に触れる交流会「Inner Mongolian



図2 内モンゴル大学留学生との交流会

Day」を開催しました。このような行事を通じ、大学院留学生と学部生との交流も進んでいます。

なお、2017年2月、博士前期課程修了生の中島弘象氏（国際関係学専攻2012年度修了、国際関係学部国際関係学科2010年度卒業）が、自らの大学院生時代からの体験・知見をまとめた著書『フィリピンバブ嬢の社会学』（新潮新書）を刊行し、その後映画化、演劇化されています。

言語文化専攻

言語文化専攻では、言語そのもの、人々が織りなす文化、言語が紡ぎ出す文化事象、そうした複合的・総合的な領域を教育研究の対象として、以下の3コースを配置しています。

情報社会コース

一般的に、理系分野では事実の上に知識と知見を積み上げて、新しい知識の体系を構築します。一方で、文系分野では社会を覆う常識という堅い殻に議論を起こし、新たな社会課題を発見し、殻を壊すような変革を促すことを重視します。情報社会コースは、情報学と社会学を理論的な基盤とした文理融合型のコースであり、社会への提案と技術的な知識を組み合わせ、社会課題の発見と解決を目指します。

人々は「技術」とともに生きていますが、理系的な「技術」の話だけでは、数式や基礎技術が実際にどのように使われるべきかわからないことが多いのが実情です。その「技術」をサービスとして誰もが「使う技術」にするためには、常識の殻に隠れた社会課題について考える必要があります。社会課題を発見するためには、常に社会に目を配る必要があり、また、殻を壊せるかもしれない「技術」を感じ取るアンテナも求められます。

本コースでは、コンピュータや映像機材、メディア機器などの操作技術を踏まえ、普遍的な技術的事象について学修を行うとともに、社会が抱える様々な課題や歴史に対する視座を養います。柔軟な指導体制のもと、学生は興味や関心に応じた研究を進めていきます。文献や実社会で収集したデータを分析・考察し、創造的な研究や課題解決の提案に挑戦することが可能です。また、情報を最大限に活用し、新たな価値を創造するスキルを習得することで、多様化する高度情報社会に対応できる研究者としての能力を身につけていきます。

過去に行われた研究には以下のようなものがあります：組織内で記録・制作される動画コンテンツのデジタルアーカイビング／VR空間のAvatarデータデジタルアーカイビング／VR空間のデジタルアーカイビング／立体音響を試行した音資源デジタルアーカイビング／AIを用いた音響検索手法の研究など。

英語圏言語文化コース

今から数世紀前、あの劇作家シェイクスピアが活躍していた頃、英語はイギリスという島国の一言語にすぎず、これを話す人の数は数百万人程度でした。しかも当時はその書き言葉としての地位は低く、学術用には向かない“vulgar”な言語と見なされていました。しかしやがてイギリスが覇権を拡大するにつれてそれは1つの国を超えてあちこちに広がり、周知の通り今では世界的な言語となっています。

「英語圏言語文化コース」は、このような「英語」という言語に何らかの形で関わるコースです。関わり方は、様々です。例えば、英語のしくみや歴史の研究、英語の学び方や教え方の研究、英語の背景にある文化的な問題の研究、英語で書かれた文学作品の研究などです。

博士前期課程では、「応用言語学特論」「英語教育法特論」「英語学特論」「英米文学特論」「英語圏言語文化総論」「研究指導」から必修科目を含め30単位以上を修得し、かつ指導教員の研究指導により修士論文を提出し、その審査および試験に合格することが求められます。この課程を修了すると、「修士（言語文化学）」の学位が授与されます。

博士後期課程（英語圏言語文化分野）では、「英語圏言語文化専門研究」8単位を修得し、かつ指導教員による研究指導を受けたうえで博士論文を提出し、その審査および試験に合格することが求められます。この課程を修了すると、「博士（言語文化学）」の学位が授与されます。

本コースには現在、2人の大学院生が在籍しています。1人は博士前期課程2年生で、「日本の英語学習者における英語の性差別的表現に対する態度」を主な研究テーマとしています。もう1人は博士後期課程3年生で、「日本の医療系専攻大学生を対象とした英語教育カリキュラムにおけるナラティブ・メディスン導入のためのモデル構築」を博士論文のテーマとしています。

日本語日本文化コース

日本語にはいろいろな表現の仕方があり、呼称や言葉遣いだけでどのような人かを想像させることがあります。たとえば「山田さん」と「太郎」、「わかりません」と「わかんない」、どちらで表現するかによって、その人物の印象が変わります。小説等では、それを踏まえて登場人物が描かれています。ある地域の言語はその地の文化を背負っていると言われる。日本語のさまざまな表現に目を向けることは、日本語の性格、日本の文化の特色、そこで暮らす人々のものの見方などを明らかにしていくことにつながるでしょう。

日本語日本文化コースでは、日本語、日本文学、日本文化の3分野に関する専門的な研究を行うことができます。日本語そのものに対する理解を深める日本語学、日本語教授法を含む日本語教育学、古典文学から近現代文学にわたる日本文学研究、社会や精神のあり方に引き継がれている日本文化の研究などです。修了生の研究テーマには「『源氏物語』研究」「精進料理の文化的研究」「日本語学習者の誤用分析」などがあります。日本語教育の場面で外国人学習者が抱える問題は、多くの留学生の研究課題となっています。



源氏物語押絵図屏風（中部大学蔵）部分

修了生は、研究を継続する傍ら、中学校、高等学校、大学および大学院において教育に携わったり、日本語教員として国内外で活躍したりしています。留学生も、日本語・日本文化の研究を通して、学術交流の国際化と日本文化の対外発信に貢献しています。

心理学専攻

心理学専攻は、コース分けはなされていませんが、専門領域として、基礎心理学（人間の心の機能を研究する領域）と応用心理学（基礎心理学の知見を用いて効果的な教育方法や心のケアなどの実践に関わる研究を行う領域）の2つの領域があります。

基礎心理学領域

人の心は、物事を認識したり、状況を判断したり、情報を記憶したり、感情を調整したり、思考や想像を巡らせたり、言語を操ったりと多様な働きをしています。このような心の働きは、どのような場所でも一様ではなく、周囲の環境によって異なります。特に、誰かと一緒にいる時や集団の中にいる時など、人間関係が存在する場と一人で居るときとは大きく違ってきます。また、身体の成長に伴って心も成長するため、様々なライフステージにおいても心の働き方は異なっており、ある時期特有の心の働きや変化が見られます。さらには、個人の人格（パーソナリティ）によっても、心の働き方は大きく特徴づけられており、個性やその人らしさとして周囲には認知されます。このように、心の基本的な機能は、様々な観点から捉えることができ、研究の対象となります。心理学はどのような観点から心を探求するかによって細かく分野が分かれており、それぞれに「〇〇心理学」という名称がついています。

本学心理学専攻では、基礎心理学領域として、周囲の環境や刺激の認識及び情報処理に関わる「認知心理学」、人間関係や社会（集団）の中における人の行動や振る舞いの特徴を探求する「社会心理学」、人の心の成長や年代ごとの心の特徴を捉える「発達心理学」について講義や研究指導を受けることができます。

応用心理学領域

子どもたちを教える場においては、対象をよく理解した上で、教え方を工夫する必要があります。また、人の心は、身体と同様に病や不調に陥ることがあり、日常的なストレスや悩みなどの苦悩は、心身の健康状態を悪化させるきっかけとなります。応用心理学領域では、このような人の学びや心理的苦悩に対して、基礎心理学の知見を参考に、効果的

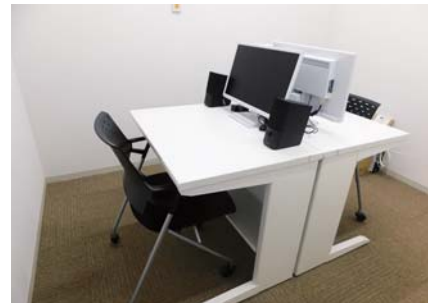
な教育及び支援方法を探求し、実践していくことを目的としています。

本学心理学専攻では、応用心理学領域として、心の成長に合わせた教育方法や学校での効果的な学びを追求する「教育心理学」、心の不調やその支援のあり方について探求する「臨床心理学」、心が不調に陥る前の予防的アプローチや健康状態の維持に焦点を当てた「健康心理学」についての講義や研究指導を受けることができます。

他にも、各領域に共通する研究手法として心理学研究法、心理統計学、心理検査法などについても学ぶことができます。これらは、科学研究の実施やパーソナリティのような個人の特徴を客観的に把握するために欠かすことのできない知識とスキルについて学習するものです。

心理学専攻の設備 (新 28 号館 5 階の紹介)

様々な観点から心を探求していくためには、心の働きを客観的に計測・観察できる設備が必要になります。本学心理学科・心理学専攻は、これまで、学生が自由に使用できる心理学専用の研究設備（心理学実験棟）を構えていましたが、2024年にリニューアルされました。新たに建設された28号館に統合され、5階がこれまでの心理学実験棟に代わるフロアになります。28号館の5階には、以下のような様々な設備・器具を充実させています。



小実験室：コンピュータを用いた実験が可能



中実験室：集団での実験やグループ作業が可能



行動観察用設備：隣室の観察が可能



28 号館 5 階心理学科・心理学専攻のフロア



面接室：面接調査や心理検査の実施が可能

歴史学・地理学専攻

歴史学・地理学専攻は、時間と空間という2つの軸あるいは次元を意識しながら、最高かつ最新の専門知識を体系的に習得します。歴史学コースと地理学コースがあり、学生はいずれかを選択しますが、歴史的認識と地理的認識の融合を意識しながら、問題発見と課題解決に向けて主体的に取り組んでいきます。

歴史学コース

世界的スケールで展開されてきた歴史的現象や日本国内において歴史的に繰り広げられてきた種々の現象に対して造詣が深く、社会や教育の場で知識を生かすことができる知的専門家や高度専門職業人の育成を目指しています。カリキュラムとしては、日本の古代から現代までの各時代史とともに、ヨーロッパ史、アジア史などの外国史と、科学史、文化史などの分野史を配しています。

博士後期課程では、さらに専門性を高め、日本中世史、日本近世地域史、日本近代外交史、現代政治史、比較経済史、東アジア思想史、ヨーロッパ文化史、科学技術史をテーマとする歴史学専門研究演習の科目を用意し、学生の研究課題や問題関心に沿って指導しています。

修士論文、博士論文の執筆にあたっては、研究指導Ⅰ～Ⅲの特別研究科目の際に、アドバイスをするとともに、授業以外でも質問や相談に応じています。

これまでの在学・修了生は次のような研究内容を扱ってきました。「中世末期の異端審問—『魔女への鉄槌 (Malleus Maleficarum)』における魔女像」、『信州の織多・平人—近世・近代における関係の変容』、『満州事変後の天皇の統帥権について』、『19世紀尾張藩における身分的特権獲得者の政治的・社会的役割—尾張国海東郡津嶋村渡辺新兵衛を中心に—』、『15世紀における守護・国人の権力構造とその展開—遠江国を中心に—』、『義和団事件と列強の中国政策』、『対華二十一条要求の再検討』、『国共両党の政権建設比較—1931年から1935年の江西省を対象として—』、『19世紀後半から20世紀初頭のイギリスにおける同性愛観—知識人、上流階級の視点から—』、『抗日戦争時期における中国共産党の政権建設—三三制と延安整風運動の関係から—』、『戦国時代の合戦における騎馬戦の実態』、『織田弾正忠家の居城と城下町政策』、『戦国期今川氏の統治と政治思想—「如律令」体制について—』などになります。

地理学コース

様々な地域的スケールで生じている社会、経済、文化的現象を空間的に理解・解釈できる能力を備え、その能力を社会や教育の場で生かすことができる知的専門家や高度専門職業人の育成を目指しています。カリキュラムとしては、人間と地域の関わりを重視し、経済産業・歴史・都市地理学といった人文地理学分野とともに、地理情報、都市政策、地域政策、自然地理などの応用分野の科目を配しています。

博士後期課程では、さらに専門性を高め、歴史地域論、日本地域産業論、都市地域構造論、都市地域再生論、空間分析論をテーマとする地理学専門研究演習の科目を用意し、学生の研究課題や問題関心に沿って指導しています。

修士論文、博士論文の執筆にあたっては、歴史学コースと同様に、研究指導Ⅰ～Ⅲでアドバイスをしたり、適宜質問や相談に応じています。

これまでの在学・修了生は、次のような研究内容を扱ってきました。「近世後期における陶磁器の地域的流通の比較研究—瀬戸焼と美濃焼を事例として—」、『戦国時代の分国法にみえる地域性の比較研究—今川・六角・大内・三好氏を事例として—』、『「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」の史的考察—名古屋陶業界を中心として—』、『石狩川中流域廃川跡地の土地利用変化に関する研究』、『札幌市における二酸化炭素排出量の試算と低炭素化のポテンシャル評価』、『浜松市沿岸部における津波避難施設の圏域分析—避難に影響する環境条件に注目して—』、『大正昭和期における都市間地域の市街地化過程—岐阜駅周辺を事例に—』、『名古屋市北部近郊における旧字およびその領域の維持』などになります。

これまでに開催したシンポジウム

歴史学・地理学専攻では、歴史学・地理学に関するシンポジウムを数多く開催してきました。国際人間学研究科の他の専攻や、人文学部歴

史地理学科と共催することもありました。テーマは私たちの身近な春日井地域や尾張地方を対象としたり、あるいは国際的な視野に基づく外国の諸国や地域を扱う内容など、多様な取り組みをしていて、一般市民の方々と共に研究成果を報告したり、議論を重ねてきました。このようなシンポジウムは院生にとって、研究方法や議論の仕方などを学ぶ場になっています。

主なシンポジウムのテーマは以下の通りです。「世界のまちづくり」(2011年10月5日)、「地域をむすぶ産業・生活・文化—春日井における街道と鉄道の歴史・地理について考える—」(2011年10月29日)、「林金兵衛とその時代—幕末・維新期の春日井—」(2012年1月28日)、「小牧・長久手の戦いと尾張東部」(2012年12月1日)、「震災後の人と社会」(2012年12月12日)、「下街道—歴史を生かしたまちづくり—」(2015年1月24日)、「地域の歴史・文化を探り、創生を考える」(2017年3月11日)、「庭園を読み解く」(2017年6月3日)、「中国・ヨーロッパ・日本」(2018年2月9日)、「関中平原開発史考—考古学と歴史学からみる「人と水資源」」(2019年1月24日)、「子孫が語る日米の懸け橋—ジョン万次郎の生涯—」(2022年6月29日)などです。

シンポジウムでの報告内容の多くは、国際人間学研究科の『GLOCAL』のバックナンバーに紹介されていますので、ご参照ください。今後も最新の研究成果を多くの方々に知ってもらったり、考えていただいたりするため、教員・院生がともに協力して、シンポジウムの開催を継続していく予定です。



「子孫が語る日米の懸け橋—ジョン万次郎の生涯—」の様子



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 教授

中山 紀子 (NAKAYAMA Noriko)

総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了。博士(文学)。専門は文化人類学。京都文教大学人間学部文化人類学科助手を経て、1999年4月、中部大学国際関係学部国際文化学科に助教授として着任。「親の七光り」ならぬ、指導した学生が偉くなって、「弟子の七光り」で生きるのを理想とする。座右の銘は「人生万事塞翁が馬」。



広がり、転がり続ける研究関心



2024年はトルコ・ 日本外交関係樹立 100 周年

今年2024年はトルコと日本の外交関係樹立100周年にあたり、日本とトルコの両国で様々な記念行事が行われている。トルコ研究者の端くれである私にも9月にトルコのイスタンブールにあるボアジチ大学で行われた「トルコにおける日本研究大会」に招待されて発表するという機会が与えられた。また私自身も6月に本学においてトルコ人を含む4人の研究者による「家族、女性、教育、価値観を軸に、トルコと日本社会を考える」というタイトルの講演会を企画し、記念行事の一環とした。

今年はまた国際関係学部創設40周年にあたり、この講演会は学部の記念行事ともなった。講演会開催に合わせて中野国際関係学部長の粹な(?) 計らいにより、民族資料博物館による企画「中部大学におけるトルコ文化人類学研究—中山紀子教授の調査と研究」が行われ、

私の調査資料や関連書籍が1か月間展示された。展示資料を準備するなかで慌たしくはあったが自分の研究を大きく振り返ることもなった。私の研究関心はむしろトルコを中心とするものであるが、トルコから広がり、また転がり続けているようだった。この身軽さ(あるいは節操のなさ?)こそ私の身上ではないかと思いついた。この機会にまとめておきたい。

偶然から始まる専門研究

高校生のとき同級生に「顔が騎馬民族に似ている」と言われたことから大阪外国語大学モンゴル語学科に入学し、3年生のときにたまたま履修したトルコ語の授業でトルコにはまった。4年生になる春休みに友人と2人で2か月間のトルコ旅行にでかけ、聞きしに勝る親日的なトルコ人に驚くばかりでなく、それまでもっていたイスラームの厳しいイメージが「関西系イスラーム」とでも形容したいような明るいイメージに変わった。もっと長くトルコに滞在したいと考え応募したロータリー財団から奨学金を得ることができたが、あとで聞いた話によると私の採用は賛否両論あったがトルコという珍しい国に行くからということで決定したらしい(中山2014)。

トルコでの1年間半の留学を経て私は大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻に進学した。

トルコのイスラームに関心があったので修士論文のテーマをトルコの原理主義運動としたが、どうしても書けない。ようやく私がトルコで感得したのは明るいイスラームだと思い出し、神秘主義教団ベクタシーにまつわる笑い話にテーマを変えて1年留年はしたものの何とか書き上げた。修了後大阪外国語大学に博士課程はなかったで、ちょうど前年に国立民族学博物館に併設された博士課程のみの総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻に入学した。主指導教官はトルコについて長年文化人類学的調査を行っている松原正毅先生であった。国立民族学博物館は日本でも有数の文化人類学分野の牙城であり、入学できて本当に嬉しかった。

ここでも最初に考えたテーマは修士論文で扱ったベクタシー教団に関わりをもつとされていた宗教的少数集団であるアレヴィーの人たちだったが、マイノリティである彼らを調査することはおそらく大変な困難を伴い、トルコ政府からの調査許可取得も難しいだろうという指導教官の助言のもと、テーマをトルコの女性たちに変更した。

トルコのどこでフィールドワークをするのかは学生自身が探さ必要があった。大阪外国語大学の大学院生の時に京都で知り合ったイスタンブール大学地理学者の奥さんのお姉さんが協力してくれた。黒海地方ゾングルダク県で国民教育省の役人として働いていた彼女が私を村々に連れて回り一緒に探してくれたのである。このフィールドワークは博士論文『農村女性からみたトルコの「近代化」：世俗主義、イスラーム、女性の相互関係』(1996)、『イ



講演会(右)と展示会のポスター



トルコ黒海地方 調査地の村



イラン、ギーラーン州の聖者廟の裏にある湧水



佐伯市で発見された媽祖像

スラームの性と俗：トルコ農村女性の民族誌』（アカデミア出版会、1999）、そのトルコ語翻訳 *Köy kadını, Modernite ve İslam: Bir Antropoloğun Gözünden 1990' ların Türkiye' si, 2. baskı* (Tarih Valkfi Yurt Yayınları, 2021)（『農村女性、近代、イスラーム：ある人類学者からみた1990年代トルコ』第2版、歴史財団 Kult 出版社）として結実した。この研究ではトルコ農村女性の記述もさることながら、「近代化」を超える「現代化」という概念を提示したことが重要であり、現在も考察を続けている（中山 2021）。

アレヴィー研究から水源信仰へ

総合研究大学院大学の博論テーマとしてはあきらめたアレヴィー研究であったが、科研の研究分担者として関わることになった。「アレヴィー関連諸集団とアレヴィー・エスニシティの生成と展開—トルコ及びヨーロッパ—基盤研究（B）2009–2011」（代表：大阪国際大学 佐島隆）と「アレヴィー諸集団の境界と認識のコンフリクト及びエスニシティの変容—中東と欧米—基盤研究（B）2017–2020」（同）である。イスラームの多数派スンナ派と異なり、アレヴィーには儀礼に男女が同席する、女性がスカーフで髪の毛を隠さないなどの特徴がある。アレヴィー女性のありかたを調査するのが私の担当であったが、ある調査でトルコ中部のトゥンジェリ県に行き、当地に住むクルド系アレヴィーの女性たちが静かに水源に行んでいるのに気が付いた。アレヴィーはイスラーム以前の自然に対する信仰をもっていると言われていたが、それを目の当たりにした気持ちだった。

その後イランやウズベキスタンに行く機会を得た。イスラーム体制が盤石だと思われがちなイランであるが、人々はモスクよりイマームザーデという聖者廟に行くことを好んでおり、さらに裏に湧水（水源）がある聖者廟も

存在する（中山2018）。ウズベキスタンにおいても湧水のある場所がイスラームの聖地となっている例が散見され、イスラームに覆われた自然崇拝が実感された（中山2019）。

水つながりで媽祖研究へ、そして故郷をもとにしたライフワークへ

水源信仰に対する興味関心が大きくなっていったところに、古巣の京都文教大学の元同僚から媽祖信仰に関する共同研究への誘いがあった。媽祖とは中国福建省由来の女神でもに航海の安全を司る、いわば水の神である。水つながりでまずイスラームの水の聖者であるフズルとの比較を試みた（中山2021）。フズルはキリスト教では水と緑の聖者とされる聖ゲオルギウスと同一視されている。

いっぽう共同研究としての媽祖研究は、中国から日本各地に伝わってきた媽祖信仰の受容と展開、変遷などの様相を短期間ではあるが現地調査することだった。すでに媽祖像の存在が知られている青森県大間市や長崎県平戸市に加えて、私の故郷である大分県佐伯市にも赴いたところ、媽祖像を所蔵している人物に巡り合えた。媽祖像とともに所蔵されていた文書によると、佐伯藩の藩祖毛利高政が朝鮮出兵の際に果たした軍功に対し、豊臣秀吉が戦利品として得て高政に与えた明船のなかに媽祖像があったという（中山、林2023）。これが事実かどうかは不明であるが、少なくとも媽祖研究においてこれまで注目されることの少なかった中九州で、それも私の故郷である佐伯市で媽祖像と文書が発見されたことは重要で私は大いに興奮した。小さな町だと思っていた故郷での大きな発見。私のライフワークのひとつとなった。

またこの佐伯市で発見された媽祖像は、長崎県などでみられる媽祖像と異なり、観音に、より正確には魚籃をもたない魚籃観音に酷似

している。魚籃観音はインドでは男性とみなされていた観音が中国大陸で女性「性」化する際の牽引役となったのではないかと。現在このテーマで共同研究者が考察・執筆中である。

トルコの女性研究から宗教的少数集団のアレヴィー研究を経て水源信仰への関心にたどり着いた。水源信仰はイスラーム以前の自然崇拝を想起させ、キリスト教の聖者にまで広がる（おそらくゾロアスター教にもさかのぼるだろう）。航海守護神である媽祖研究からは故郷の佐伯につながり、佐伯で発見したその像は観音のジェンダーを考察する契機となった。このように偶然から始まった私の研究関心は広がり、転がり、また戻っていく。これを誇らなくてもいいかもしれないが、面白い人生だと思っている。

引用文献

- 中山紀子2014「トルコというフィールド：騎馬民族からイスラームまで」中部大学国際関係学部夢構想委員会編『「国際」という夢をつむぐ：中部大学開学50周年・国際関係学部創設30周年紀年論集』pp. 203–209
- 中山紀子2018「水への希求心—イランにおける2015年春フィールド日誌より」『貿易風』13: 81–94
- 中山紀子2019「イスラームに覆われた自然崇拝——ウズベキスタンの水源信仰に関する2017年度基礎調査」『Afro-Eurasian Inner Dry Land Civilizations』7: 39–54
- 中山紀子2021「『農村女性、近代、イスラーム：ある人類学者からみた1990年代トルコ』（第2版）自著紹介」『貿易風』16: 118–124
- 中山紀子2021、潘宏立訳「希茲魯信仰と媽祖信仰関係探討—基於伊斯蘭水之聖者の關聯角度（ヒズル信仰と媽祖信仰：イスラームの水の聖者との関連から）」『媽祖文化研究』2021年2期: 32–38
- 中山紀子、林雅清2023「佐伯藩内における媽祖信仰の受容—大分市伊東家伝来天妃像の伝承を中心に」『総合社会学部研究紀要』24: 33–41



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 教授

高 英求 (KOH Youngku)

1991年 京都大学大学院経済学研究科博士後期課程を単位取得退学。『貨幣の制御 流動性の理論・思想史』で博士（経済学）（京都大学）。



経済学の「内」と「外」 —経済理論とは何なのだろう—



「研究」より「学問」

原稿のテーマが、「私の研究」ということで、「研究」というものについて、いろいろ考える機会になった。

研究という言葉には、けっこうな重さがある。長い間、その重さがつらかった。最近では、「研究」よりも、「学問」という言葉の方が好ましく思えてきた。「研（み）がいて究める」よりも、「学んで問う」という方が、しっくりくる。

もともとの言葉の成り立ちをよく知らないのですが、見当違いのことを言っているかもしれないが、とにかく、謙虚に学び、問い続けることができれば、という心持なのである。

学ぶことの奥深さ

もう4年以上前のことになるが、2020年に、ようやく念願の単著を出すことができた。『貨幣の制御 流動性の理論・思想史』（文眞堂）である。

遅まきながら単著が出せて、ほっとしたし、ほんとうにうれしかった。文眞堂から本を出せたのも、幸せなことだった。

ただ、これまでの研究をまとめることで、かえって大きな課題が現れてきたような気がする。思い考えてきたことを絞り出すように書いた本なのに、（関西弁でいうと）「ほんで、どやねん」、というような、内なる声が聞こえてくるのである。「これでええのか?」、「もっと深いところに行かんでええのか?」、という声のようである。

新たな課題に向き合うのは、つらいところ

がある。でも、そうできたら、うれしい。とりあえず本を出せたからこそ、新たな課題に向かっていける、ということなのかもしれない。

学びというのは、終わりのないものだ、とつくづく思う。苦しみながら齢を重ねて、ようやく出せた本であるだけに、この実感は、なかなか重い。

「勉強したい」

先日、学生時代のゼミの友人から聞いた話である。同門の研究者に、「大学を定年で辞めたら何をしたい?」、と聞いたところ、「勉強したい」、という答えが返ってきたという。それを聞いて感動した、と話してくれたのだが、私も感ずるものがあった。

論文・本を書かなければ、という強迫観念のようなものが、研究者には、つきものだと思う。それでも、学問というものの根底にあるのは、何よりも、この「勉強したい」「学びたい」、という気持ち、姿勢なのだろう。

高みに立った話よりも、学ぶ喜び、面白さ、そして奥深さを伝えてくれる話を聞きたい。私自身が感動を覚えるのは、迷いや悩みを抱えながら、紆余曲折を経て思考を深めていく、そうした学者の歩みであり、それを率直に語ってくれる人である。

結論だけに学ぶのではない、という思いが強くなっている。問いを見つけ、道を探り、誠実に歩みながら、大切なことに、何とかたどり着こうとする、そういう人間的な営みに、心を打たれるのである。

理論というものは……

ここで少し、「理論」の話をしたい。経済学、もっと広くいうと、文系における理論とは、何なのだろう、と最近つくづく思う。経済学は、おそらく文系の中でも、もっとも理論志向が強い分野だろう。数学的なアプローチがよしとされ、その傾向は強まるばかりである。

しかし経済学は、本当の意味で発展してきたのだろうか。精緻な数理モデルは、何をどの程度、説明してくれているのだろうか。社会を見る眼を、歴史を洞察する眼を、どれくらい豊かにできるのだろうか。

こういう問いに対して、最新の理論の有効性を説明してくれる専門家は、きっとたくさんいるだろう。しかし、誰にでも分かるように、普通の言葉づかいで、多くの人に納得のいく語り方をしてくれる経済学者は、どれくらいいるだろう。

経済学で語られることが、どうもしっくりこない、という人は、少なくないだろう。それを専門知識の不足のせいにするのか、あるいは経済学のアプローチそのものに、見直すべきところがあるかと考えるか、その違いは大きい。これはもちろん、経済学者の端くれ（であるはず）の私自身に、重くのしかかってくる問題である。

経済学者による理論批判

理論、というものについて、もう少し考えてみたい。いったい理論とは、どういったもので、どのように用いられるべきものなのか。理論

を用いるとき、注意すべき点はないのか。

経済学には、理論をめぐる論争がつきものである。それは、どの学問分野でも同じかもしれないが、経済学においては、政策上の争いに関わるので、他の分野よりも現実面での影響は大きい。

学問上の論争は、「どの理論が正しいか」、ということをめぐる行われることが多い。何を当たり前のことを、と思われるかもしれないが、わざわざこんなことを言うのは、それとは違う次元の論争、もっと深いレベルの論争もある（あった）からである。

経済学の分野では、19世紀にリカードとマルサスの間で行われた論争がよく知られている。しかし、その真の論点は何だったのか、実はほとんど理解されてこなかった。論争から100年以上経って、それをあらためて問うたのが、ケインズであった。

ケインズは、経済学における「理論」とは何なのか、ということの問題にしたのである。リカードとマルサスの理論観には、実は大きな隔たりがあり、そのために二人の論争は、まったくといってよいほど噛み合あわなかった。それこそが、ケインズの強調したかったことだと見てよい。

おそらくケインズの真意は、経済学における理論の意味を問い直すことにあった。経済学の理論というのは、ある程度のところで止めておいた方がよい。それこそが、ケインズの論じたかったことではないか。

こうしたことは、ケインズを、そしてリカードやマルサスを理解するためだけでなく、人間・社会に関する理論とは何なのか、という問題を考える上で、重大な示唆を含んでいるように思う。

経済学の「外」に目を向けると

では、「外」の世界からは、経済学はどのように見られているだろうか。経済理論は数学的に精緻化されてきたが、はたしてそれは、広い「外」の世界で、魅力的に映るものなのだろうか。

拙著で述べたことだが、生身の人間が集団的に織りなす経済というものを、現代的な狭義の経済学だけで扱うことには、大きな限界がある。無理がある、と言った方がいいかもしれない。

これに関連して、心理学の河合隼雄と、免

疫学の多田富雄との対談が示唆に富んでいて、大きな刺激を受けたので、紹介したい（河合隼雄他 [1997] 『こころの声を聴く—河合隼雄対話集』新潮社）。

この対談で多田は、自ら変化をもたらす体の自己組織化に注目して、免疫を「スーパーシステム」という概念で説明しているのだが、その考えが経済や言語にもあてはまるのではないかと、次のようにいう。

「経済活動とか言語形成とかいうのは、生命と非常によく似ていて、ひょっとすると、私はあいうものも生命なんじゃないかと思っています」（183頁）。

これを受けて河合は、経済学・社会科学を痛烈に批判する。

「経済なんて超システムだと僕は思うんです。ところが今までの経済学は、古いシステムのモデルを考えて経済学を発展させたから、経済学は発展するけど、それはあまり経済の役に立たないんですね。そんなこと言ったら経済学者に怒られますけど。それは、社会科学全般の犯しているものすごい大きい失敗ではないかと僕は思っているんです」（183頁）。

河合によると、物質を扱っているかぎりは、「いわゆるシステム、固いシステム」で考えることができた。しかし、人間を扱うときに、そのような方法は大きな限界をもつ。さらに河合の発言を聴こう。

「それがあんまりうまくいくので、人間が関係する社会とか経済とか、家族とか、そういうものに適応したシステム論で勉強してきた。役に立たない学問をたくさんやったのではないかというのが僕の考えなんです。われわれはすべからず人間のことをやっているものは、スーパーシステムで考えるようにせねばならないと思います」（184頁）。

経済学者の端くれなら、こうした「外」からの批判に反論せよ、というお叱りの声が聞こえてきそうである。だが、私にとって、この批判はとても痛い。というよりも、「たしかになあ」、という思いが強い。本質を突く、みごとな社会科学・経済学批判になっている。

ちなみに、注意しなければならないこともあ

る。ここで河合は、ユングの「シンクロニシティ」というアプローチについて語っている。これは、個人にとって偶然性をもつ意味を重視するアプローチのようなのだが、「本当？」と首をかしげてしまうところがある。

こうした深層心理学にしても、経済学にしても、「全てよい」というアプローチは、なかなかないように思う。どのような理論・思想にも、人間的な刻印がある。その刻印が強烈であるほど、慎重かつ良心的に対話をしていくことが必要とされるのだろう。

学ぶ、というのは、そうした人間臭さ、とらえどころのない人間の複雑な在りよう、そういったものまで含めて、全体的にとらえようとするものなのかもしれない。

人間をどうとらえるか

あまりに当たり前のことなので、こういうことを言うのは気が引けるのだけれど、要するに、人間を扱うには、とても深い人間理解が必要とされる、ということになるだろう。

人の心の奥底へと潜っていくと、不思議なもの、おそろしいものも出てきそうである。主流派経済学のように、常に合理的に計算・判断する人間、という想定にとどまっていられるなら、その方が楽だろう。

しかし現実には、不合理（あるいは不条理）と言いたくなることが間違いなくあるし、そうしたことは、むしろ本質的なものといってよい。

生身の人間を中心に据えるなら、不合理と思われるものにも目を向けなければならない。そのときには、人間がもつ闇や悪も直視しなければならなくなる。浅い人間像に止まっていると、思わぬところで足をすくわれるのではないか。

長い歴史の中で、人は自らの情念と、いかに向き合い、いかにそれを制御しようとしてきたのか。そこには、どのような智慧があったのか。引き続きマネーを一つの切り口として、考えていきたいと思っている。



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 教授

澁谷 鎮明 (SHIBUYA Shizuaki)

名古屋大学大学院文学研究科史学地理学専攻満期退学。博士（地理学）。専門
は人文地理学、韓国地域研究であり、東アジア風水地理思想の展開、日本人
作成の近代都市図研究に関心を持つ。著書に『東アジア風水の未来を読む：
東アジアの伝統知識風水の科学化（韓文）』（共著）、『自然と人間の環境史』（共
著）、『現代韓国の地理学』（共著）など。



東アジアの風水に関する学術的研究の評価： 「迷信」は研究すべきでない？

「風水」研究への評価

これまで筆者は、かなり長いこと、人文地理学の立場から。韓国を中心とした「風水」に関わる学術的研究を続けている。この風水を研究テーマにしたために、研究を始めた当初、さまざまな肯定的・否定的両面から多くの評価をいただいた。筆者は、この厄介な研究テーマに「振り回され」つつ、得難い経験をするとともに、興味深い場面に遭遇してきたことに最近気がついた。これは、自身の研究スタンスや所属分野である地理学の特長、学術研究と社会とのかかわりに絡む重要な内容と思うので、昔語りになって恐縮だが、以下に述べていきたい。

風水は中国起源の地相術で、気や脈、陰陽五行説にもとづいて、良い場所を選ぶための、伝統的な立地論・空間論としての側面を持っている。またこの風水は東アジア全域に広まり、各地の伝統的な自然観や環境観とも関わり、東アジア各地の伝統的景観・空間を形作る要因として評価されてもいる。

他方で風水はこれまで「取るに足らない迷信」であるという批判も受けており、学術的研究の対象とすること自体憚られるような傾向もある。このように怪しげな「風水」にのめりこみ過ぎている（ように見える？）当時20代後半の院生であった筆者は、アドバイスや何かコメントしてやりたくなる存在であったらう。

東アジアの地理思想としての「風水」

「風水」について今少し説明を加える必要があるだろう。風水は「地理」「堪輿」等とも呼ばれる中国起源の地相術である。陰陽五行や「気」の論理を判断基準とし、良好な気の集まる場所「吉地」を探し、良好な方位「吉方」を選んで、墓地や住宅、集落を造営することで、結果としてそこに葬られる死者や、住民に繁栄をもたらす「開運」とされる。この「開運」云々が問題で、前述のように「風水は迷信で怪しげなもの」で、「研究すべきではない」とされた基本的な原因である。

しかしながら、この風水と関わって造営されたり、環境改善が行われたりした墓地・住宅・集落などの造営物（図1・2）は、枚挙にいとまがない。また風水による地形把握の方法は、東アジア各地の近世までの地誌書や古地図のような地理情報（図3）や、族譜（家系図）に多く表れる。ある程度風水の素養がないと、東アジアの古い地理情報にある記述の意味が読み取れなくなることもあるだろう。

さらに中国起源ではあるものの、風水は東アジア全域に流行し用いられた。その際に内容と適用分野で取捨選択が行われ、地域差が生じている。例えば現在日本では風水イメージは「インテリア占い」かもしれないが、韓国では風水と言えばおそらく「墓」がイメージされるであろう。

これは東アジアの風水に「2つの方法・3つの対象」があるためである。風水でよい場所や方位を選ぶ際には、①地形を気の流れとしてとらえ良い地点（明堂・穴）を選ぶとする「形

法」と、②陰陽五行説と易を用いて良い方位を選定しようとする「理法」の二つの方法がある。

他方、良い場所や方位を選んで何を作るのかによって呼称が異なる。一般的にA.死者の居所である墓を作るための「陰宅風水」、B.生者の居所である住宅を作るための「陽宅風水」、C.生者が集まって住む集落を作り整備するための「陽基風水」があるとされる。

日本の場合は上記②・Bが強く、韓国（朝鮮）の場合は上記①・Aが強いわけである。地域ごとに「風水」はかなりの地域差がある。他方共通点もあり、例えば、上記①の形法があれば同じような場所を良い場所と考えるようになる。空間や環境について関心を持つ地理学者には本来重要なテーマであると思う。

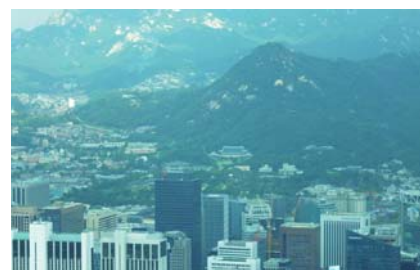


図1 風水の論理で説明されるソウル王宮の立地



図2 風水の論理で造営された朝鮮時代の王陵

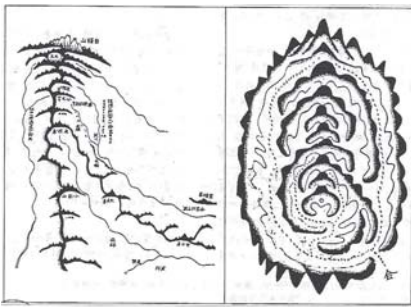


図3 古地図にあらわれる風水の「脈」の論理

「風水」研究はほどほどに？

筆者は某国立大学の海外地域研究を行う修士課程で「地理学者ならではの韓国研究を」と考え風水研究を志した。根拠のない自信のあった筆者は、「どうせなら変わっていてドロドロとした韓国の本質に迫るテーマを」と考えての選択だったように記憶しているが、後から考えるにドロドロし過ぎていたようである。

その後、他大学の博士課程に進んだ筆者は、修士論文を基に、1991年に初めての審査論文「李朝邑集落にみる風水地理説の影響」を投稿した。朝鮮王朝期の行政拠点集落の空間構成や景観に風水が及ぼす影響についてまとめたものであったが、これが問題であった。後に聞いたところでは、自分の論文をめぐって学会の中では裏で大議論になり「こういう論文は載せるべきでない」と強硬に主張する委員がいて揉めているということであった。こちらとしては、揉めているところで審査してもらっていたわけで、若い院生としては怖いことこの上ない。

論文は半年以上かけて何とか学術雑誌に掲載されたが、好意的に考えてくれた委員もいたのか、テーマそのものが何か問題になることはなかった。それどころか、翌年の同じ学会誌の「学会展望」でこの論文が多くの評者に紹介され、「本格的朝鮮研究であると感じる」と過分な誉め言葉をいただいた。大学院の同級生に冗談半分で「おめでとう」と言われたのを覚えている。まるで激しく上下するジェットコースターに乗っているようであり、当時は状況の変化を見守るのが精いっぱいであった。

この評価は風水というより韓国語の文献を比較的丁寧に読み込んでレビューを行ったことが評価されたのかもしれないが、ここでようやく筆者は、自分が肯定的・否定的評価が入り乱れる特別な(変わった?)研究をしていることに気付いた。

そうこうしているうちに、今度は日本で「風

水の学術研究ブーム」が起こり、さらには数年遅れて「風水占いブーム」が追いかけてきた。するとそれまで以上にいろいろな評価が押し寄せるようになった。

「授業で占いをするわけではないですよ」と学内で尋ねられたり、共訳の翻訳書『韓国の風水思想』を出した際には、初めてお会いした先輩筋の研究者らしい方に、「出会い頭に怒られる」という経験をしたりしたのもこの頃である。学会で上記の翻訳書を勝手に売っていると誤解されたようだが、そのついでに「韓国を研究するのになぜまた風水なのか」「君が風水師に入門するなら認めてやろう」というコメントをいただいた。

さらには、これも後から聞いた話であるが、某大学への教員採用審査の際に、筆者の研究テーマが風水であると知った審査委員が「ちょっと風水は・・・」と言ったとか、またほかの大学では「安易に風水研究に走ってしまう院生が出るのでは」という意見があったと聞く。どの程度本当なのかは不明だが、何らかの悪影響があると思われるのかと驚いた。

筆者は特に気の強い方ではないものの、このあたりまで来ると筆者自身、慣れてきたらしく、何とか次第に「打たれ強く」なって、やや理不尽なコメントを頂いても気にならなくなってきた。またむしろ自身の研究テーマが他の研究者のスタンスや、「科学」のありようなど、批判する者が依って立つ分野を脅かすような危険なものをはらんだ重要でスリリングな研究をしているのではないかと思い始めた。

このあたりの風水研究への評価の論理やスタンスは、筆者の専門分野が、空間、景観をキーとして自然・社会・人文科学が混在する地理学であることが一つの原因であるかも知れない。

「そんな怪しげな理由で現実の景観や土地利用は変わるわけではない」というところであろうか。また特に自然科学を方法論として持つ研究者には、同じ専門分野という身近なところに、「科学的」ではない怪しげな研究をする者がいるということは、看過できない大きな問題であったのではないだろうか。

これ以外にももちろん筆者の実力不足や、筆者に、当時の風水ブームに乗った、軽々しい研究(者)という印象があったためとも思う。

海外の風水研究者の苦悩

それでも日本で風水研究をやっている分には「変わった研究されてますね」で済むのである

が、占いとしての風水がそれなりの力を持っている韓国や、迷信への風当たりの強い中国ではそうではないようである。

例えば韓国の知り合いの研究者が、一般向けの市民講座で、学術的な風水研究の話をしたところ、講演後聴衆の一人から「先生はいいたい、風水を信じているのですか?いないのですか?」と問い詰められたという。風水占いを信じる人々と適切な距離を取るのには、日本よりもっと大変で、学術研究に余分に気遣いを強いられていると言えるだろう。

そもそも韓国では風水の学術研究がはじめられた1990年代にすでに論文として風水研究批判がされている。「そんな迷信を研究していると国が亡ぶ」というような内容であったと記憶している。

また以前日本で行われた東アジアの地理学に関する国際シンポジウムにおいて、日本人研究者の「風水も(一種の)地理学」というコメントに、中国から参加した研究者から「風水は地理学ではない!」と強く否定される場面を見たことがある。

風水研究は進化したか？

ここまで記したようなことがあったためか、近年筆者は、当初迷信として批判もされた風水がいかにか現代東アジア社会に受容されたかについても関心をもち、新たなテーマを得ることとなった。ここまで記したようなこともあながち余計な苦労ではなかったのかもしれない。

また最近、『人文地理学事典』『歴史地理学事典』が出版されるが、筆者にも依頼が来て執筆した。依頼された項目は前者が「風水と地理学」、後者が「東アジアと日本の風水」「聖なる地の認識-東アジア」であった。それなりの重要性は評価され、立ち位置ができたのかもしれない。

韓国でも「風水占い」がやや過去のものとなったせいか、風水は「民俗」という容れものに入り研究はしやすくなった印象がある。時が経つにつれテーマの評価は変わるということだろうか。このような意味で東アジアの風水研究は進展しつつあるのかもしれない。

引用文献

- 崔昌祚(三浦國雄監訳・金在浩、渋谷鎮明共訳)『韓国の風水思想』、1997、人文書院
 渋谷鎮明「李朝邑集落にみる風水地理説の影響」、1991、人文地理43-1、pp.5-25
 渋谷鎮明「現代韓国における風水地理思想に関する学術的評価—地理学分野の業績を中心として—」、2023、貿易風18、pp.46-54



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 教授

中野 智章 (NAKANO Tomoaki)

南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻博士後期課程修了。博士（文学）。専門分野はエジプト学、考古学。古代エジプト文明の盛衰やヨーロッパに与えた影響について研究している。南山大学で人類学（主専攻：考古学）、オックスフォード大学でエジプト学を学び、日本学術振興会特別研究員、古代オリエント博物館学芸員を経て中部大へ。エジプト展の監修や、ピラミッドや神殿の遺跡調査を行っている。



エジプト人気の裏側で



はじめに

エジプト考古学を専攻しているという、ロマンがあっていいですね、と言われることがある。おそらくは、発掘に伴う華やかな発見のイメージが強いのだろう。ただ、個人的にはツタンカーメン王墓のような世界的に知られる遺跡を発見したいなどという大志を抱いたことはなく、幼い頃の想いを振り返ってみると、むしろミイラのような怖いもの見たさだったり、象形文字のような不思議なもの見たさだったりした面が大きかったように感じる。

小学生の時に名古屋市博物館で見たカイロ博物館の展覧会では、遺物に彫られていた象形文字ヒエログリフの不思議さに興味がわいてその意味を知りたくなり、自宅に置かれていた、父が少年時代に読んだという山川惣治著『少年王者』の復刻版では、怪人アメンホテップが独特の挿絵とともになんとも言えぬ不気味さを醸し出していた。時代は移り、今の学生が抱く古代エジプトのイメージはONE PIECEやMARVELに登場する不思議な文字や神々ということのようだが、数十年が経過した今でも何かしら共通する面はあるのかもしれない。

「エジプト学」と「エジプト考古学」

さて冒頭で「エジプト考古学」と記したが、本稿のプロフィール欄にもあるように、自身の専門分野は「エジプト学、考古学」としている。「エジプト学（Egyptology）」とは、古代エジプト文明を研究する学問分野全般を指し、

考古学はその一部分である。例えば、発掘調査を行うのは考古学だが、そこで発見された遺物や遺構に象形文字などが記されているれば、それを解読するのは文献学（碑銘学）であり、壁画に記された図像や出土した彫像などを解釈する際には美術史の出番となる。神々であれば宗教学、建築を細かく見るのであれば建築学など、要は一つの文明全般を扱うために関連する学問分野は多岐にわたる。

しかしながら、今も昔もそうした「エジプト学」を専門的に教える学科は国内に存在しない。大学選びの際には、「エジプト考古学」や「人類学」といった授業名が記されていた大学案内を見て地元の大学に進学したが、そこで扱われていたのはその名の通り「エジプト考古学」であったため、授業を担当されていた非常勤講師の屋形禎亮先生（当時信州大学教授）に書籍をご紹介頂き、歴史や象形文字の自習に励んだ。ただ、あくまで自習に過ぎなかったため、そのまま同じ大学の大学院に進学すると同時に休学し、イギリスの大学院で念願のエジプト学専攻に留学した際も、結局は学部のエジプト学科で一から勉強をやり直すこととなった。

そこで気づいたのは「エジプト学」の基本はまず文献学であり、象形文字の読解力が何より重要とされていたことであった。もっともこれはその留学先の教育方針であり、必ずしもエジプト学科を擁するすべての大学に共通するものでないことは後に知るところとなったが、それは文字を通して当時の人びとの思想や世界観にふれることが、将来的にどのような学問分野を専門として古代エジプト研究に携わ

るにせよ、最も重要な基礎学力となるという考え方に沿ったものであったように思われる。

かくして学部授業の大半は数種類ある象形文字の習得に費やし、加えて「歴史」、宗教や美術など様々な分野を学ぶ「文明」、エジプトで発見されている数多の「遺跡」、実際に発掘された遺物を用いた「博物館」などの授業を履修した。

ただ、それだけでは単に知識を増やすに過ぎないため、隔週で与えられた課題に関する5ページから10ページほどのエッセイ（小論文）を書き、論文の執筆法を学んだ。テーマはエジプト学上の重要なトピックや未解決問題などと幅広かったが、課題には最初に読むべき書籍や論文のリストが示されており、それらを読んで研究史を把握した上で自身のアプローチを考え、そこから関連する文献や遺物、遺跡にあたって自身の仮説を証明したり、研究の可能性を示したりすることが求められた。

日本の大学でエジプト文明を学び始めた当時、考古学で大学に就職しようなどと考えるのは宝くじに当たるようなもの、ましてやエジプト考古学では食っていけないと指導教員に忠告されたが、「エジプト学」という学問分野が確立し、ポストもあるように（留学当時は）感じていたイギリスでも、エジプト学科に入学するのはかなりの賭けだったようで、1学年の人数は私を含め3人に過ぎなかった。

「日本学」と「エジプト学」

そのような経験から感じたことは、いわゆる世間一般的な古代エジプトのイメージとは異

なり、発掘や発見といった事柄はあくまで研究の前段階に過ぎないということであった。「エジプト学」における研究では、得られた資料をさまざまな方法論や先行研究等で得られた知識などを駆使していかに読み解き、新たな知見を得ることができるかが重要である。数年前に中部大学から海外研究の機会を与えて頂いた際には、かつての学び舎に戻り、エジプト学が所属するのと同じ東洋学部（Oriental Studies。現在はAsian and Middle Eastern Studies「アジア中東学部」に名称が変更された）の教員とも交流して日本学の状況を教えて頂いたが、そこでもまずは日本語の習得が最優先で、それに加えてエジプト学と同じくさまざまな知識を身につけ、エッセイ書きや卒業研究を通じて自身の専門や研究の方法を身につけていくとのことであった。最近ではアニメ人気もあって日本について学びたい学生も増えたそうだが、文字の読み書きを含めた日本語の勉強に嫌気が差してしまい、中退する学生も多いようである。

ただし、学部を卒業したからと言ってすぐに就職先が見つかるとは限らない。古代エジプトより現代日本を専門とする方の就職先が多いことはイギリスでも確かなものの、研究者を目指すとなると博士号の取得は必須である。学部からそのまま大学院に上がるには相当優秀でなければならない、エジプト学科を卒業してその道に進まない場合にどういったところへ就職するのか、興味があって何人かに尋ねてみたところ、小学校などの教員と答えた学生が複数いたのには驚いた。イギリスでは、大学卒業後に1年間の教職専門課程を経て教員資格を取得するのが一般的だったように記憶しているが、エジプト学科のように非常に専門的な知識を学ぶことに時間を費やす学科の卒業生がそうした職業に就くということは、知識の獲得法や研究の方法を広く身につけた人材が青少年の教育に携わるということで、根拠を示し

た上での思考の論理性を重視するイギリスの教育方針を端的に表しているように（当時はせいぜい20代前半だったため、狭い知見ではあったものの）感じた次第である。

学問的な誤りをどう正していくか

翻って今の自身が置かれた環境を考えてみると、古代エジプトを研究対象とする教員で現在大学の専任職を得ているのは自身を含め全国に7人ほど。ただ、筆者以外の教員は歴史学科など特定の学問分野を専攻する学科の所属であり、国際学科といった広い学問分野を扱う部署で教育に携わっている者はいない。かつてコロナで中断するまで、年に2回東京と名古屋（あるいは大阪）で開催していた国内のエジプト研究者を集めた研究会では（名古屋では中部大学の鶴舞キャンパスを使わせて頂いていた）、20周年記念の折に「古代エジプト研究をどのように大学で展開していくか」というテーマでその7名がそれぞれ自身の考えを述べたが、他の教員がいかに古代エジプトの専門的な教育を展開していくかと熱く語ったのに対し、私はいかに古代エジプトの学びを通じて知識の獲得や研究の方法を身につけさせるかという話をしたところ、出席者からほとんど反応がなかったのを寂しく感じた覚えがある。

もっとも、そのような話となってしまったのには理由があり、巷ではエジプトというと視聴率が期待できる面もあるからか、日本のテレビやインターネットで流れている古代エジプトに関する情報などは実に玉石混淆で、嘘の情報にすっかり毒されてしまっている学生も多い。

さすがにインディ・ジョーンズ（と言ってもすでに40年前の映画で、私も中学生の頃に見たくらいだが、意外に再放送で見たという学生も多い）など、古代エジプトの発掘調査を題材に片っ端からお宝目当てで遺跡を破壊していく映画は真実でないと感じるようだが、研究者（と世間一般では見られている人たちが）絡む番組となると安易にそれを信じてしまう人が多いのは、いまや他の学問分野についても似たようなことがなほにしもあらずなのだろう。

古代の墓に入っていく、いきなり目の前でミイラの蓋を開けて見せたり（実際の調査では、記録を取った上で行う作業である）、何の根拠もない説をまことしやかに語ったりと、そこまで来るとエジプトを取り上げて頂けるのは嬉しいものの、時には迷惑ですらある。おまけに

今ではSNSやYoutubeなどでもその手のものが山ほど流されているのだからたちが悪い。

おかげで、授業では一つ一つ根拠を示しながらそうした言説の何がおかしいのかを話すところから始めるのが昨今の状況である。そういう自身も、多くの人びとを対象とするような場に出る際には自戒しながら言葉を選んで発言するようにしているが、ひょっとすると誤った情報を伝えてしまっていないかと気になるほど、マスメディアの影響力は大きい。それにはやはり知識の獲得や研究の方法といったものを疎かにせず、正しく伝えていくことを自身の学生相手だけではなく、より世間一般に広めていく必要があるように感じている。

なお同じ考古学でも、日本考古学は旧石器遺跡の捏造問題に端を発し、一般への情報発信がこの20年で大きく進展を遂げている。最近では『土偶を読むを読む』という書籍が目をつけた。これは、2021年度のサントリー学芸賞（社会・風俗部門）を授賞し、マスメディア等でも大きな話題となった『土偶を読む』という書について、考古学の専門家たちがその内容に疑問を呈し、それぞれ根拠を示しながら丁寧に解説を付したものである。

この『土偶を読む』では、従来の見かたとは別に、土偶が植物の形状を模して制作されたものであることが新たな見かたとして示されているが、実際の考古学的な証拠とは相容れない点も多く、受け入れがたい。

もっとも、こうした学問的な指摘を一般書について行うのには非常に労力が掛かる。いみじくも著者の一人である望月はその苦勞の一端を「はじめに」で述べているが、いわゆる文系の学問の場合、時に資料についてさまざまな解釈の可能性がある、答を一つに決めきれない面が確かにあるとは言え、世間に広まった明らかな誤りについて真っ向から挑んだ姿勢は高く評価されるべきであり、それはエジプト学の分野についても他人事ではなくなりつつある。

エジプト人気の裏側で、そんなことを考える機会が最近ではとみに増えた。については専門分野を教える我が大学院国際人間学研究科ではなおさらのこと、自身で根拠となる資料を収集した上で丹念に分析し、研究を遂行できる人材、正しい判断能力を持った研究者を育てていきたいと思う。

引用文献

竹倉史人（2021）『土偶を読む』晶文社。
望月昭秀他（2023）『土偶を読むを読む』文学通信。



ギザの大ピラミッドとスフィンクス

平井 芽阿里 (HIRAI Meari)



318-319)。

本研究はこのような沖縄のユタ研究や日本のシャーマニズム研究の延長線上に位置付けられるものである。その上で、ユタの「現代的展開」に特に着目した〔池上1999: 470〕。

現代沖縄のユタとは

ユタになる人には、一定の共通するパターンがある。例えば、幼少期には多くの人が病弱で、幽霊や神々を目撃するなど「サダカウマリ（霊力の高い生まれ）」としての傾向がある。そして20代から30代の頃に、夢などを通して神々を目撃する。

ユタは琉球政府から人を惑わす存在として禁圧され、差別されるなどした歴史が長く、過酷な体験をするイメージが強い。そのため神々がユタになるよう伝えても、快く承諾する人はほぼおらず、拒否した途端に「神狂い」や「神祟り」と表記されるほどの恐ろしい「カミダーリ」という試練が与えられる。

カミダーリとは、通院しても決して完治しない身体の痛みや不調、自身や身内の怪我、事故、離別、死別などの体験を指す。あまりの苦しさに藁をも掴む思いでユタに助けを求め、ユタの導きによって自身の神を探し、神の道に入ることを決意する。その瞬間、カミダーリは不思議とピタリと収まり、次第に家に客が訪れるようになる。

ユタになった後は、神々や先祖と交流することで依頼者からの各種祈願や悩みに対応し、カミダーリ経験者に正しい神を選定したり、ユタになった人に手順を教えたり修行を手伝うなど、新米ユタの指導も担う。また、客の依頼に対応する傍ら、再びカミダーリにならないよう、御嶽などの聖地を巡拝する霊的修行も欠かしてはならない。

これに対し現代では、サダカウマリでカミダーリを経験しながらもユタにならない人、カミダーリを経験しないユタの存在がある。また、ユタの多くが先祖を正しく祀っていないことを不幸や災いの理由にしてきたのに対し、現代では先祖や墓参りを重視しないユタも出現している。他にも、タロットやハーブを使用するユタ、オーラ鑑定やインターネット占いな

どに精を出すなど、手法も多岐に及んでいる。

このような人々は、ユタの伝統的な定義に当てはまらないことから、どちらかと言えば直接的な研究対象からは外れてきた傾向にあった。それゆえ、これまで膨大な研究蓄積がある沖縄のユタの現代的変化を見過ごす危険性があった。

ユタの境界を生きる人々

そこで2020年に刊行した拙著『ユタの境界を生きる人々』では、サダカウマリやカミダーリなどユタの成巫過程と類似する点を持ちつつ、超自然的存在と直接交流・接触しながらユタ以外の新たな役割を生きる人を「ユタの境界を生きる人々」と定義づけた〔平井2020: 209〕。

本研究で取り上げたのは、宮古島出身の40代女性、「佳宮瑞樹」さんのライフストーリーである。これは神々が授けた「神名」であり本名ではない（なお、拙著を刊行した時点では神名は「水樹」だったが、その後「神々の意志」によって変更したそうだ）。

瑞樹さんは5人兄弟の末っ子として1970年代に宮古島で生まれ育った。特に病弱というわけではなかったが、幼少期から幽霊を目撃したり、正夢が現実になることもあった。18歳で沖縄本島の専門学校に進学し、20代で結婚と出産、離婚を経験し宮古島に戻るも経済苦に苦しむ。30歳で再婚し32歳から介護職を始めた後、ひどいだるさに襲われ、37.5度の微熱が続き、寝込む日もあった。また33歳の時に「ユタになる」と宣告された後、3メートルを優に越す巨大な琉球王国時代の王様が夢に現れ、「これが私の神様だ」と悟る。

ユタの定義に倣えば、サダカウマリで、カミダーリを経験し、神が自ら夢に現れるなど、どう見てもユタの定義と一致する。

それにも関わらず、瑞樹さんはカミダーリを「瞑想」で自ら解決し、神からの催促に対し「やるけどユタはいや」と意思表示した後、前世療法のセラピストの資格を取得するなどユタ以外の道を選ぶ。変性意識状態に入るトレーニングを重ねたことで神々の姿がはっきりと見えるようになり、会話をし、龍神や神々からの授与品に触れることもできるようになる。

このように、瑞樹さんはユタのようでありながら、あらゆる病気の霊的治療を行うヒーラーであり、津々浦々の神様や眷属と直接会話ができるチャネラーであり、自宅のソファから魂だけで日本全国の依頼者の家や病院を訪れたり、神社仏閣の神々に会いに行くなど「魂の飛行 (ecstatic journey)」を自在に可能とするシャーマンなのである。

おわりに

以上のように、現代沖縄では、もはやこれまでの定義や固定概念のみではユタの現状を説明できなくなっているにも関わらず、従来の研究ではユタの定義から外れる瑞樹さんのような方々を研究対象としてこなかった。しかし、今後の沖縄のシャーマニズム研究に必要なのは、現代性に着目し、ありのままを記録する視点ではないだろうか。



龍宮の神々と交流する佳宮瑞樹さん
(於宮古島池間・2020年・筆者撮影)

引用文献

- 池上良正1999『民間巫者信仰の研究』未来社
エリアーデ・ミルチャ、堀一郎（訳）1981『シャーマニズム 古代的エクスタシー技術』冬樹社 (M. Eliade. 1951. *Le Chamanisme et les Techniques Archaïques de l'extase*. Paris: Librairie Payot.)
佐々木宏幹1980『シャーマニズム エクスタシーと憑霊の文化』中公新書
塩月亮子2012『沖縄シャーマニズムの近代 聖なる狂気のゆくえ』森話社
平井芽阿里2020『ユタの境界を生きる人々 沖縄のシャーマニズムを再考する』創元社
村上晶2017『巫者のいる日常 津軽のカミサマから都心のスピリチュアルセラピストまで』春風社



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 講師

河村 陽介 (KAWAMURA Yosuke)

名古屋工業大学大学院工学研究科社会工学専攻博士前期課程修了。修士(工学)。情報メディアを用いたインタラクティブ作品の制作やワークショッププロジェクトを行なっている。2005年より移動型ラボ「MOBIUM」を主宰。「TOYOTA HACK CAMP」、日韓交流事業「CONSONARE」などを企画。あいちトリエンナーレ 2016ではワークショッププロジェクト「Locus Faber Tsukulocca」のプロジェクトリーダーを務めた。なごや日本博事業「streaming heritage」では共同ディレクターを務めた。



地域とメディア表現



地域における課題へのアプローチ

少子高齢化や過疎化など地域社会の抱える問題は、地域の産業や伝統工芸などにおいて継承者の減少などの影響を及ぼしている。伝統的工芸品産業振興協会⁽¹⁾によると1978年では約28万人いた伝統工芸従事者は2016年には約6万人まで減少している。伝統や文化を残すための事例として各地で現地資源や環境を活用したアートやデザインによる課題解決の取り組みが行われている。伝統工芸の職人とデザイナーやIT開発者などが協働し、新しい価値観を創造する工芸ハッカソン⁽²⁾や過疎化した農村や空き家などにアーティストを介入させることで場所性を活かし、魅力を引き出すアートプロジェクトや芸術祭⁽³⁾などが挙げられる。このような活動によって地域の文化を発信することで新しい価値観を創出し若者に興味を持ってもらい人材の新規開拓や移住などを通して文化継承の糸口となることが期待される。そういった中で地域の集客イベントとして公共施設や廃校などを利用したプロジェクトマッピングの公演や、地域を題材としたVRやゲーム作品⁽⁴⁾などテクノロジーやメディア表現を取り入れた地域課題の取り組みが近年注目を浴びている。

地域におけるメディア表現活動の紹介

研究室ではメディア表現を駆使し地域や場所に関する調査や制作活動を主としており、これまでに実施した活動を数例紹介する。

「狛犬とめぐるナイトミュージアム」⁽⁵⁾は愛知県陶磁美術館との共同で2022年に企画制作を行なった活動である。陶磁美術館の所在する瀬戸市では鎌倉時代から明治初期まで祝い事や願い事の際に陶製狛犬を作って奉納するという文化があったが現在は廃れてしまっている。このような過去の伝統的な慣習を見直し、魅力を発信するために陶磁美術館が「リ・デザイン・狛犬プロジェクト」を立ち上げ、その2年目の企画として筆者に依頼があった。当初はロビーに設置された陶製狛犬にプロジェクトマッピングを行いたいという先方の希望があり、よりイベント的な広がりを持たせるために美術館の常設展示エリアをナイトミュージアムに仕立てるという方向性で進めることになった。制作にあたり、学生とともに5月から美術館の空間と展示物のリサーチを行い、準備・制作を進め、8月末の3日間にナイトミュージアムを実施した。会場は完全に暗転し、来場者はブラックライトで展示物を鑑賞しながらツアーを行う形式で行われた。展示物は指導のもと学生が制作し、壺に光源を仕掛けたものや、ショーケース内から陶磁器が割れる音を鳴らせるもの、書画カメラでフィルムの模様を白磁の壺に投影する体験型のもの、3Dプリンタで造形した光るオブジェなど様々な仕掛けを設置した。常設の展示物にメディア表現を組み合わせることで参加者は普段とは異なる見え方や魅力を体験していた。また、ツアーの最後にはロビーの陶製狛犬のプロジェクトマッピングを鑑賞してもらった。映像は美術館所蔵の陶磁器の模様や、瀬戸で活動することも太鼓の団員に狛犬の台詞の収録を協力し

てもらったなど美術館や瀬戸にゆかりのある素材を使用し、陶製狛犬の魅力を次々に伝えることをコンセプトに制作している。ナイトミュージアムの展示や映像上演は参加者および美術館関係者に好評であったことから陶磁器や陶製狛犬の魅力を十分に発信できたといえる。



図1：陶製狛犬のプロジェクションマッピング
筆者制作（筆者撮影）

2019年から2020年にかけて豊田市で行った「TOYOTA HACK CAMP」では、豊田市をリサーチし、現地の資源で造形作品の制作を行うワークショッププロジェクトを実施した。この取り組みでは特に豊田市の北部に位置する小原地区に着目し現地調査を行った。小原は2019年4月時点で人口約3500名の山間地区である。小原の特徴として気候や水資源の条件が整っているため和紙の原料となるコウゾの育成に適しており和紙工芸が盛んに行われている。当初小原での和紙は和傘や障子紙などに製造利用されてきたが、近代化により昭和初期には廃れていくことになる。昭和20年以降、工芸家の藤井達吉により美術としての小原和紙工芸⁽⁶⁾の道が開かれていくことになる。小原の調査を行なっていく中で参

加者は和紙工芸に興味を持ち、和紙を使った新しいアプローチを考えていくこととなった。和紙の特性を知るために紙漉きの体験や原料のコウゾを使って実験を行った。実験のひとつとして3Dプリンタで出力したボロノイ構造体に直接紙漉きを行なう、立体紙漉きと呼ばれる技法を施した造形物は、ほどよく光を通すことで照明器具などに使えそうなものとなった。また和紙は行灯などの照明器具などに使われており、強度が高いことから太鼓の皮として利用できないかと考え、行灯と太鼓を両立するような行灯和紙太鼓をいくつか考案した。太鼓の部分は叩く際に強度が足りないため、漆に特性に近い塗料を塗布することでハリの出る音が出るようになった。和紙を使った太鼓は福島県郡山⁽⁷⁾や岐阜県美濃でもリデザインの事例がみられ、伝統的な素材である和紙のポテンシャルが高いことがうかがえる。制作は7月にワークショップを行い、その後制作期間を設け、完成した作品は豊田市の廃校で9～10月に展示を行った。来場者にはその場で簡易的な和紙太鼓を作ってもらったワークショップなどを実施し、鑑賞だけでなく小原和紙に触れる機会を設け、多くの方に小原和紙を知ってもらうことができた。



図2：小原和紙を使った行灯和紙太鼓（筆者撮影）

近年取り組んでいる「メディア表現を活用したサボテン工芸デザイン」は愛知県春日井の特産品である食用サボテンをデザインや工芸のマテリアルとして扱うことで地域素材を活用し再考するプロジェクトである。背景として春日井市の伝統的な産業や工芸の調査を行った際、市を代表する工芸品などがなかったため、市の特産品を活かしたサボテン工芸を確立させたいということからこのプロジェクトは始まっている。この取り組みではサボテンを素材として取り入れたもの、サボテンをモチーフに制作したものの2グループに分けられる。研究室ではサボテンをテーマに学生にアイデア出しか

ら実際にプロトタイプ制作まで行っており、いくつか作例を紹介する。

サボテンを素材としたグループの1例としてサボテン和紙工芸が挙げられる。サボテン和紙はサボテンの純度が高いものは結合力が弱い紙としての強度がなかったことから、強度を出すために和紙製造に一般的なコウゾを配合することとした。配合比率の実験からサボテンとコウゾをおおよそ1:1で使用することで強度とサボテンの質感のバランスが取れた状態になったため、その割合を基準にサボテンの分量を変えることで風合いを調整している。サボテン和紙の作例として、3Dプリンタによるフレームを使用したサボテンの照明器具やサボテン和紙を使った団扇などがある。（図3）これらはともに前項での小原和紙同様に3Dプリンタの造形物や竹の骨に直接、立体紙漉きを行っている。照明器具に関しては3Dプリンタのような現代的な技法と伝統的な技法が融合しており、新しくも味わいの深い造形物となっている。サボテンをモチーフとした作例では、通常はサボっており、人が来ると真面目に立つ、というゆるめのガジェット作品が挙げられる。この作品は顔認識の技術を使いArduino⁽⁸⁾などのマイコン制御によって動作し、部屋に置くことでその場を和ませるというコンセプトで作られている。また、それ以外にもサボテンを育成するゲームやサボテンを叩いた音で構成した音楽など、さまざまなメ



図3：サボテン和紙の照明と団扇・学生との共同制作（筆者撮影）



図4：サボテンモチーフの作品（筆者撮影）

ディア表現でサボテンをモチーフにした作例があり、いずれもコンテンツを楽しむことで春日井のサボテンの魅力を知ってもらう、という目的がある。これらの成果物は春日井市の祭りなどで展示公開しフィードバックを得ていく予定である。

今後の課題

いずれの取り組みも地域や場所の特性や資源を活用し、素材を活かした上でテクノロジーやメディア表現との融合によって新たな価値観を生み出すことを試みている。ナイトミュージアムのようなイベント性が高いものは家族連れなどが映像や体験型のメディア表現を介することで伝統的な文化に触れる導入として受け入れやすい事例といえる。和紙やサボテン工芸なども実際に手に触れてもらうことで、伝統や地域素材を感じてもらうことができている。ただしこれらの活動は、イベントの要素や技術的観点など興味を高める効果があるが、一過性のものになりがちであるということが課題である。新たな価値観を生み出せたとしても、その定着や掘り下げ、発信を続けるためには、継承する人材や環境づくりが不可欠となるだろう。素材に関しても和紙の原料のコウゾやサボテンなどの自然素材は持続可能性が高い素材といえるが、生産者も減少傾向にあるため、こういった活動を通して若者の興味を高め、人材確保につながることを期待する。

参考文献

- (1) 伝統的工芸品産業振興協会 <https://kyokai.kougeihin.jp/current-situation/> (2024.7.20確認)
- (2) 工芸ハッカソン（富山県高岡市） <https://kogeihackathon.com> (2024.7.20確認)
- (3) 大地の芸術祭（新潟県）Tunnel of Light/マヤソン・MADアーキテツ https://www.echigo-tsumari.jp/art/artwork/periscopelight_cave/ (2024.7.20確認)
- (4) 地方創生RPG（有限会社井桁屋） <https://sousei-rpg.jp> (2024.7.20確認)
- (5) 狛犬とめぐるナイトミュージアムアーカイブ映像 <https://www.youtube.com/watch?v=hloq1QuBQLQ> (2024.7.20確認)
- (6) 豊田小原和紙工芸（愛知県豊田市） <https://washinofurusato.jp/obarawashi/> (2024.7.20確認)
- (7) グッドデザイン賞 和紙が応援太鼓 <https://www.g-mark.org/gallery/winners/9e05f7e9-803d-11ed-af7e-0242ac130002?years=2019> (2024.7.20確認)
- (8) Arduino <https://www.arduino.cc> (2024.7.20確認)



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 准教授

柊 和佑 (HIRAGI Wasuke)

筑波大学図書館情報メディア研究科出身、博士（情報学）。稚内北星学園大学を経て、2016年度より中部大学に勤務。専門領域はデジタルアーカイブ、情報学。関心のあるテーマは、五感のデジタル化を前提とした都市と体験のデジタルアーカイブ。そのための高度な情報提供と、データ構造、メタデータ設計、情報収集技術など。



デジタルアーカイブへの誤解 地域情報資源デジタルアーカイブを作ること

デジタルアーカイブへの誤解

デジタルアーカイブに関する一般的なイメージと、その実際の定義には乖離があります。多くの人々はデジタルアーカイブを、単にデジタル化された資料や情報の集まり、例えばスキャンされた書籍や写真、デジタル化された映像などをオンラインで閲覧できる場所と捉えています。つまり、インターネット上でアクセス可能なデジタルコンテンツのコレクションとして認識されがちです。

一方、実際のデジタルアーカイブの定義はより包括的で専門的です。デジタルアーカイブとは、デジタル形式の資料や情報を長期的に保存・管理し、それらを将来にわたってアクセス可能にするための体系的な取り組みを指します。これは単なるデジタル化だけでなく、メタデータの付与、データの保存フォーマットの選択、データの劣化防止、法的・倫理的な配慮（著作権やプライバシーの保護）など、多岐にわたる専門的な知見と手法を含みます。

この乖離の原因として、デジタルアーカイブの専門性や技術的な側面が一般に広く理解されていない、目立っていないことが挙げられます。一般の人々は、デジタルアーカイブのWeb上に表現された「デジタルでアクセスできる資料」という側面しか見ることができません。そして、その背後にある保存・管理のための複雑なプロセスや長期的な視点を認識していない場合が多いのです。

このように、デジタルアーカイブの見えてくる側面が違ふという点から、一般的なイメージと実際の定義との間に乖離が生じていると言

えるでしょう。

デジタルアーカイブの一般的なイメージ

では、世の中でよく言われる「デジタルアーカイブ」の一般的なイメージを考えてみましょう。

図書館としてのデジタルアーカイブ：

インターネット上から世界中の情報にアクセスできるツールとして認識されている。

歴史的資料や文化財のデジタル展示

博物館や美術館が所蔵する美術品や文化財をデジタル化し、オンラインで鑑賞できるプラットフォームというイメージがある。

個人の思い出やデータの保存場所

写真やビデオ、ドキュメントなどをクラウドサービスに保存し、いつでもアクセスできる個人用デジタルアーカイブ、便利なストレージとして認識されている。

上記のイメージは、合っているか間違っているかを別にして、わかりやすいイメージでしょう。しかし、これらのイメージには、以下のことが無意識的に含まれています。

デジタル化すれば資料は永遠に保存される

デジタル化することで物理的な劣化は防げるが、保存媒体の劣化やフォーマットの変化、技術の進歩によって読めなくなるリスクがある。実際には、データの定期的なバックアップやフォーマットの更新など、継続的な管理が必要。

無料で誰でもアクセスできる

著作権やプライバシーの保護のため、アクセスには制限があり、一部は有料であったり、特定の組織や個人に限定されている場合がある。

インターネット全ての情報が含まれている

デジタルアーカイブは特定の目的やテーマに基づいて構築されており、そもそもインターネット資料に限っているわけでもない。また、情報の収集や整理には限界があり、すべての情報が正確かつ最新である保証もない。

デジタルアーカイブは無限の容量がある

デジタルストレージにも物理的な限界があり、容量の拡張にはコストがかかり、データ量が増えると管理や検索の効率も低下する。

検索すればすぐに必要な情報が見つかる

データの検索性はメタデータの質や検索システムの性能に依存する。不適切なメタデータや分類があると、情報の検索が困難になる。

これらは、研究者の間で常に改善を模索されている部分ですが、利用者には見えない部分に当たります。

このようなイメージに取り囲まれているため、デジタルアーカイブは言ってしまうと、**全ての知識が集約された無限の図書館**、つまり世界中の書籍、論文、映像、音楽など、あらゆるメディアが一つのデジタルアーカイブに収められており、まるで無限の蔵書を持つ図書館のように、誰でも自由にアクセスできると想像されているのです。

デジタルアーカイブ（的）サービス群

とはいえ、専門家がなんと言おうと一般人はそんなことを気にしません。もちろん、デジタルアーカイブを作る側もそのイメージに少しも沿って、使ってもらえるデジタルアーカイ

ブを作ろうとします。専門家ではないと、イメージだけでサービスを作ってしまいます。結果として、「デジタルアーカイブ的なもの」という、正体のわからないものが誕生するのです。

実際に東京都、愛知県、石川県のデジタルアーカイブ的なインターネットサービスを概観して、どのような「イメージ」に基づいているのか考えてみましょう。

東京都のデジタルアーカイブサービスは、運営組織としては東京都立図書館、東京都写真美術館や江戸東京博物館など、都内の幅広い公共の文化施設が多く提供しています。収集しているコンテンツの種類は、

歴史的資料：江戸時代から現代までの東京に関する文献や絵図。

写真・映像：都市の発展や社会の変遷を記録した写真や映像資料。

文化財・芸術作品：美術品や工芸品のデジタル画像。

地図・都市計画資料：東京の地理的・都市計画的な資料。

が多く、首都としての特性から、膨大な資料を用いて、都市の発展、社会の変遷、都市計画など、都市特有の資料をコンテンツとしているものが目立ちます。また、高度で最新のデジタル技術を活用し、高解像度の画像や3Dデータを提供しています。さらに、国際都市であるため、英語など多言語での情報提供も行なっています。



図1 江戸東京博物館デジタルアーカイブ

愛知県のデジタルアーカイブサービスは、運営組織として愛知県図書館、愛知県美術館や歴史博物館など、公共の施設が多くデジタルコンテンツを提供しています。種類は、

郷土資料：愛知県の歴史や文化に関する文献、古文書。三英傑も多い。

写真・映像：地域の祭りや伝統行事、風景などの写真・映像資料。

産業資料：自動車産業など、県の主要産業に関する資料。

文化財：国宝や重要文化財に指定された建築物や美術品のデジタル画像。

が目立ちます。東京と近い構成ですが、地元の三英傑にちなんだ歴史や文化、民俗学的な資料、自動車産業をはじめとする工業製品や技術資料が多く提供されています。



図2 文化財ナビ愛知

石川県のデジタルアーカイブサービスは、運営組織として石川県立図書館や、各市の文化振興事業団が多く提供しています。収集しているコンテンツの種類は、

伝統工芸：加賀友禅や九谷焼などの伝統工芸品の画像・資料。

民俗資料：地域の祭り、伝統行事、民話などの記録。

歴史的建造物：武家屋敷や茶屋街などのデジタルデータ。

自然風景：白山や能登半島などの自然景観の写真。

が多いようです。文化遺産の保護：伝統文化や工芸に特化した資料が豊富です。観光資源としての活用と、石川ならではの文化・風土を前面に出した地域アイデンティティの強調を目的としたコンテンツが目立ちます。

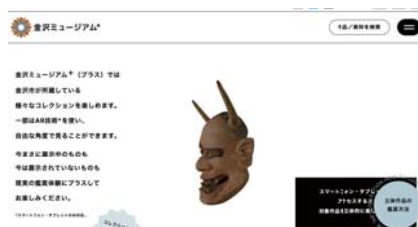


図3 金沢ミュージアム+

これは、運営組織による違いでもわかります。

東京都は、多様な組織が連携し、都立図書館だけでなく、多数の博物館、美術館、大学など多くの組織が連携しています。豊富な資金と技術を背景に、質の高いデジタルコンテンツを提供しています。

愛知県は、主に県立図書館が中心となり、地域の博物館や教育機関と協力しています。また、

産業遺産など、地域の産業とニーズ、特性に合わせたコンテンツが多く提供されています。

石川県は、公私の文化財の保護・振興を専門とする専門性の高い組織が運営しており、伝統文化や芸術に特化した専門家が関与しています。また、自然景観や生態系に関する資料も豊富です。観光都市として、地域住民よりも旅行者にフォーカスしたコンテンツも目立っています。

東京都は首都としての規模と多様性から、多くの組織が連携し、高度な技術と資金力で運営。

愛知県は県立図書館を中心に、地域の教育・文化機関と協力し、地域密着型のサービスを提供。

石川県は文化振興事業団など専門組織が主導し、伝統文化の保護・発信に特化。

このように、各県のデジタルアーカイブサービスは、地域の特性やニーズに合わせて運営されており、運営組織や収集コンテンツの種類にもそれぞれの特徴が現れています。

なお、これらは、2024/9までに各自治体の公式サイトからリンクされた組織が運営するWebサイト（各100サイト）を、手作業で確認したデータに基づいており、全数を調査したものではありません。

今後のデジタルアーカイブサービス

デジタルアーカイブに対する一般人と研究者の見方の違いは、利用者と提供者という立場の差から生じています。一般の人々のニーズや認識は急激に変化しないため、研究者や開発者がそのギャップを埋めるために歩み寄ることが重要です。

研究者や開発者は、一般の利用者の視点を理解し、使いやすく価値のあるデジタルアーカイブを提供する責任があります。そのためには、技術的な工夫だけでなく、コミュニケーション、教育、マーケティングなど多角的な取り組みが必要です。デジタルアーカイブの持つ可能性を最大限に引き出し、社会全体での活用が促進されるよう、頑張らなくてはなりません。

参考文献

- [1] EDO-TOKYO-MUSEUM.『デジタルアーカイブス』
<https://www.edohakuarchives.jp/>. (Accessed 2024/10/11)
- [2] 愛知県文化芸術課文化財室『文化財ナビ愛知』
https://jmapps.ne.jp/aichi_bunkazai/. (Accessed 2024/10/11)
- [3] 金沢市.『金沢ミュージアム+』
<https://kanazawa-mplus.jp/>. (Accessed 2024/10/11)



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 助教

安保 夏絵 (AMBO Natsue)

大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程単位修得退学。修士（言語文化学）。2020年に留学先のカナダから帰国後、非常勤講師の職歴を経て、2022年より中部大学人文学部英語英米文化学科に勤務。2024年より国際人間学研究科言語文化専攻兼務。専門領域はアメリカ・カナダの現代文学。関心のあるテーマは小説で描写される女性の生き方とセクシュアリティ。「AIに性別は必要か？」というテーマのもと英語圏小説を現在研究中。



失われつつある境界を探って 現代英米文学における人間と非人間の描写



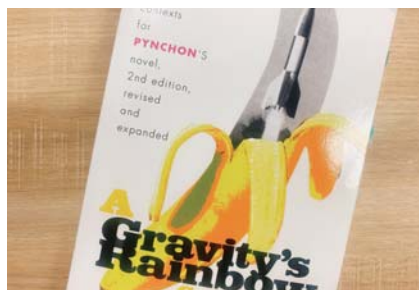
「他者」としての身体と情動

現代英米文学小説で描かれる「他者 (the Other)」は文化・性別・人種が自己と異なる人間だけではない。例えば、自然も他者となりうる。人間と自然の境界は曖昧であるとされ、さらには「人間と自然との間の区別が存在しない。人間と自然とは、相対する二項ではなく、相互につながっている」と論じられている (Deleuze and Guattari, p. 12)。さらに、自然や動物はもちろんのこと、本来ならば自己の一部として捉えるであろう人間の器官もまた「他者」として研究対象とすることが可能である。器官はその他の器官と密接に接続されていることから、自己と「他者」の境界はさらに曖昧なものとなる。

他方で、「他者」の意味の内奥に踏み込むと、「他者」というのは物理的に存在するものだけではない。人間の抱く様々な感情や欲望もまた「他者」として分析される。例えば、アメリカ文学においては、自分の身体の一部を喪失するかもしれないという恐怖の感情が「情動」(affect)の例として挙げられる。竹内らの『身体と情動』(2016年)は、アメリカン・ルネサンス文学における身体と情動について分析している。本稿では、おもに英米現代小説における「他者」と「情動」を読み取り、ジェンダー問題に結びつけつつ、人間と「他者」(非人間)の共生について考察してみたい。

英米現代小説における「他者」と「情動」、そして精神分析・ジェンダー批評へ

現代アメリカ小説では、人間の身体や情動を「他者」として捉えることが可能だ。アメリカの現代文学作家トマス・ピンチオン (Thomas Pynchon, 1937年-) もまた人間と非人間の境界の曖昧さと、情動が人間に及ぼす影響を描いている。例えば、『重力の虹』(Gravity's Rainbow, 1973年) は第二次世界大戦中のドイツとイギリスが舞台となっており、物と「接続」することで無機物になりたいという欲望が描かれている。主人公のスロースロップが性的興奮を覚えたあと、V2ロケットがロンドンに落下し、パブロフ派によって自白剤を飲まされる描写がある。これは、主人公の自己と「他者」の境界が喪失されていると解釈できる場面だ。



その他にも、この小説にはロケットと一体化する同性愛者の男性や、ロケットの一部に使用されているプラスチック製の服を着て興奮する女性が登場する。これは、主人公の自己と「他者」の境界が喪失されているという分析だけでなく、人間が物と接続されることで無機物

となる欲望を持ち、武器=無機物になりたいという欲望を読み取ることも可能だ。

人間が武器になりたいという無機物化の欲望は、ジェンダーのテーマで読み解くと、人間の子孫を残さずに死を選択するという「死の欲望」に結びつけることが可能だ。人間は異性間でしか妊娠して子をつくることができない。同性や無機物愛をするということは、子孫を残さないという「死」を選択するということになる。エーデルマンは、そのような同性愛や死の欲望を否定することなく、異性愛者のあいだで生まれる子どもが未来の象徴であるという未来中心主義を批判している。同性愛者たちは異性愛中心主義的な社会に反発し、対抗することでエネルギーを生みだす。

このエネルギーは『重力の虹』ではホモセクシュアルな「死の欲望」と戦いに繋がっている。つまり、同性愛、戦争、死の欲望という三つの要素は密接に関係している。『重力の虹』以外にも、遠藤は、キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923年) の『至福』(Bliss and the Other Stories, 1919年) において「戦争=病=「完全な至福」という恐るべき等号を読まなければならない」(p. 153) と述べている。遠藤は、戦争が病の隠喩であること、その病による苦痛の増大や死が快楽になるという欲望の逆説について論じている。確かに、主人公のバーサ・ヤングは同性愛に目覚め幸福感が高まるのだが、時代は第一次世界大戦期である。後にバーサは病に苦しみ、幸福から不幸という感情の落差が描かれている。

このように死の欲望(快楽)、戦争、ホモセクシュアルは実は強固に結びついた要素である。社会

の周縁にいとされてきたセクシュアルマイノリティの人々も、戦争には、人間の無機物化による戦力としてなくてはならないものである。ここで、人間と非人間、異性愛と同性愛、生と死の欲望のそれぞれの境界が曖昧になっている。

人間と非人間が共生する文学の世界 マーガレット・アトウッド作品を中心に

ここまでは自己の内側に存在する「他者」としての身体、情動、欲望に着目した。しかし、境界線が曖昧になりつつあるのは人間と人工知能、あるいは人間と人造人間との関係にも当てはまるだろう。これらの非人間的な存在は、生身の肉体こそないものの限りなく人間に似た不気味な存在である。現代の英米文学小説は、非人間がどのようにして人間社会に参入して影響を与えているのかについて未来を予測している。

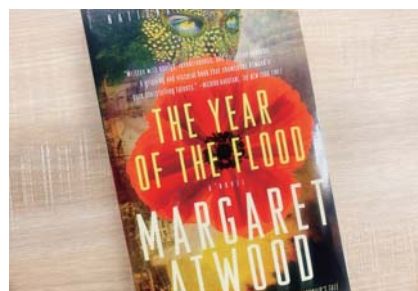
例えば、イアン・マキューアン (Ian McEwan, 1948年-) の『恋するアダム』(*Machines Like Me*, 2019年) に登場する「恋をする」男性アンドロイドのアダムや、ジャンネット・ウィンターソン (Jeanette Winterson, 1959年-) の『フランキスシュタイン』(*Frankissstein*, 2019年) で描かれる性的充足のための「セックスボット」、そしてカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954年-) の『クララとお日さま』(*Klara and the Sun*, 2019年) に登場する「人工親友」(Artificial Friend) が挙げられる。

曖昧な境界線とジェンダー批評の密接な関係は、カナダ出身の現代作家であるマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood, 1939年-) の作品からも読み取ることが可能だ。アトウッドは、代表作『侍女の物語』(*The Handmaid's Tale*, 1985年) で女性たちの妊娠が独裁政府に管理されるバイオポリティクスの世界を描いている。自己の所有物であると思われていた身体=子宮が管理され、出産後も自分の産んだ子どもが奪われるディストピア世界が描かれている。

このように、アトウッドの小説にはサバイバルする女性が多い。近年のマッドアダム三部作 (MaddAddam Trilogy, 2003-2013年) では人間の女性主人公がサバイバルし、人造人間たち (humanoids) とともに共生している世界を描いている。というのも、この三部作では、ウイルスの蔓延により壊滅してしまった世界で、生き残った人間とヒューマノイドとのあいだに異種混雑の子どもが誕生している。

一見すると、非現実的な妊娠と出産がテーマとなっているようにも見えるが、アトウッドは人工子宮を用いた出産という起こりうる未来を想定している。ここでもまた、人間とヒューマノイドという異なる種の境界線が曖昧になっているだけでなく、人間とヒューマノイドが共生するためのヒントが描かれている。

筆者はこのような共生社会が女性登場人物の行動によって実現しているのではないかと分析する。筆者は現在、このマッドアダム三部作のうち二作目の『洪水の年』(*The Year of the Flood*, 2009年) の主要登場人物であるトビーの行動を研究している。トビーは、壊滅状態の世界を生きる弱者として描かれているが、時にはテクノロジーを駆使してサバイバルしている。例えば、性的な被害から逃れるために身元を知られないよう、近未来的な技術を借りて髪の色、指紋、声、肌の色を変えている。さらに、トビーはクレイカー (Crakers) と呼ばれるヒューマノイドに言語を教え、人間とヒューマノイドたちとの仲介者の役目を果たしている。



トビーが所属する「神の庭師たち」という名のコミュニティで、彼女はクレイカーと交流する。「神の庭師たち」が生活する庭園、すなわち自給自足の領域には様々な生命体が存在している。テクノロジーの発展によって生み出された動物たちは異なる種の遺伝子が「接合」(splice)されたハイブリッドの動物たちである。世界の壊滅後に混沌とした無法地帯の自然環境で、生き残った「神の庭師たち」はクレイカーと共生しながら、様々な生命体が潜む庭園でハイブリッドな子どもたちと生きていく決意をする。

今後の課題

人間と非人間の境界を超えた人新世の分析

アトウッドは、マッドアダム三部作をとおして壊滅的な世界とその後の回復、そして未来への希望を描いている。筆者は現在、アトウッド

が描く世界の読解に、ダナ・ハラウェイ (Donna Haraway) が提唱する人新世が役立つのではないかという考察を続けている。ハラウェイは「植民新世」(Plantationocene) という新しい人新世の種類を提唱している。「植民」という用語が入っているため、「植民新世」は奴隷制時代のプランテーションを想起させるが、ハラウェイは砂糖や綿を生産する大規模なプランテーション農業こそが生物の多様性とバランスを崩壊させ、労働を搾取する社会的不平等の根源であると批判している。したがって、ハラウェイはそのような植民地を「植民新世」に書き換える試みを行っているのではないだろうか。つまり、ハラウェイの言う「植民新世」とは、人間のための食糧などを生産するための大規模な農場であると同時に、植物、動物、菌類、そして土壌が共存している世界である (SWT 206)。これまであまり探究されてこなかった「植民新世」は、自然環境と人間の共生の実現すなわち未来の存続の手がかりとして分析できると予想できるのだ。

最後にまたマッドアダム三部作の議論に戻ると、このハラウェイの「植民新世」の探究と、アトウッドの描く「神の庭師たち」が築き上げたコミュニティが結びつくのではないかというのが筆者の考察である。今後の課題として、ハラウェイとアトウッド作品における人間と非人間の共生のさらなる可能性を研究していきたいと思う。

参考文献

- Atwood, Margaret. *MaddAddam*. Virago, 2014.
 ___. *Oryx and Crake*. Virago, 2013.
 ___. *The Handmaid's Tale*. Vintage, 1998.
 ___. *The Year of the Flood*. Anchor, 2009.
 Edelman, Lee. *No Future: Queer Theory And The Death Drive*. Duke UP, 2005.
 Haraway, Donna. *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene*. Duke UP, 2016.
 Ishiguro, Kazuo. *Klara and the Sun*. Vintage, 2022.
 Mansfield, Katherine. *Bliss and the Other Stories*. Createspace Independent Pub, 2015.
 McEwan, Ian. *Machines like Me*. Anchor, 2020.
 Pynchon, Thomas. *Gravity's Rainbow*. Penguin Classics, 2006.
 Winterson, Jeanette. *Frankissstein: A Love Story*. Jonathan Cape, 2019.
 エーデルマン、リー「未来は子ども騙し——クィア理論、非同一化、そして死の欲動」『思想 2019年5月号』藤高和輝訳、岩波書店、2019年。
 遠藤不比人『死の欲動とモダニズム：イギリス戦間期の文学と精神分析』慶應義塾大学出版会、2012年。
 小林敏明『〈死の欲動〉を読む』せりか書房、2012年。
 竹内勝徳・高橋勤編『身体と情動：アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社、2016年。



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 教授

塩澤 正 (SHIOZAWA Tadashi)

京都大学大学院人間環境学研究科博士後期課程満期退学。博士（人間環境学）。イリノイ大学（アーバナ・シャンペイン）大学院修了（MA, Teaching English as a Second Language）。環境と言語習得の関係、国際英語論とその教育的応用に関心がある。近著に『国際英語論で変わる日本の英語教育』（くろしお出版、共編著）、『英語教育と文化』（大修館書店、共編著）、『現代社会と英語』（金星堂、共編著）、*Activator Next*（金星堂、共著）、『留学・国際交流が人生に与える影響』（風媒社、共編著）などがある。



生成AIと「国際英語論」 —英語教員や英語教育は不要になるのか—



はじめに

生成AIの登場により「英語教員や英語教育は不要になりますよね」という声を最近頻繁に耳にする。確かに生成AIの登場で、英語での受信や発信が驚くほど容易になった。英語でAIと会話することも携帯電話でできる。英語の授業は、英語自体を学ぶというより、生成AIを上手に使うことで英語と付き合う方法を学ぶことにシフトしていく可能性がある。しかし、だからと言って「英語教員や英語教育は不要になる」と言えるのだろうか。少し、言語習得論や「国際英語論」の観点から考えてみたい。

言語はコミュニケーションの 道具以上のもの

英語が苦手な人は、大いに生成AIを使って英語の論文やメールを（日本語で）読み、英語でのプレゼン用スライドを作れば素早く目的が達成でき、効率化にも役立つ。その意味で日常的に英語を必要としない人は、英語の学習自体が必要なくなるというのはあながち間違っていない。もともと、必要のない人まで小学校から大学レベルまで、ほぼ全員に英語を学習させてきた日本の英語教育は大きな改革を迫られるだろう。しかし、それは、英語の初級・中級者までの話だ。対面で瞬発的な議論が必要な人や英語を自分の思考表現（自己表現）として使う人、あるいは言語表現の豊かさに価値を置く人などは、生成AIが登場したところで、自分で英語を操り自分の意思を

自分の言葉で伝えたいと思うはずだ。実は、様々な感情を込めたり、微妙なニュアンスを表現したりすることさえも生成AIを利用すればできるのだが、なぜ私たちは言語を自分で操作したいのだろうか。それは、言語は単なるコミュニケーションの手段ではないからだ。

私たちは複雑な思考は言語で行う。つまり、母語以外に新しい言語を身につけるということは、新しい発想や考え方を身につけるということだ。人間の考え方や価値観の幅が広がることを意味している。まさに、これは自分に新しいアイデンティティが加わるということではないだろうか。英語により人間の付き合いの幅やキャリアチョイスが広がり、多様性を受け入れる下地ができ、行動パターンや思考方法や価値観まで大きく変わることさえある。そして、人生が豊かになる。人生を豊かにするものは教育で扱う価値がある。これがまさに、言語は単なるコミュニケーション手段以上のものであるという意味だ。

いや、コミュニケーション手段としてもまだ生成AIは完全に人間の代わりができるどころまでは来ていない。対面で、顔や状況を観察しながらの戦略的な発話や行間や沈黙を読んだ後の一言などは、その場の空気や相手の雰囲気やメンバー構成などを総合的に勘案しながらでないと口から出てきこない。これはまだまだ人間にしかできないコミュニケーション方略だ。それが、相手への印象やひいては目的の達成具合にも影響する。こういうことを考えれば、「生成AIが出てきたからもう英語の勉強も先生もいりませんよね」などと簡単には言えないのではないだろうか。

さらに、吉川ら（2024）が言うように、一定の英語力を備えないまま、英語での発信・受信を生成AIに全面依存しようとする姿勢は様々な不都合をもたらすことを忘れてはいけない。生成AIが産出する英語文に誤謬や偏りがあっても気付くことができない。そもそも生成AIを物理的に使用できない環境では、全くコミュニケーションができないことが想定される。AI時代といえども、自力でコミュニケーションのできる英語力を養うための英語教育の重要性がゆらぐことはないだろう。

教育は「トランスアクション」 ではなく「インターアクション」

英語学習に限らず人間の学びすべてに関しても、同じことがいえる。効率性が重視される社会がさらに進めば人間は意味のある人生を生きるチャンスを奪われ、言語学習のような骨の折れる作業は生成AIに任せがちになる。その意味で大げさかもしれないが、生成AIの乱用は人間文明の危機につながるかもしれない（大下、2024）。教育は知識や技術の「トランスアクション」に意味があるのではなくて、その獲得するまでの「インターアクション」に意味があるのではないだろうか。この学習過程に知的作業が必要となり、知性や理性や感性の成長がある。それがひいては人間の文明を作りだす。そのように考えれば、教育者が外国語学習は不要だと本当に言えるのだろうか。

ただ、私は外国語学習における生成AIの利用を否定しているわけではない。全くその反対だ。教育者も学習者もこれを学びの強力な

サポーターとして使えば、多いに役立つと考えていることは強調しておきたい。そのためにも、自分自身の英語力を高め、「自分の英語」の基盤をしっかり持つことが重要だろう。

国際英語論の観点から生成 AI は救世主

では、生成AIは国際英語論の観点から言語学習ツールとして何が優れているのだろうか。少し、国際英語論と生成AI利用の英語学習や教育の関係やメリットを考えてみたい。

1) 「言語使用」の機会の提供

間違いを恐れず、通じること重点を置く国際英語論的発想は、学習者に「言語使用」の機会を提供する。言語習得に最も重要なのは単語数や文法に関する「知識」ではなく、この「言語使用」の質と量だ。生成AIは場所と時間と相手を選ばず、読む、書く、聴く、話す、やり取りをするという言語活動をいとも簡単に提供してくれる。特に、個人の興味に合わせた教室外での課題や個人学習には大いにその実力を発揮する。暇に任せて興味のある分野で英語で会話をすると、文字チャットすることなどAIの得意分野であり、この気軽な言語使用の機会の創出が言語習得を促すことは間違いない。

2) 不安や緊張からの解放

英語の汎用性（通じること）がもっとも重要だとする国際英語論の発想は、学習者を緊張や不安から解放し、意味中心の言語活動に没頭する心理状態を醸成する。生成AIはそれをさらに後押しする。AIは人間ではない。何度繰り返しを要求しても全く嫌がらない。“Are you really sure? I don't think you're giving me enough information.”などと失礼な言い方をしても、何もなかったかのように会話は続く。また、誤りを指摘して欲しいと指示しない限り、AIは簡単にコミュニケーションの流れを止めるようなやりとりをしない。構造的に誤りの多い発話でもそれなりに解釈して返答する。つまり利用者を「ご主人」とするこの生成AIの発想が安心感と解放感を提供する。これは、他人の評価や恥ずかしい想いをするを極端に嫌う日本人には救世主であろう。

3) エンゲージメントを高める

英語教育における「エンゲージメント」とは、学習者が英語学習に「積極的に関与し」、学

習プロセスに対して強い興味を感じる状態を指す（染谷、2022）。エンゲージメントが高いと、学習者は自発的に英語を学び、動機付けも高くなる可能性がある。学習者の興味やニーズに合わせた教材の提供、学習者が自己効力感を持つことも、エンゲージメントを高める一因となる。

生成AIの登場により学習者の興味やニーズに合わせた教材の提供、インタラクティブで参加型の授業の展開、素早いフィードバックの効果的な利用などが容易となった。ただし、そもそも、間違えてもいい、伝わること（汎用性）がもっとも重要だとする国際英語論の発想がない限り、エンゲージメントを高める言語活動に学習者が積極的に取り組めない。ここに生成AI利用の言語活動に、国際英語論の発想が不可欠である理由がある。

4) 多様性の受け入れ

英語の多様性の尊重は国際英語論でもっとも重要な観点だが、生成AIも基本的には多様な英語を受け入れるという姿勢に立っている。AIプログラムは世界に向けて開発されているので、アメリカ英語でなければ理解できないというようなものは自然淘汰される。必然的に多様な英語を理解する。かなり強い日本語なまりのある英語でも、国際的に理解可能であるとAIが判断すればそれなりに理解し反応する。文化的知識がないと理解が難しい表現、例えば「あいつは狸だ（He is sly like a racoon dog）、Your friend where?（シンガポール英語でWhere is your friend?の意味）のようなものさえも、理解し、翻訳もする。日本語では津軽弁で話しかければ津軽弁で反応することも可能だ。

このように、生成AIの生み出す英語は決して利用者の英語にまで母語話者の英語を強く求めている。生成AIは国際英語論で英語学習の目標とする「自分らしい英語（My English）」の向上に大いに貢献してくれるといえよう。

おわりに

生成AIが発したものを、面倒だから、時間がないから、英語力がもともとないから使っている、などの理由でそのまま鵜呑みにしている、AIに振り回されて、いつの間にかともなない間違いや剽窃を侵していることになりかねない。AIの「悪魔の誘惑」に駆られずに、

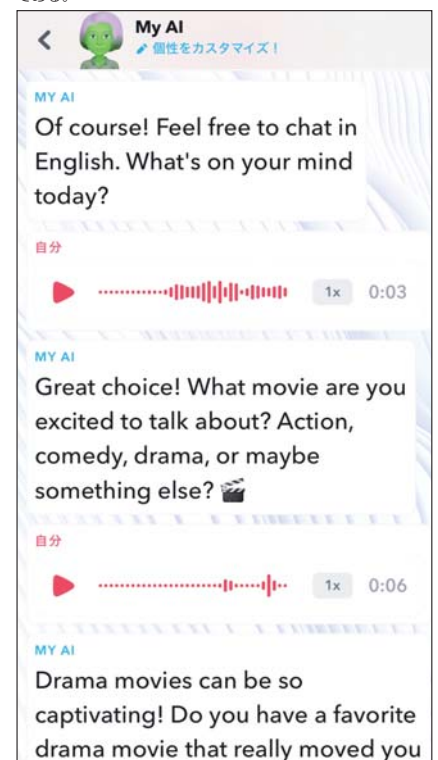
AIの「主人」として上手に利用して、個人の外国語学習に役立てるサポートをしていくのが、これからの英語教育や英語教員の重要な役割になることは間違いないだろう。そのためには、多様な英語の価値を認識し、「汎用性」を重視する国際英語論的な発想が不可欠であり、今後、生成AIの技術力と相俟って、相乗効果を生み出し、日本の英語教育に多大な影響を与えていくことになるだろう。期待も込めて。

参考文献

- 大下浩之（2024）筆者とのメールのやり取り
塩澤正他（2016）『国際英語論で変わる日本の英語教育』（共編著）くろしお出版。
染谷藤重（2022）「教師の動機づけスタイルがエンゲージメントに及ぼす影響」『中部地区英語教育学会紀要』51、33-40。
吉川寛他（2024）「AI時代の英語教育と国際英語論」第63回JACET国際大会口頭発表。

資料1. シンプルなAIとのチャット例

以下はAIと筆者がチャットした例である。筆者が音声で、Can we talk about movies? というと、AIが文字で返答した。ChatGPT.0ではすべて音声でチャットすることも可能である。





Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 教授

永田 典子 (NAGATA Noriko)

甲南女子大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。修士（文学）。専門分野は日本神話、説話文学、民俗学（口承文芸）。研究テーマは、神話から現代の世間話までを対象とし、伝承文芸の文化的位相を解明すること。過去に名古屋市文化財調査委員会委員を務め、現在は春日井市文化財保護審議会委員、安城市文化財保護委員会委員を務める。最近の著書は『尾張伝説考』（中部大学、2021年）。



伝統的祭礼行事の継承に関する問題点



はじめに

2019年末から始まった新型コロナウイルス感染症は、各地の伝統行事に深刻な影響を及ぼし、中止せざるを得ない状況を招いた。しかし、2023年5月8日に「新型インフルエンザ等感染症（2類相当）」から「5類」へと変更されると、中止していた祭礼の再開が増え、以前の日常生活が少しずつ戻ってきた。それは喜ばしいことではあるが、大変痛ましい事故が起こってしまった。2023年11月3日、静岡県伊豆の国市田京の祭礼で山車が坂道で暴走して横転したため、1人が死亡し、13人が重軽傷を負ったのである。捜査の結果、静岡県警は山車の運行に関わっていた責任者2人を業務上過失致死傷の容疑で書類送検した。新型コロナウイルス禍の影響で山車を出しての祭りの開催は4年ぶり、引き継ぎ不足や、背景にある祭りの担い手不足が指摘されている。

静岡県伊豆の国市の山車横転事故に限らず、地域社会における伝統行事の継承の難しさを痛感することがある。これまで調査に携わってきた名古屋市内3箇所の祭礼に関し、継承の問題について考えたい。

大森郷祭のオマント行事

愛知県の尾張地方や西三河地方には、オマントと呼ばれ、御幣や馬具などで飾った馬を社寺に奉納する行事がある。氏神の祭りでは、集落内のシマと呼ばれる単位で馬を出すのが基本であり、複数の村々が合同で行う場合はガッシュク（合宿）と呼ばれ、その範囲は数十箇村にも及び、名古屋市の熱田神宮や龍泉寺、豊田市の猿投神社など、特定の社寺に馬を奉納することも盛んに行われていた。オマントの行列には、棒などを持って様々な組み手を披露する「棒の手」と呼ばれる芸能の隊列

や、火縄銃の一隊も加わる。そのオマント行事のうち、2014年10月19日に名古屋市守山区の大森郷祭を調査したのは、名古屋市の無形民俗文化財の指定のためであった。

龍泉寺に飾り馬を奉納する習俗は、元禄年間に寺に雨乞い祈願に行き、願いが叶ったことから始まったとも、大森城主築田出羽守がこの寺に戦勝祈願に行ったことから始まったともいわれている。大森合宿は、近世以来の大森村と藤森村、上社村、一色村、下社村、高針村（以上名古屋市）、印場村、庄中村、新居村、稲葉村（以上尾張旭市）、長久手村（長久手市）で構成されていた。

瀬戸街道に沿った大森には、1950年代半ばまで陶器の運送用の馬が飼育されていたため、これを借りて馬道具をつけたという。しかし、自動車が普及すると馬を飼うことがなくなり、祭りにオマントを出すことが難しくなった。また、交通量が増え、龍泉寺まで隊列を組んで行くことが危険視され、龍泉寺にオマントを奉納することもできなくなってしまった。しかし、守山市の名古屋市合併（1963年）、明治百年（1968年）、八剣神社の改修（1972年）などを記念して八剣神社にオマントが奉納され、1984年からは5年ごとに郷祭をおこない、飾り馬と警固（鉄砲隊・棒の手隊）を出すしきたりが確立した。



オマントと警護隊（2014年10月19日）

大森郷祭のオマントは、現在、名古屋市内で定期的に行われている唯一の行事となっている。保存継承してゆく必要のある貴重な事

例として、名古屋市は2015年に無形民俗文化財に指定された。但し、郷祭開始前の準備段階において、主役である馬の飾りつけが地元民ではうまくいかなかった場面があった。飾りつけをしていたのは比較的若い世代で、5年前のときの経験者ではなかったようである。この役を担当するにあたり、前任者から方法などを伝授されていたのかもしれないが、手馴れていない様子だった。それでも伝統的な飾りつけができたのは、馬を貸し出している牧場主の全面的な指導の賜物であった。牧場主は、長久手市の警固祭などのオマントも手がけており、飾りつけの技術に長けている。しかし、この行事の存続には、地元で取りつけの方法技術を習得し、伝承してゆくことが重要である。祭りは5年ごとであるが、馬の飾りつけ役をはじめ、この祭りを構成するさまざまな役を保存会の下部組織として機能するように、定期的に講習会を開くことが望まれる。

名古屋市東区筒井町の山車行事

商業地区である東区筒井町では、6月第1土曜日・日曜日に津島信仰による天王祭が開催される。本陣を建中寺門前とする神皇車と、情妙寺前とする湯取車が曳行され、それぞれの山車にはその維持管理と、人形からくりや囃子の後継者育成などを主な事業とする保存会がある。

神皇車は、文政7年（1824）に旧広井村新屋敷で三之丸天王祭の見舞車として建造され、明治20年（1887）に当時の筒井町が購入したものである。湯取車は、万治元年（1658）に東照宮祭礼車として、中区旧桑名町で建造され、天保2年（1831）に当時の情妙寺前へ譲渡されたものである。どちらも1973年に名古屋市有形民俗文化財に指定されたが、2014年に無形文化財に切り替えられた。

山車行事の花形となるのは、梶方である。

彼らは楯棒に肩を入れて山車の方向を変えるなど、山車の曳行に見せ場を作る。楯方は8人で担当し、山車前方の左右の楯棒を4人ずつで担ぐ。聞き取り調査では、彼らは若連とも若い衆とも呼ばれていた。

若い衆もしくは若連とは、地域社会における若者の組織名称である。明治10年代から20年代にかけて、青年の地域集団としての青年会が全国的に組織されはじめ、筒井町でも結成されたが、明治43年（1910）に名古屋で開催された全国青年大会において、「青年団規十二則」などが議せられてからは「青年団」の呼称が優先することになった。しかし、その母体は明治時代以前からの若い衆であった。

神皇車と湯取車の楯方や、山車の方向転換、停止などをつかさどる役は、かつては名古屋で唯一の楯方集団「二番永田組」に依頼していたことがあった。しかし、1980年代になると、山車に楯棒を取りつける棒締めの方法や、山車の曳行に関わる技術を二番永田組に指導してもらい、それぞれの保存会が自前で楯方を担うようになったという。



神皇車の棒締め作業（2015年10月4日）

保存会には下部組織として「神皇車若連」「湯取車保存会青年部」があり、楯方に限らず、20歳代から30歳代にかけての地元民の活躍が目立つのは、このような下部組織がうまく機能しているからであろう。それでも筒井町にも少子高齢化による山車行事の継承問題があり、神皇車若連が2004年に作成した規則では、礼儀作法、身だしなみに関する規定がある一方、筒井町在住者以外でも祭りが好きで、継続的に祭りに参加できる人で構成するともあり、柔軟な組織作りがなされている。若い衆と青年団は、構成員は同じでも、本来は別個の組織であった。戦後間もなく、青年団は解体したが、筒井町では祭礼組織として慣例的に若い衆の名称を残し、彼らは今も山車行事の重要な担い手となっている。

筒井町には集合住宅が建ち、人口は増えている。山車の曳行を見物する人々も多い。しかし、祭礼関係者の話では、新住民からの寄付金集めが難しく、以前に比べて金額が少なくなっているという。無形民俗文化財に指定されると、文化財の管理・修理・後継者育成等に要する経費が補助されるが、それはあくまでも経費の一部である。祭礼の準備段階からの飲食代や保険料は、保存会の経費となっている。

鳴海裏方祭

かつて東海道の宿場として栄えた緑区鳴海町では、鳴海八幡宮と成海神社の祭礼に町ごとの山車が曳行される。その行事と各町内の山車は、いずれも2014年に名古屋市無形民俗文化財に指定されている。現在、鳴海八幡宮の祭礼を表方、成海神社の祭礼を裏方と称して区別しているが、本来は鳴海全体の祭りであった。両神社の神官による争論により、元禄13年（1700）に分離したと伝えられている。

鳴海裏方を構成するのは、丹下町、北浦町、花井町、城之下町である。聞き取り調査では、太平洋戦争前後のことを知ることはできなかったが、祭礼関係者によれば、1959年の伊勢湾台風以後に祭りが大きく様変わりしたという。この台風は伊勢湾の満潮時と重なり、高潮がゼロメートル地帯を襲ったため、東海地方は甚大な被害を被った。鳴海町でも家屋の半壊や、床上浸水などの被害があり、裏方4町も山車蔵が暴風で壊されるなどしたため、祭礼はしばらく中断し、やがて復活したが、その期間については記録がなく、詳しいことは分からない。中断していたときも、おそらく山車の手入れはされていたものと推測されるが、現在の祭礼を担う長老格の人々も、当時は小学生または中学生だったので、山車の管理については記憶がないという。復活後は祭礼日の短縮や曳行ルートの変更などがあったが、祭礼組織の役割分担が再編成され、現行の祭礼内容が実施されるようになった。

2020年、2021年は、コロナ禍により多くの伝統行事が中止されたが、成海神社の例大祭は規模を縮小して行われた。山車の曳行はなかったが、4町は山車蔵の前に山車を据えて手入れをし、飾りの大幕などの虫干しをした。山車行事は中止されても、このような作業は祭礼関係者の紐帯を強めることになる。



コロナ禍も行われた虫干し（2021年8月1日）

裏方4町には、東区筒井町と同様に、町内行事を実際に担う若者組織として若連中があった。若連中に入るのは1軒から1人と決まっており、兄が入っていたところに弟が入ってくれば、兄は脱退することになっていた。現在の4町の祭礼組織は町ごとに異なるが、共通して若連中に相当する組織はなくなっている。そのためか、楯棒を担ぐ楯方（地元では梶取）は若者ばかりではなく、中高年者も少なくな

い。4町の山車は筒井町の場合とは違い、山車後方の楯棒も担ぐので、前方と後方を併せ12人の楯方が必要となる。人気のある役割であるが、地元の者だけで組むことは難しく、知人を頼って町外から応援に来てもらうこともある。少子高齢化の時代であれば、このようなことは致し方ないが、町内での担い手不足は、ますます顕著になるであろう。町外者に楯方を依頼することが一時凌ぎではなく、今後も続くのであれば、どのような人物が望ましいか、その条件を明確にしておくべきである。

おわりに

今回取り上げた3地域の祭礼は、名古屋市無形民俗文化財に指定されており、その保存のための調査に筆者も関わってきた。高齢者に昔の祭礼のことを尋ねると、皆一様に祭りの日は小学校が休みだったという。それだけ地域社会に根ざした重要な行事であったが、現在は祭礼日が日曜日であるため、小学生にとっては特別感も昔ほどではない。

3地域は都市化による生活利便性のよさから人口は増えたが、地域コミュニティは希薄化しつつあり、少子高齢化と相俟って、後継者育成が深刻な問題となっている。若い世代、特に小学生の参加は、囃子方と、オマント行事では棒の手、山車行事では曳行の綱持ちであれば可能である。囃子方と棒の手は、女子が参加できない時代もあったが、最近は男女の区別なく参加できる。祭礼への関心を高めるには、このような参加体験が重要であり、それには地元の小学校の協力が是非とも必要である。昔の小学校は祭礼日が休みであったが、今の小学校には祭礼の後継者育成を兼ねて伝統的地域文化の学習が望まれる。

オマントの飾りつけや、山車操作などの技術面での継承には、マニュアルが必要となるが、文字化できない箇所は動画で説明できるようにデジタル化を推進してほしい。各人の職業が異なり、一堂に会して練習、打ち合わせすることが難しければ、オンラインミーティングはどうだろうか。鳴海の城之下町は、町内会の恒例行事や活動を画像で記録した日記をブログの形で公開しており、コロナ禍で山車曳行が中止になった年も含め、毎年の祭礼の様子がよく分かる。今後は祭礼記録のデジタル化も検討すべきと考える。

参考資料

- 「伊豆の国・山車横転事故 担い手不足が背景に 安全な祭り模索」東京新聞、2024年3月28日、TOKYO Web。
- 「大森村祭禮記録 明和～平成年間」2014年。
- 名古屋市教育委員会編『名古屋城下の山車行事調査報告書』名古屋市教育委員会、2018年。
- 名古屋市教育委員会編『鳴海・有松の山車行事調査報告書』名古屋市教育委員会、2022年。



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 教授

嘉原 優子 (YOSHIHARA Yuko)

兵庫県出身。関西大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門分野は宗教学、民俗学、文化人類学。研究テーマは、日本を含むアジアの宗教儀礼や奉納芸能、神観念について、近年は老いや延命と信仰の関係について関心がある。主な著書に『バリ島の村落祭祀と神観念』（おうふう、2010年）、論文に「バリ島の仮面—ランダの行方—」（『アリーナ第22号』、2019年）、「バリ島の長老集団の役割と構成について」（『アリーナ第23号』、2020年）などがある。



日本で働く外国人介護福祉士候補者たち インドネシア人介護福祉士候補者の訪日前研修を通して考える

老い行く日本社会

社会の高齢化が引き起こすさまざまな問題が指摘され始めて久しいが、さほど効果ある対策が取られることなく、2024年9月、日本の総人口に占める65歳以上の人口は29.3%、3625万人で、世界一の超高齢社会である。厚生労働省は、2040年には総人口の35%が、2070年には39%が65歳以上となると推計している。

一方で、2023年の日本の特殊出生率は1.20であり、過去最低を更新した。子どもが年老いた親の面倒を見るのが困難になったこと、親の介護に苦労した世代が歳を重ね、自分と同じような経験を子どもにさせたくないと考え始めたことなどが、高齢者介護が家庭や家族から離れた要因であろう。近年では、老々介護や介護疲れに起因する事故や事件も問題となっている。結果、多くの人は人生の最後の時期をどこでどのように過ごすか考えるようになり、終活がブームとなった。



介護施設で晩年を過ごす高齢者を見舞う家族

高齢者介護を施設や専門家に託すようになったことは人口バランスの急激な変化がもたらした必然であろう。

日本では、年々、老人介護施設等が増え、その定員数は2022年には約162.5万人となった。介護に従事する職員数も215.4万人にまで増加したが、厚生労働省によれば2025年には約38万人の介護職員が不足す

ると試算されている。

近年、介護関係の有効求人倍率は他業種のそれと比べて高いが、仕事の内容や給与の水準から日本の若い世代には敬遠されがちである。そこで、海外にその人材を求める制度が策定されることとなった。

外国人介護福祉士候補者の受け入れ

2008年から二国間経済連携協定（EPA）によるインドネシア、フィリピン、ベトナムからの外国人介護福祉士候補者受け入れが始まり、2017年には留学生や技能実習生への「介護」在留資格が追加され、2019年には特定技能をもつ即戦力人材の就労目的での受け入れが始まるなど、次々と外国人介護職人材受け入れルートが策定された。

外国人が介護の現場で就労する場合、さまざまな困難に直面する。制度上の問題、日本語習得の問題、そして文化的障壁などである。制度の厳しさは彼らに長期の滞在を困難なものとする。また、彼らは「日常会話の日本語」だけでなく、「介護業務の日本語」「国家試験の日本語」を習得しなければならず、さらに、日本という異なる生活習慣、文化的背景、価値観をもつ社会で生活をしていかなければならない。

これらの問題の解決に向けては、日本語教育学、看護学、介護福祉学の分野で様々な研究がなされ、新たな日本語教材が開発されたり、改訂されたりするなどしている。

インドネシア人介護福祉士候補者

外国人介護福祉士候補者の多くは、東南アジア出身者であるが、それぞれの文化的差異はほとんど考慮されず、「外国人」と一絡げにされており、日本で就労、生活する上での障壁は高い。なかでもイスラム教徒が多いインドネシア

人は、女性の髪を覆うスカーフの着用、日に5回の礼拝や食事上の禁忌などによって、仕事や生活への不適合などが報告され、課題も少なくなかった。看護師の有資格者を条件としていたEPA介護福祉士候補者が、日本で看護の仕事ができないことに戸惑ったり、看護師と介護士の立場の違いに自尊心を傷つけられたりする事例も見られた。

そもそも当時のインドネシアには介護士という職業はなく、「介護」という概念もなかった。高齢者は自宅で家族と共に暮らすことが常識であり、自宅には誰かしら面倒を見る者がいた。また、Pembantu（お手伝い）という職業が一般的に認知されていることもあって、高齢者介護を専門に行う職業は想定されなかったのである。

送り出し機関における訪日前研修

インドネシアは、EPA介護福祉士候補者だけでなく、技能実習生や特定技能生を多く送り出している。彼らは母国の送り出し機関で訪日前研修を受けて来日し、来日後には日本でも研修を受ける。2017年に日本において設立された外国人技能実習機構に登録されているインドネシア国内の送り出し機関は、一覧表によれば2024年2月現在、439箇所にも増加しており、大都市のみならず地方にもまんべんなく所在が確認できる。

筆者は、2023年度にジャカルタとデンパサール、及びそれぞれの周辺地域の6か所の送り出し機関において訪日前研修を調査した。

これらの送り出し機関に入るための費用は、一例を挙げると、FUJI ACADEMY BALIでは、入学時の費用が約800万ルピア（約73500円）、採用時に必要となる費用が約1300万ルピア（約119500円）である。その他、健康診断費用、パスポート費用などが別途必要となる。また、在学期間は標準的には6ヶ月間で、

全寮制であるため光熱費・水道費・食費・部屋代を含めた寮費が約900万ルピア(82700円)必要となる。一般的なインドネシア人にとっては極めて負担が大きいので、親戚などから借金をして入学する者、送り出し機関に用立ててもらい仕事に就いてから返金する者も少なくない。中には悪質なブローカーも存在するとのことだ。

入学後は、月曜日-金曜日が授業日で、8時から16時15分まで休憩を挟みながら1日に5コマの授業(各60分)と1コマのテスト(45分)がある。土曜日は復習に当てられ、日曜日が休日である。日本語能力検定4級(以下N4)が最低限の必要条件であるため、N4取得を目指す研修生は4〜6ヶ月かけて、日本語の文法、聴解、読解、文字・漢字、語彙・発音、会話、作文、日本文化についての授業を受講する。「日本語、日本文化、日本における生活知識」に関する授業は、一律に649時間であるが、「介護」に関する授業は、技能実習生の場合は312時間、特定技能生の場合は500時間である。いくつかの送り出し機関では、初期のEPA介護福祉士候補者が指導をしていた。また、いずれも「老人ホームでの研修」が468時間必要であるが、それぞれ看護専門学校卒業生は、免除されている(看護学校卒業生が学んだのは看護であって、介護ではないのだ)。

研修内容を時間割をもとに計算すると、「文法」に最も多い時間が費やされており、40%である。ついで、「聴解」に16%、「読解」に12%、「語彙・発音」「文字・漢字」にそれぞれ8%、「漢字」「作文」「会話」「日本の文化」にそれぞれ4%となっている。



訪日前研修における日本語の授業風景

N4合格を前提としているため、入国前に4〜6ヶ月行われる日本語授業は、もっぱら日本語能力検定対策となる。検定で問われる知識と実践的会話能力は大きく異なるため、たとえN4に合格したとしても、仕事をする上ではあまり役に立たない。

日本語の授業で用いられる教科書は『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)、その他の副読本、日本文化や日本事情については『日本の生活指導』(Endah Herawaty/JIAEC)等のテキストが用いられている。日本についての知識を各機関の研修生に尋ねると、大抵はこれらのテキスト内で紹介されている内容が返ってくる。「日本には美しい四季があり

ます」「日本人は時間に正確です」「日本人は勤勉です」などである。インドネシアには雨季と乾季はあるが、1年を通じて気温はあまり変わらず「衣替え」の概念がない。テキストには四季に必要な衣服についても説明がある。また「ゴミの分別」方法も重要な習得事項である。



用いられるテキストの一例

授業を通して日本語、日本文化を学ぶだけでなく、寮生活の中で日本事情を学んでいく。それぞれの送り出し機関が、研修生たちが日本語や日本への理解が深まるようさまざまな工夫をしている。早朝の時間帯に起きてラジオ体操などの運動をし、身繕いをし、揃って食事をし、受講し、機関によってはクラブ活動に参加する。毎日、時間を意識した規則正しい生活を送ることになる。寮での食事は、寮生たち自身によって用意され、皆、同じ食事を摂る。食事の用意は当番制である。時間を守るだけでなく、共同作業に慣れさせるという目的がある。機関の中には介護以外の業種に就く研修生もあり、漁業や農業、工場などで働く場合には、同調性が求められるからであろう。

設立や運営に日本人が関わる送り出し機関においては、挨拶といわゆる報連相の徹底が行われていた。教職員にだけでなく、外部からの訪問者にも、顔を合わせるたびに立ち止まり、大きな声で挨拶をする。制服を着用し、機関によっては男子の髪形は丸刈りであり、現代の日本人には、すでに失われてしまったかつての日本式、あるいは軍隊式ともいえる規律正しさが感じられる。厳しく規範を教え込むことについては、「彼らが日本に行って驚いたり、困ったりしないように」との説明があった。

研修を実施する指導者は、大学等で日本語を専門的に学んだ者、かつての介護福祉士候補者、日本への留学や介護職を含めた就労経験のある者、両親のいずれかが日本人であり日本語に堪能な者、在インドネシア日本人が中心となっている。日本語教育の専門的知識を持つ指導者は少ない。時には誤った日本語、古い情報が伝えられる場合もある。

先述のように、日本語会話を学ぶ時間は研修全体のわずか4%で、一方的に自己紹介ができるようになっても質疑応答への対応は困難である。ある送り出し機関では、日本人ボランティアがオンラインで研修生らと自由に会話をするフリートークルームを設定するなどし

て、日本語会話力の向上を図っている。

異文化間老年介護の課題と展望

1993年に設けられた技能実習生制度では、日本での就労は認められておらず、実習先での不当な待遇による失踪、定められた滞在期間を過ぎての不法滞在などの問題が少なくなかった。外国人不法滞在者に対するイメージは、簡単に犯罪と結び付けられてしまう。しかしながら、これは外国人労働者だけに問題があるのではなく、雇う者、ひいては日本人の外国人、特に発展途上の国の人々への偏見や差別意識にも原因がある。

特定技能生制度は、労働力不足を補うという明確な目的のもとに2019年に設けられた。2024年3月には外国人介護福祉士の訪問系サービスへの進出を解禁する方針も打ち出された。導入が進めば新たな選択肢の一つとなるであろう。

外国人介護福祉士を取り巻く政策は刻々と変わっている。今後は、介護する側だけでなく、介護される側にも異文化を理解することが求められるであろう。

異文化間老年介護問題は、日本だけでなく、近い将来インドネシアはじめ他国においても確実に起こる地球規模の懸案事項である。日本はその懸案を払拭し、異文化間老年介護先進国となれるだろうか。その際、日本人が求める理想的介護が、必ずしも他の国ではそうではない場合もあることに留意する必要があるであろう。



訪日前研修に励むインドネシアの若者たちと筆者

謝辞

調査にご協力いただきましたインドネシアの送り出し機関の皆様、研修生の皆様に御礼を申し上げます。また、本調査はJSPS科研費「異文化間老年介護をめぐる応答の人類学的研究—インドネシア人介護職人材を中心に—」(課題番号22K01103)の助成を受けて実施されたものです。

参考文献およびサイト

- 厚生労働省・内閣府・総務省統計局各ホームページ(最終閲覧日2024年9月16日)
- 中友美「外国人介護職員受け入れに関する展望と課題—介護職の抱える問題と外国人に特有の問題—」『日本大学大学院総合社会情報研究紀要』No. 16(2015)
- 布尾勝一郎ほか「外国人介護・看護労働者のキャリア形成」『日本語教育』175号(2020)



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 教授

願興寺 礼子 (GANKOUJI Reiko)

名古屋大学大学院環境学研究科環境社会学専攻博士課程満期退学。専門は臨床心理学。著書に「スクールカウンセリングと発達支援【改定版】」(共著)(2018, ナカニシヤ出版)、「心理検査の実施の初歩」(共編著)(2011, ナカニシヤ出版)など



クライアントさんから学んだこと —「受容」と「共感」の難しさ—



はじめに

私が専門とする臨床心理学は、あくまでも個人を対象とし、活用しうる限りの最善の知識と技術を駆使して、目の前にいる、悩み苦しんでいる人を理解し、その人がその人らしく幸せに生きるための最大限の援助を行うことを目的とする学問である。したがって臨床実践と深く関わり合っている。私はこれまで臨床心理士(公認心理師)として数多くのクライアントと関わり、様々なことを学ばせていただってきた。ここでは、私がまだ心理士になって間もない頃に担当した事例を紹介しつつ、心理士の基本姿勢として必須とされる「受容」と「共感」について考えてみたい。なお、事例の記述にあたっては、クライアントの匿名性を保つことを最優先し、内容の修正を行っていることをお断りしておく。

子どもの問題で来談した母親の事例

Aさんは、子ども(B)が学校など特定の場面で話せなくなる(場面緘黙)を心配して来談した30代後半の母親であった。Bは小学校2年生にしてはか細く小柄な男児で、家では問題なく話ができていながらもかわらず、学校では表情がこわばり、先生や友達に対して一切言葉を発することができなかった。幼少期からBは公園に行っても母親のAさんから離れて他児と遊べず、元気でたくましく育てほしいというAさんの理想からはほど遠い子どもであった。思うようにいかない子育てによるストレス、仕事中心で家庭を顧みない夫、B

を出産後それまで没交渉であった義理の両親による干渉が加わり、Aさんは常に余裕がなく、イライラのし通しであったという。AさんはBを「過視線(Aさん自身の表現)」という鋭い視線で監視する一方で、Bが泣いて母親を求めても手を貸すのを控え、かなり突き放した育て方をしていた。Bは泣いても応えてもらえない体験を積み重ねることによって自己主張をする意欲を失い、これが緘黙に繋がっていったと考えられた。母子間に大きな気持ちのズレがあり、Aさんに対しては、そのズレに気がつき緘黙的なBを受け入れられるように、私が母親面接を行い、またBに対しては別の担当者が、活動性を高め子どもらしい自己表出を促すことを目指して、遊戯療法が開始された。

子どもを愛せない母親の苦悩

来談当初より、Aさんはこれまでの自身の子育てのあり方に問題があることを認めつつも、「Bのことをどうしても理解できない。下の子に比べてBを愛することができない」と何度も繰り返す。Bのように線の細い子だけで終わりたい。打てば響くような手応えのある子どもの子育てを楽しみたかったのが、第二子がどうしてもほしかった」と語った。AさんはBを出産した1年後に第二子を早産で亡くし、その後も2回連続で流産を経験し、来談するちょうど1年前に、待望の第二子となる男児を出産していた。Aさんは、「Bの時には味わえなかった子育ての楽しさ」を満喫しており、益々Bに対して肯定的な気持ちを抱けなくなっているようであった。当時の私はまだ臨床経

験も浅く、独身で子育て経験もないことから、AさんのBに対するどうしようもないほどの強い拒否的感情に圧倒され、その感情を受け止める力量を持ち合わせていなかった。それどころか、これではBは居たたまれないであろうと、目の前にいるAさんよりも子どもであるBの立場に立って、Bのために何とかAさんに変ってもらわなければならないと思い、面接に臨んでいたのであった。

面接の中断

AさんはBに対する気持ちを一通り話し終え、その後の面接ではBの話は背景に退き、目を輝かせて自身の「男女は対等であるべき」という人生観や子ども観、当時関心を寄せていた家庭文庫についての活動について生き生きと語った。その一方で、「結婚なんてしなければよかった」と夫との結婚生活の不満をまくし立てた。Bを愛せないことの一因が、Bの性格が夫によく似ているためであることが判明した。

ある時、Aさんは和田重正の著作に触れ、『「自分はどうか生きるか10年くらい悩み続け、ある朝目覚めると、朝日の中で椿が咲いているのを見て、ただ生きている、そのこと自体の喜びに気付く」。ここを読んで大変感激した。自分自身が生きる喜びを感じ、楽しい人生を送っていることが大切だと気付いた」と語った。この言葉をそっくりそのまま受け取ることが出来なかった私は「Bに対しても、ただ存在しているだけでよいと思えますか」と、Aさんに対して強引な直面化を行ってしまったのである。

Aさんは「まだBに対してはそう思えない」と苦しいに応えた。今にして思うと、Aさんに向けたこの発言は明らかに私の逆転移（逆転移：治療者がクライアントに対して無意識に自分の感情を向けてしまうことを指す）から生まれたものである。自然な母性を欠き、アニムス優位な（男性的な）生き方を志向するAさんに、私はいら立ちを感じていたのであった。するとAさんはさらに語気を強め「私にとって、Bは夫の愛人が産んだ子としての位置づけ。Bとは一生自然な関係がもてないと思う」と語り、面接終了時には「ここで話しても、私の価値観は変えられないと思う」ときっぱり言い放ち面接室を出て行った。この時の私は、自分の力不足や不甲斐なさを感じるとともに、Aさんの攻撃的な強い言葉や態度に、相当傷ついていたことも事実であった。当時は、攻撃的なAさんによって傷つけられているBという関係が、治療の場でも再現されており、治療者の私の方が、Bと同様Aさんによって傷つけられていると考えていた。しかし今にして思うと、Aさんを傷つけていたのは私の方で、Aさんは傷ついていたBだった、と考える方がしっくりくる。私の方がAさんの気持ちや求めているものを理解せず、母親であれば子どもを愛すべきだと、Aさんに理想の母親像を求めていたのであった。面接を重ねてもAさんにそのような母親像が形成されていかないために、イライラしたり焦りを感じ、Aさんを追い込んでいたのは私の方であった。

その後、AさんはBを連れて来談するものの「きょうはBの遊戯療法だけで、私の面接はお休みさせてください」という回が増えていき、ついには「面接は辛いのでもう終わりにしたい」と言い、Aさんとの面接は中断となった。母親面接が中断になると、子どもの治療までも中断してしまうことが多いが、Aさんは遊戯療法を楽しんでいるBの来談には抵抗を示さなかった。Bは最初は無口で、プレイルームでも全く自発的に動くことができなかったが、子どもの担当者との関係が深まって行くにつれて、それまで溜まっていた攻撃性を、しだいに勢よく発散するようになっていった。時に攻撃性がエスカレートすることもあり、子ども担当者が対応に苦慮する時期も見られたが、やがてそれも建設的な形で収束していき、年齢相応の子どもらしい感情を表出できるようになっていった。Aさんは、Bのこうした変化を肯定的に受け止めることができた。子どもの

治療が中断せずに済んだことに関しては、AさんとともにB、子ども担当者に心より感謝している。

再会と別れ

学校でも問題なく話ができるまで成長したBは自らの意思で治療を終える決断をした。治療を終えるにあたってAさんと再会し、これまでの面接を振り返ることになった。最終回の面接でAさんは、「自分のことを振り返ることは辛かった。それが必要だとは思うのだけれど、まだちょっと取り組む自信がない。逃げていくのかもしれないが、いずれそれを乗り越えたいと思う」と語った。Bとはまだグクシャクすることも多いようであったが、Bの変化についてはとても嬉しそうであった。最後に「私の気持ちです」と可愛らしいイヤリングを私に贈ってくれた。クライアントから贈り物をもらうことについては様々な意見があるところであり、それを取り上げるだけで紙面が埋まってしまうため本論ではその議論を行うことはしない。クライアントはイヤリングに何を託したのか、私に何を伝えたかったのか。もっと耳美人になれ、もっと人の話を聴ける素敵な耳になるように、とのメッセージが込められていると受け取ったのであった。

クライアントの話を受容し共感するとは

この事例は完全に失敗事例であり、今でもAさんに申し訳なくて心が痛む。来談者中心療法を創始したC. R. ロジャーズ（Rogers, C.R.）に次のような有名なエピソードがある。ロジャーズは子どもの問題で訪れた知的な母親に対して母親面接（母親面接では、通常子どもの問題への理解を深め、母親としてどのように子どもに対応するかということが扱われる）を行っていたが、それに失敗する。その直後にその母親から個人面接を希望され面接を再開。母親は悲惨な結婚生活や夫への不満を話し始め、真の面接が開始される。母親が真実に開かれていくと子どもの問題行動も消失していったのであった。この体験によりロジャーズは、面接の方向性を決めるのはクライアント自身であり、クライアントの意思を絶対的に尊重するという、彼の生涯の方向性を決定していくことになった。ロジャーズの言うように、目の前にいるその人こそがクライエン

トであり、その人の話したいことにしっかり耳を傾けることこそが面接の基本である。子どもの問題で訪れた母親であっても、その人の訴えをまずはしっかりと傾聴する必要がある。

村瀬（1981）は、治療的な展開に関与する条件を吟味する中で、諸々の心理療法に共通する基本技法として受容と共感を挙げ、次のように述べている。

「受容とは患者の心理に対する治療者の全面的肯定であり、評価、批判、指示を含まない共感である。（中略）共感とは『相手の立場に立って感じる』社会通念的な価値観から全く開放された無条件的な患者の尊重であり、こうすることは、通常の世間的な人間関係では起こり得ない。したがって治療体験の中で、こうした共感に基づく受容体験により、患者は新たな驚き、歓びを感じて、自分自身を受入れ、健全な自己愛、ひいては環境への開かれた態度、交流を発展させていくのである。」

面接の場は非日常的な場であり、クライアントが日常場面では表出できない感情や思いを、十分かつ安全に表出できる場である必要がある。また、そのような場を提供することこそが治療者に求められる役目である。Aさんが安心して長年抱いていた感情を吐露し、それを治療者に受容されていたら、力のあるAさんであったので、自らの問題を自分の力で解決していけたと思われる。臨床経験を40年近く積み上げてきた今でも、Aさんから贈られたイヤリングを見る度に、クライアントの話を聴ける耳になっているのだろうか、自問自答する日々である。



引用文献

村瀬嘉代子 1981 子どもの精神療法における治療的な展開——目標と終結—— 白橋宏一郎・小倉清編 治療関係の成立と展開 児童精神科臨床2 星和書店



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 教授

坂本 剛 (SAKAMOTO Go)

名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程修了。博士（心理学）。専門分野は社会心理学・環境心理学。主に自然資源の管理に関わる人々の協力的行動や合意形成、制度の受容などについて研究している。『資源管理における行政への協力意図に関する地域と都市の住民比較：内モンゴルの草原管理を事例として』で2018年度日本グループ・ダイナミクス学会優秀論文賞を受賞。著書（共著）に『近現代モンゴルにおける都市化と伝統的居住の諸相』（東北アジア研究センター叢書）などがある。



モンゴル遊牧社会における互酬性への期待の機能／奄美大島の民話における多様性の社会生態学的検討

社会心理学をベースにした環境心理学研究

筆者はこれまで環境問題と人間活動の関わりに関心を持ち、主に社会心理学をベースにした環境心理学研究に従事している。われわれの社会はどうすれば自然環境を上手に管理できるのかという問いをめぐって、適正な資源管理のための人々の協力的行動と規範に焦点を当てた研究、資源管理制度の公共受容に関する研究、そして環境保護に結び付く態度や行動に関わる個人内の過程に関する研究に携わってきた。加えて近年では、社会を支える相互扶助の仕組みがどのような道徳的信念によって支えられているのか、道徳の発生と機能に関しても興味を持ち、検討を始めている。

本稿ではモンゴルの遊牧社会における他者との協力的行動のダイナミクスに関する調査分析の結果と、奄美群島を対象に文化的産物の多様性について社会生態学的観点からアプローチした検討を紹介する。

モンゴル遊牧社会における互酬性への期待

モンゴル遊牧社会の基盤には互酬性の規範があり、互酬性への期待が牧民の柔軟な集団成員性と移動を可能にしている（Fernandez-Gimenez, 2002; 坂本他, 2015）。

本研究は移動の前提条件となる牧民の協力的行動に対して互酬性期待が持つ機能を明らか

にする。互酬性期待が高い場合、柔軟な移動を行う見知らぬ他者に対する協力も促進されると予想される。さらに交互作用として、互酬性期待が低い場合は社会的同一視の程度によって協力的行動が影響を受けると予想される。

モンゴル国Tov県内の3郡とウランバートル市郊外2地区にて、自治体行政の牧民基本台帳を用いて各郡60世帯、UB内各地区30世帯ずつを無作為抽出し、世帯主に対して訪問面接調査を行った（男性185名、女性55名、 $Mage=48.49$, $SD=12.12$ ）。

主な調査内容は次の通りであった。協力的行動は、畜産労働を基にした4種の協力的行動について、必要な時に協力し合う可能性のある隣人であるサーハルトアイル（以下、隣人）、及び緊急の非規則的な長距離移動を行う牧民オトルそれぞれから協力を求められた際の行動意図を尋ねた。互酬性期待は、同4行動を、隣人及びオトル先の牧民からどの程度期待できるか尋ねた。交互作用はこれら行動それぞれに隣人及びオトルと情報交換や相互協力をした経験の頻度を尋ねた。社会的同一視はKarasawa(1991)を基に同一視の程度を尋ねた。宗教的信念は遊牧社会の神テンゲルの懲罰神イメージの強さをShariff & Norenzayan(2011)の手続きに基づき測定した。

隣人への協力的行動の内的整合性を示す信頼性係数が低いため各項目を個別に目的変数とする重回帰分析を行った($VIF=1.06\sim 1.36$)。隣人への協力では迷い家畜搜索 ($adjR^2=.12$,

$p<.001$)、栄養価の高い草情報 ($adjR^2=.15$, $p<.001$)、土壌情報 ($adjR^2=.07$, $p=.001$)、水汲み ($adjR^2=.15$, $p<.001$) いずれでも有意な重決定係数が示され、互酬性期待の標準偏回帰係数が一貫して有意であった（順に $\beta=.20$, $p=.007$; $\beta=.35$, $p<.001$; $\beta=.26$, $p=.001$; $\beta=.33$, $p<.001$ ）。同一視は栄養価の高い草情報 ($\beta=.15$, $p=.041$) に対して、交互作用は迷い家畜搜索 ($\beta=.16$, $p=.038$) に対して有意な値を示した。懲罰神イメージからは有意な関係が示されなかった。互酬性期待と同一視による交互作用は栄養価の高い草情報に対して見られ ($\beta=-.13$, $p=.045$)、互酬性への期待が低い場合に、社会的同一視の影響が強くなる傾向が示唆された。

オトルについてイメージが困難と述べた46名の回答を除外し、オトルへの協力的行動 ($\alpha=.77$) を目的変数とする重回帰分析を行った結果、重決定係数は有意であり ($adjR^2=.44$, $p<.001$)、互酬性期待 ($\beta=.55$, $p<.001$) と懲罰神イメージ ($\beta=.12$, $p=.025$) からの予測が有意であった ($VIF=1.03\sim 2.18$)。交互作用は見られなかった。

以上の分析より、モンゴルの遊牧社会における協力的行動が互酬性への期待により促進されていることが示され、一つ目の仮説は支持された。交互作用に関する仮説は協力的行動の一部で支持される結果となった。全般的に、これまで遊牧研究で見出されてきた互酬性の期待が機能していることを定量的に示す結果となり、一般交換期待仮説 (Stroebe et al.,

2005)に基づく解釈が可能であることが示唆された。また関係がより不確実なオトルに対する行動でテンゲルの懲罰神イメージが効果を持った。超自然的懲罰(Shariff & Rhemtulla, 2012)がどのような条件で機能するのか今後の詳細な検討が求められる。

民話の多様性の社会生態学的検討

本研究は民間説話(folktale, 民話)における道德の多様性と地域の社会生態環境の関連を解明するため、その手始めとして、話の内容自体の多様性と環境要因が相互に関連することを実証的に検討する。

社会生態学的アプローチに基づく文化心理学研究は、心理・行動傾向に文化差が生じる理由を環境要因による影響から実証的に検討することを目的としている。しかし各個体が個人的学習に基づいて環境へ適応した場合でも同一の傾向が獲得される可能性がある(竹澤, 2012)。そこで社会生態学的アプローチにおいては、人々に共有された心理・行動傾向が再生産されるプロセスと社会的伝達のメカニズムを検討することが重要となる(村本, 2014)。ここでは、そのような社会的伝達と再生産のプロセスを検討するための一つの方法として、両者の結節点となる文化的産物(cultural products)に焦点を当てた検討を行う。物語、メディア報道、芸術などの文化的産物は、その文化で共有された心理や行動の特徴をよく反映している(Morling & Lamoreaux, 2008)とともに、そうした心理・行動傾向の再生産に寄与している。

本研究が注目する民話とは民間に口頭で伝承された説話であり、民間の言語伝承の一分野となる。文字言語に依存しない自然的な口頭言語によって伝達・聴取され、また創造的営みである文学とは異なり誰しもが共同体の中で伝承し、また享受する(福田, 2000)。さらに民話は人々に共有された宗教的信念や道德、社会慣習や教訓と密接に関わっている(Eliade, 1957; 関, 1967)ことから、文化で共有された心理・行動の傾向を検討する題材として民話に注目することには意義がある。本稿では鹿児島県の島嶼地域である奄美大島の民話を対象に、社会規範の在り方に対する社会生態学的アプローチを用いた検討を試み

る。

社会生態学的要因の検討にあたり本稿では特に公的制度的実効性を取り上げ、対象地域が特徴的な近世の統治・社会制度を経験し、その影響の中で近代を迎えることとなった一連の歴史経緯に着目する(Nisbett & Cohen, 1996; Putnam, 1993)。

慶長14年(1609年)、島津軍の琉球侵略に伴い奄美大島もその統治下に置かれ、以降、各地域の行政官は大島内で徴用される島役人が充てられ、全体を統治する代官と代官補佐が藩政側から赴任した。制度上は権力を一元化した管理・統治体制となるが、実質的には島役人や豪農らの協力がなければ統治は不可能な状態であった。藩政側も土地改良等で功績のある者を武士格に取り立てるなどして、島内の社会階層構造を統治の効率化に役立てた。また石高制を基に、商品性が高い黒砂糖で年貢を納める換糖上納制と、最終的には徹底した専売制が敷かれ、加えて貨幣流通が禁止された。市場交換が極めて制限された社会経済風土となった。さらに藩政から通達された複数の法令集の分析から、公的制度のほかに、役得や蓄財を目的とした様々な利害関心が生み出す制度環境が存在したことが示唆されている(箕輪, 2021)。

以上のように近世奄美では、フォーマル・インフォーマルの複層的な社会階層構造の基で、市場が未発達という社会経済風土の中、一部権力の腐敗を含む(舩, 1980)、様々な制度的特徴に適應するやり方で、住民は自他の利害関心を調整する必要があったと言える。

また同時に、公的な社会制度が比較的濃く浸透した地域と、社会の各階層の私的な利害追求を制限することが困難で、公的制度以外にも実質上の様々な制度の複雑な影響の強い地域が発生したことが考えられる。享和元年(1801年)までという藩政期のほとんどの時期で、代官所(本仮屋)は現在の奄美市笠利を中心とする大島北部地域に置かれており、このことから統治の主体が常駐する北部地域とそれらから物理的な距離を隔てた地域という特性が浮かび上がってくる。北部においては公的制度的実効性が比較的高く、行動の結果の予測可能性が高いため、社会規範が明確で普遍的な道德が醸成されやすいであろう。また距離を隔てた地域ほど公的制度的実効性が

相対的に低く、生活上の各課題の解決に適應した様々な行動調整が求められるため、多様な社会規範が機能し、共有される道德の種類も多様になると考えられる。

本研究は、大島北部の笠利・赤木名の代官所から各集落までの直線距離と各集落で採集された民話の特性との関連を検討する。代官所から距離を隔てた集落ほど、採集された民話の種類がより多様であることが予想される。

【方法】

奄美・笠利町昔話集(立命館大学説話文学研究会, 1985)、大和村の昔話(山下他, 1986)、瀬戸内町の昔話(登山, 1983)、奄美大島昔話集(田畑, 1978)、奄美諸島の昔話(田畑, 1974)に収められた民話を対象に分析を行った。日本昔話大成による昔話の一定の型を示す「大成番号」を用いて話の種類が多様性を検討した。大成以前の資料に基づく分類が行われているものは大成番号による再分類を行った。本稿では各集落で採集された民話のうち大成による分類を当てはめることができない、独自の話がどの程度含まれているかを多様性の指標とした。

笠利・赤木名の代官所跡から各集落への距離を計測する際には、集落内の祭祀施設と隣接して建てられる集会所の所在地を用いた。

【結果と考察】

資料には全1031話が掲載されていた。大島内では77の集落から採話があった。大島以外の奄美諸島の民話や採集集落が不明のものを除いて、最終的に894話を分析の対象とした。うち390話に大成番号が付与されなかった(43.62%)。1集落あたり平均11.61話の採話があり、うち平均42.43%が大成番号による分類がなされなかった。代官所からの距離と、各集落における大成による分類がなされない話の割合の間の相関係数は $r=.24$ であり、5%水準で有意な正の関連性が示された。仮説が支持され、代官所からの距離を隔てるほど民話における話の種類が多様性が高まった。

文化的産物に見られる特徴を社会生態学的に検討するうえで歴史・経路依存的要因は頼れる指標となることが示唆された。今後は、各民話に示される道德的示唆をコード化し、環境要因との関連を検討していく。



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 准教授

川上 文人 (KAWAKAMI Fumito)

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻博士課程修了。博士(学術)。専門は発達心理学、比較認知発達科学。ヒト、チンパンジー、ニホンザルを対象に、おもに笑顔の進化と発達について研究をおこなっている。近著に『対人関係の発達心理学 子どもたちの世界に近づく、とらえる』(2019年、新曜社、共著)がある。



笑顔を集めるフィールドワーク



笑顔の研究って？

「みなさんは昨日、どんなときに笑いましたか？」
 多くのかたは、楽しかったことやおかしかったことを思い浮かべようとするのではないだろうか。現在生後9か月の娘は、朝に「おはよう」と声をかけただけで笑顔を返してくれる。こちららはそれをみただけで笑顔になってしまう。私が子どもの笑顔の研究を学会で発表していると、その内容を聞く前によく聞かれるのは、「子どもがおもしろいと思うものは何ですか？」ということである。その問いには「それがわかる研究ではないんです」と答えている。私の研究は冒頭の問いのとおり、「私たちはどのようなときに笑顔を見せるのか、それに人間の特殊性はあるのか」というものだ。

「おもしろいと思うものは何か」と「どのようなときに笑うのか」は同じようなものではないかと指摘をうけそうだが、その2つの問いはズレている。前者は何をおもしろい、おかしいと思うのかというユーモアの研究で、そこに笑顔が生じるとは限らない。実際に、世界一おもしろいジョークを検索してみてもいい。おそらくあなたは笑わないだろう。ユーモアの研究は、おもしろおかしいという感情や、それを引き起こすことばや動作の使い方にかんする研究といえる。一方、「どのようなときに笑うのか」というのは、笑顔が生じた前後の状況を調べる研究で、必ず笑顔が生じなければならない。逆にいえば笑顔さえ生じていればよく、それにとまなう感情は何であってかまわない。たとえば、私自身が笑顔の研究をはじめるときとなったのは、ニホンザルの赤ちゃんが寝てい

るときに笑顔を見せる現象の発見であった(Kawakami et al., 2017)。しかし、その笑顔を見せたニホンザルはどのような感情だったのか、そもそも感情をとまなっていたのかすら、よくわかっていない。眠っていたので何もみていないし、ニホンザルの赤ちゃんに原因を聞くこともできない。このようにユーモアと笑顔の研究は一部重なるが、決して同じものではない。しかしそれらが同じものと思われがちなのは、ユーモアには笑顔がともなう、笑顔はおもしろいときに生じる、というありがちな印象に多くのひとが引きずられているからであろう。「よくあること」や常識を疑うところから心理学の研究はスタートすることが多い。

常識としては、私たちが笑うのは楽しいときやおかしなときなど、ポジティブな場面であろう。しかし、それだけではないことも、私たちはよく知っている。苦笑いやごまかし笑いをみせるとき、楽しさやおかしさはあまり感じられないだろう。以前友人を自宅に招いた際、彼らの1歳台の娘は知らない場所、初めて会うおとなたちに困惑しつつも、声をかけられて笑顔を見せていた。おそらく彼女は、「困ったなあ。でもこの人たちは私の父か母の友だちなんだろうなあ」というような認識から、楽しいわけでもうれしいわけでもないのに、社会的に笑ったのではないだろうか。もしそのように子どもが状況を把握して、自らが感じている気持ちとは異なる表情を他者にみせていたとしたら、それはかなり高い知性の表れといえるのではないだろうか。私たちはいつごろから、そのように笑顔を他者に対するシグナルとして「使う」ようになるのか。笑顔の場面を集めるフィールドワークに出てみよう。

人間の子どもの笑顔を見てみる

私は、学部時代は成人の視覚的な短期記憶にかんする実験的な研究をしていた(川上・伊東, 2020)。大学院に入り、子どもが、自分自身が楽しいと感じる場面以外でも笑顔を見せるのはいつごろからかを探りたいと思った。しかし私には、普段の子どものようすについてすら、ほとんど理解がなかった。そのため、まずは保育園に通わせていただいて、子どものようすを観察するという訓練期間が必要であった。週に2回ほど朝から夕方まで、日によって0歳児クラスから5歳児クラスまで、入らせていただいた。毎回、子どもごとにその日にあったエピソードや私の感想をメモにまとめた。その作業は日をまたぐこともあり、あまりに大変だったため訪問回数を減らそうかと思ったほどだ。それに半年ほどを費やしていた。

笑顔は基本的にはポジティブな感情と結びつくもので、そのような笑顔は生まれて2、3か月で多くみられるようになってくる。ごまかし笑いや嘲笑のように、ポジティブ感情以外の感情が込められた笑顔では、多くの場合、他者の存在が重要となってくる。0歳台の乳児の場合、ひとりで行動するか、他者とのかわりがあったとしても、それはおとなや、少し年長の子どものいった対等とはいえない関係性のものが多い。さまざまな場面で笑顔を使うようになるのは、近い年齢の他者との対等なかわりが増えてくる1、2歳児と考え、観察してみた。

今度は保育園の1、2歳児がいるクラスにビデオカメラを持ち込み、保育士による一斉の取り組みがおこなわれていない、彼らがある程度

自由に遊べる時間を撮影させてもらった。1名につき連続30分間程度、一定の距離から子どもを追いつけた (Kawakami & Tokosumi, 2011)。

撮影したビデオで笑顔がみられた場面を見つけ出し、その場面にみられた言動をチェックし、笑顔を一種類に分類した。そのなかで2歳児が1歳児よりも多くみせたのは、「同調笑い」と「行為失敗笑い」であった。同調笑いは、子どもがその周囲にいた他者をみながら笑い、その他者も笑っていた場合の笑顔である。行為失敗笑いは、子どもとその周囲にいた他者が一緒につくっていたものが壊れたり、ものを落としたり、自分または他者が転んだり、自分の失敗を他者に言語報告した場合の笑顔である。

この結果からいえることは2点ある。1つは、子どもたちは2歳くらいになると、他者と笑い合うことが増えるということである。笑顔をつうじて、他者と感情や物事への注意を共有しているのかもしれない(図1参照)。もう1つは、2歳くらいになると、失敗のようなポジティブとはいえない場面でも笑顔を見せるようになるということである。この笑顔が感情の偽りや隠匿を意味しているとまではいえないが、さまざまな状況で笑顔を見せはじめるのはこの時期であるということがわかった。2歳というのは、他者関係が広がりはじめ、言語の使用能力も発達してくる時期である。



図1. 笑い合う4歳児と1歳児

このように私たちは他者と笑い合い、ポジティブな状況に限らずさまざまな場面で笑顔を見せる。それは2歳くらいからはじまるようである。ではこれは人間の特徴なのだろうか。日本人の特徴を知るためには、ほかの文化で過ごすひとと比較する必要がある。人間の特徴を探るためにはほかの動物と比較する必要があり、それは進化的に人間に一番近い動物をみるのが一番である。チンパンジーの笑顔の場面を集めるため、動物園や研究施設で

フィールドワークをおこなった。

チンパンジーの笑顔を試みる

人間以外の動物がどのように行動するのかといったことにかんして、私には知識がほとんどなかった。大学院を修了し、京都大学霊長類研究所(現ヒト行動進化研究センター、以下霊長研とする)で研究員として活動することとなったため、まずは研究所のチンパンジーをひたすら観察することからはじめた。それ以降、私はいくつかの施設でチンパンジーを観察させていただく機会を得たが、毎回苦労するのはチンパンジーの名前を覚えることであった。私が観察させていただいた施設は広い運動場に木々が植えられたり、高いタワーが建てられていたりする場合が多く(飼育環境をその動物の野生環境に近づける環境エンリッチメントという視点から、非常に優れた施設といえる)、みえても身体の一部であるようなこともあった。保育園の子どものように近づくこともできず、名前を教えてくれる保育士のような存在も近くにいないことが多いので、チンパンジーの個体識別だけに数日かかることもあった。

霊長研の13個体、高知県立のいち動物公園にくらす9個体、日本モンキーセンターにくらす3個体のチンパンジーを対象に、1個体につき10分程度のビデオ撮影を繰り返した。そこからどのような場面で笑顔が生じたかを分析すると、単独、または複数の個体間での遊びと、「高い高い」行動(図2参照)においてのみ、笑顔がみられることがわかった。野生ではなく飼育下の、限られた個体数のチンパンジーを対象とした観察で、観察時間にも限りがあるため、いえることには限界がある。とはいえこの観察の範囲内では、チンパンジーはおそらく自分が楽しいと感じているようなポジティブな状況でのみ笑顔を見せるという結果であった。

チンパンジーの遊びは動きが激しい場合が多く、お互いの見つめ合いについては判断できないことが多い。高い高いは比較的穏やかな対面場面であり、そこに笑顔がみられたのは幸運であった。人間の子どものみられた笑い合いがあるのか、探りやすい状況であるためである。分析した32回の高い高いはすべて母子間でおこなわれ、そのうち笑顔がみられたのは6回で、すべて子どもによるものであった。つまりチンパンジーの母親は、子どもの笑顔を目の前でみても笑わなかったのである。



図2. チンパンジーの「高い高い」

わかってきたこと

多くの笑顔を保育園、動物園といったフィールドで集めてわかってきたのは、さまざまな状況で笑顔を見せたり、笑い合ったりするのは2歳くらいからはじまり、それは人間だけの特徴かもしれないということである。人間とチンパンジー、ほかに少しだけオランウータンやニホンザルをみてきて感じたのは、人間ほど笑う動物もいないということだ。

私たちはなぜ笑うのかという、ポジティブ感情の表れである場合もあるが、他者に対するシグナルとしてそれを使っている場合もある。もちろん攻撃的な笑顔の場合もあるが、どちらかというと状況をポジティブなほうに向けようという狙いがある場合が多いと思われる。ひとを安心させる、友好の意図を示す、協力を引き出すといった使われ方である。たとえばチンパンジーも、グルーミングをすることで友好関係を築いたりする。グルーミングの場合、両手を使うことが多く、基本的に一対一でしかない。それに比べて笑顔は、唇の端を少し上げるだけで多くのひとにそれを見せることができ、お手軽である。もしかしたら人間特有の笑顔の使い方が、私たちの社会を大きくするのに影響したのかもしれない。「どんなときに笑ったか」を考えてみるだけでも、たくさんの発見や不思議に出会えるのではないだろうか。

引用文献

- 川上文人・伊東裕司(2020). チェンブリンドネスにおける表象の状態 哲学, 144, 67-94.
Kawakami, F., & Tokosumi, A.(2011). Life in affective reality: Identification and classification of smiling in early childhood. *Proceedings of the 14th International Conference on Human-Computer Interaction, USA, Lecture Notes in Computer Science* Volume 6766, 460-469.
Kawakami, F., Tomonaga, M., & Suzuki, J.(2017). The first smile: spontaneous smiles in newborn Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *Primates*, 58, 93-101.



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 准教授

山内 星子 (YAMAUCHI Hoshiko)

名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程修了、博士（心理学）。臨床心理士、公認心理師。大学院を修了後、大学の学生相談室カウンセラーとして勤務。その他、精神科病院、精神科クリニック、大学病院の神経内科等での臨床経験がある。主な研究テーマは、青年期の人々の精神的健康を促進する要因は何か、ということである。また、臨床的支援の経験から、発達障害傾向のある学生の能力発揮促進的支援にも関心を持っている。



臨床・教育実践のための研究を目指して ——IRデータをベースとした検討の試み——

「学生の悩みはいつどのように発生するか」という問いについてのこれまでの知見

私の前職は大学の学生相談室カウンセラーであるが、相談室には日々多くの相談が寄せられる。入職した当初は、悩みは人それぞれ、と感じていたが、数年すると学年、学部学科、理系・文系など、その学生が属するカテゴリー対応した“よくある相談”というものがあることに気が付く。あるときには、性別、学年、学部、相談内容がほぼ一致した相談者（もちろん細かく聞いていけば違う部分はたくさんある）が同時期に来談し、話を聞きながら、3人兄弟の末っ子なのはこっちの学生だったわけ……？ などと混乱してしまうほどである。

こうした学生の属するカテゴリーに対応した共通の心理的課題について鶴田（1999）は、学生相談室に寄せられた悩みを時期別に整理したデータをもとに「学生生活ライフサイクル」という概念を提唱した。すなわち、大学生の4年間を入学期、中間期、卒業期の3つに分け、それぞれの時期の特徴と、それに対応した特有の悩みや心理的課題が存在することを示したのである。

この概念は学生相談カウンセラーにとって非常に有用で、学生が初めて来談したときに属性を聞くことで、学生の背景に関する一定のイメージを持つことが可能になる。もちろんカウンセリングの中でこれを修正したり補っ

たりする作業をしていくが、イメージの土台があることが、カウンセラーの支えになる。

コロナ禍で始まった、心理臨床（学生支援）のための研究

先述のような知見を頼りに日々臨床に取り組んでいたさなか、COVID-19が流行し、大学は大きな混乱に陥った。平時でもシビアな状態に陥る学生がいるのに、この状況の中で彼らはどのように過ごしているのだろうか大変心配になる。何とか学生の状況を把握したいという大学執行部の先生方の意向を受け、全学生を対象にしたWebアンケート調査を半年に1度行うことになった。なにせ1万5千人以上の学生を対象とした縦断的調査であることから、データの収集、整理、分析の道のりは極めて険しい。また、研究のためだけのデータ収集とは異なり、ハイリスクな学生を取りこぼさないよう1人でも多くの学生の回答を得ることが重要である。〇名データが集まったからそこで調査打ち切りとはいかず、未回答の学生に連絡を繰り返しながら締切を延ばし、都度都度統計的な処理をして学内で報告し続けた。

得られたデータは、2つのアプローチで使われた。1つ目に、ハイリスクな学生をスクリーニングし支援につなげるという個別アプローチである。最初に設定した基準では数百名が要支援群に分類され、カウンセラーは手分けしてメールや電話での個別連絡を行い支

援につなげていった。同時に、応答率、極めて調子の悪い学生の割合などを順次データ化し、それをその次の支援のための基礎データとして蓄積していった。

2つ目に、完全に匿名化した上で大規模データとして統計的処理を行うという量的アプローチである。学年、性別、専攻分野などの属性、居住形態、COVID-19によって生じた物理的影響（アルバイト解雇、友人と会う機会の減少など）の環境的な要素などがどの程度学生のメンタルヘルスに効果を持っているのかを検討する。結果として、COVID-19流行下においても、学部生／院生の別、専攻分野等の属性によってメンタルヘルスのありようが異なっていることが徐々に明らかになった（例えば、山内他、2020；山内他、2022）。

この2つのアプローチは全く個別に行われていたのではなく、電話やメールによる支援で得られた情報から、重点的に統計的分析を行うべき部分を検討したり、特に不調と思われる属性を持つ学生の背景情報を個別ケースの語りから探るなど、2つのアプローチは常に両輪のように動いていった。

そうして日々を過ごすうち、COVID-19が流行し始めた当初は手段がなかった学生相談も、徐々にオンラインでのカウンセリングができるようになり、元通りとまでは言わないまでも多くの学生の相談対応が可能になった。しかし、大学はオンライン授業を続けていたことから調査は継続され、昼間はオンラインや電

話でカウンセリング、夜はデータの整理と忙しい日々が続いた。最初は、昼間にやっていることと夜にやっていることのつながりがうまく感じられず頭が整理されない辛さが大きかったが、ある程度データがまとまってくると、目の前の相談者の状況が、量的なデータで示されたことと合っているようだからこのままフォローアップで良いはずとか、この人は平均的な学生よりも落ち込みが激しいようだけど、その背景にどんなことがあるのか、今度の調査ではその点についても調べてみる必要がある、などと臨床とデータとを照らし合わせて考えることができる部分も出てきた。

これらの調査はCOVID-19流行という非常事態下で行われたものであるため、一般化可能性がどこまであるのかについては今後取得されるデータとの比較を待つほかないが、こうした経緯で、自分自身で行った研究（量的データの統計的分析）が臨床で役に立つ体験に恵まれたことは貴重な経験になった。いつどこで出来上がったのかは定かでないが、私の中の臨床と研究の間には壁があり、研究はあくまでもやらねばならぬもので、それを臨床に還元するのははるか遠い道のりと感じていたからである。現状、（私の認識では）臨床場面で生まれる研究は1例～少数の事例を素材にしたものが多く、量的なデータから得られた知見との相互作用の機会が少ないように感じられることはとても惜しいように思われる。

今度は、教育実践と研究を結びたい

COVID-19の収束が見えてきた2022年4月、私は中部大学に異動してきた。相談室で学生を支援することにやりがいを感じていたが、より広く多くの学生と勉強や研究と一緒にやってみたいと考えていて、その希望が叶って本当に嬉しく思っている。初めの1年間は授業の準備やイベントなどに奔走しあつという間に過ぎてしまったが、成績不振や休学希望、退学希望の学生に接するうちに、この学生たちの不調の背景や、不適応を発生させる要因、リスクが高まる時期などについてのデータがあれば、日々の教育の助けになるのに、と学生相談室にいたときに考えていたことを再び

考え始めた。

ちょうどそのころ、IRデータや、教育改善・向上のために行われているアンケートデータをよりよく活用することの重要性が強調されはじめた。私は前職でのバタバタの仕事の中で、データというのは数字の羅列のままで置いてあってもほとんど意味をなさないが様々に工夫して整理すれば多くの人の役に立つということを感じ込まれたので、さっそく、学科の先生方と共同でデータの分析を始めることにした。

教育現場にいるからこそそのリサーチクエストを

大学に蓄積されていたデータを分析する中で、いくつかのことが明らかになってきた。詳細には別の機会に報告できればと考えているが、例えば、中間期にあたる2、3年次は停滞（学業不振、出席状況悪化など）が生じやすい難関な時期であること、入学前までの学力は中間期の停滞にあまり関連が見いだされず、むしろ大学入学後の適応状況重要であると考えられることなどである。

これらの知見は、知っていればもちろん学生対応時の基礎的資料となるが、学生の心理的特徴や状態に関するデータは含まれず、例えば休学の前に気分の落ち込みが先行するののか、勤勉な性格、基礎学力、友人のサポートなどの要因のうち、どれが最も大学でのパフォーマンスとより強い関連を示すのかなどは明らかになっていない。したがって、現時点では、「休学する学生を減らしたい」、「成績不振の学生への対応の仕方を考えたい」といった教育実践の中で出てくるニーズに応えるデータが得られたとは言えない。

そこで我々は、学生にIRデータ活用について丁寧に説明し、同意を得られた学生にのみ独自の心理尺度による調査を実施し、データを紐づけて分析を継続することにした（この計画は中部大学研究倫理審査委員会の審査を受けて承認された。承認番号20230093）。

独自の調査に含まれるのは、性格などの特性、自尊感情、うつ傾向、学生を取り巻く環境（居住形態、通学時間など）、大学の志望度などである。いずれも、日々学生と接する教員

数名で検討を重ね、学生の停滞や不調に関連しており、教育的実践に活かすことができると考えた変数である。今後数年間にわたってデータの収集を行い、学生の入学時から中間期を経て卒業間際まで、どの時点で、どのような要因が学生の適応に効果を持つのかを検証していきたいと考えている。

今後に向けて

近年少子化が加速し、大学に入学する学生数の減少が懸念されている。このような中で、学生の性質や考えも変化していくであろう。大学にとっては、いかに学生募集を行うか、魅力ある大学にするためにも在学生によりよく学んでもらうこと、学生の不調を予防すること、卒後社会で活躍できる人物になってもらうことなど、検討していかなければならない問題が山積している。

こうした問題に対応していくにあたり、状況や目的に合わせて収集したデータを正しく利用していくことが非常に重要であると思われる。研究はまだ始まったばかりであるが、まずは目の前の学生に還元できる知見の獲得を目指し、努力していきたいと考えている。

本研究は、2024年度中部大学特別研究費（領域CP）に採択していただきました。この場をお借りして、支援してくださる大学、共同で分析にあたってくださっている先生方、ご協力いただいております学部、学科の先生方、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 鶴田和美（2001）. 学生生活ライフサイクルとは
鶴田和美（編） 学生のための心理相談——大学
カウンセラーからのメッセージ——（pp. 2-11）
培風館
- 山内星子・松本真理子・織田万美子・松本寿弥・杉岡
正典・鈴木健一（2020）. 大学における新型コロナ
ウイルス感染症流行下の学生支援実践と今後の展
開 学校心理学研究, 20(1), 47-54.
- 山内星子・杉岡正典・鈴木健一・松本寿弥・織田万美子・
松本真理子（2022）. コロナウイルス感染症流行
時に入学した学生の心理的特徴：文系・理系・医療
系別の検討 学生相談研究, 42(3), 222-229.



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 教授

三浦 陽一 (MIURA Youichi)

東京大学文学部国史学科卒業、一橋大学大学院博士課程修了。米国ウィスコンシン大学歴史学部大学院修士課程修了。専門は日本現代史。主な著書に『吉田茂とサンフランシスコ講和 上・下』（大月書店）、主な訳書にジョン・W. ダワー『敗北を抱きしめて 上・下』（岩波書店）、同『戦争の文化 上・下』（岩波書店）など。



天皇の戦争責任について —新渡戸稲造（1862-1933）と満洲事変—

裕仁天皇に戦争責任はあるか。あるとしたら、あの戦争の何についてか。

これは現代史のテーマのひとつだが、歴史の専門家がこれを正面から論じるようになったのは案外と新しく、私が大学に入学してしばらくたって、井上清『天皇の戦争責任』（1975年、現代評論社）が出たところからである。戦後もだいぶ年月がたっていた。

私はタイトルにひかれて読み、天皇とは一種の職業政治家であって、資料をつぶさに検討すると、裕仁天皇の発想は、日本帝国の戦争を主導した陸軍の統制派と変わらないという指摘が新鮮だった。こういう率直な発言をする井上氏の勇氣に感動した。私が歴史家になりたいと思ったきっかけのひとつは、この本である。

その後、昭和の戦争を勉強するにつれて、私は天皇責任論に不満を感じるようになった。新しい資料が公開され、本が何冊かでて、事実はいっそう明らかになったのだが、問題がクリアになった感じがあまりしない。個人の戦争責任のような繊細な問題をあつかうには、諸家の分析の多くは枠組みがあいまいで、そのために焦点を外しているのではないか。

ここでは、日本帝国が本格的に中国を侵略した満洲事変（1931年9月～）のとき、裕仁天皇がどういう行動をとったかを考えてみたい。目線は、岩手県生まれの農政学者で、札幌農学校で内村鑑三と同級生、一高校長になるなど教育者であり、英文著作『武士道 Bushido, The Soul of Japan』（1899）でも知られる新渡戸稲造（1863-1933）におく。新渡戸が裕仁天皇に会ったことがある

かどうかは、確認できない。

*

第一次世界大戦の惨禍をくりかえさないために、1920年、国際連盟が結成されると、原加盟国のひとつだった日本を代表して、新渡戸は初代の事務局次長（1920-1926）としてジュネーブに旅立った。次長時代の新渡戸は、いまのユネスコの前身にあたる組織をたちあげている。

1931年9月18日、日本の関東軍が中国東北の瀋陽の郊外で、自分たちが守衛していた南満洲鉄道の線路を爆破して、これを中国兵のしわざと主張し、全軍が出動した（柳条湖事件）。満洲事変の始まりだが、その直後に書いたと思われるエッセイで、新渡戸はこう言っている。

「宣伝が愛国心の是認をうけると、虚偽は白屋堂々とまかり通り、大嘘つきであればあるほど尊敬されることとなる。...こんな戦争で勝利をえても、その勝利は征服する国家の歴史のページに永久に墨をぬるのだ。」（1931年9月19日『英文大阪毎日』編集余録、『新渡戸稲造全集』第20巻）

どの戦争のことかは述べていないが、満洲事変が関東軍の謀略であることを、新渡戸はいちはやく誰かから聞いていたようだ。平和と愛国の両立を信じていた新渡戸は、この頃から体調を崩す。

それから3ヶ月後の1932年1月、天皇は参謀総長を皇居に呼び、関東軍の軍功を高く評価する勅語を読み上げた。重要な史料なので、

全文を紹介しよう。

勅語

さきに満洲において事変の勃発するや、自衛の必要上、関東軍の将兵は果斷神速、寡よく衆を制し、速やかにこれを受討せり。爾来、艱苦を凌ぎ祁寒に堪へ、各地に蜂起せる匪賊を掃蕩し、よく警備の任を完うし、あるいは嫩江・齊々哈爾地方に、あるいは遼西・錦州地方に、冰雪を衝き勇戦力闘、もってその禍根を抜きて皇軍の威武を中外に宣揚せり。朕深くその忠烈を嘉す。汝將兵、ますます堅忍自重、もって東洋平和の基礎を確立し、朕が信倚に對へんことを期せよ。

昭和7年1月8日

天皇がこの勅語を出す前に新渡戸は、

「どんなに勇敢な行いでも、正しくなければ賞めるべきではない。...それは将来の紛糾の種をまいているだけである。」（1931年9月24日『英文大阪毎日』編集余録、『新渡戸稲造全集』第20巻）

と書いている。この言葉は、その後の日本帝国の進路を予言していた。

1932年2月、四国の松山での講演のとき、その直前に始まった上海事変（関東軍将校の謀略で、上海で日本人僧侶が中国人に殺害され、これをきっかけに日本陸海軍と中国政府軍が軍事衝突した事件）について、新渡戸がオフレコで語った内容が新聞に載った。

「上海事件に関する当局〔日本政府・軍部〕の声明はすべて三百代言さんびゃくだいげん〔詭弁〕的というほかはない。...上海事件に対

しては正当防衛とは申しかねる。支那がまず発砲したというのか?」

日本軍の行動に疑問をつけた新渡戸から、友人たちが離れていった。そして在郷軍人会や右翼からテロの脅迫を受けた。新渡戸への脅迫は、日本軍の軍人や右翼が犬養首相らを殺害した五一五事件（1932年）などと同様、日本の進路を左右したテロの一部である。

これよりさき、1924年にアメリカで成立した排日移民法に新渡戸は反発し、もうアメリカには行かないと宣言していた。新渡戸は、こうした自分の愛国感情も利用して、天皇が是認した満洲事変や上海事変を肯定しようと、内心努力したようである。

その後、日米関係がさらに悪化したと感じた新渡戸は、1932年、1933年と渡米する。当時の渡米は、片道二週間かかる船旅である。七十歳近かった新渡戸の健康にどういふ影響があっただろう。目的は日米関係の改善だったが、日本は満洲事変と上海事変で信用を失っていたので、新渡戸の弁明はフーバー大統領をはじめとするアメリカの要人に通用しなかった。アメリカの友人たちは、日本の行動を擁護する新渡戸を批判した。その間、日本は国際連盟を脱退した（1933年3月）。

新渡戸は日本でもアメリカでも孤立した。

1933年8月、帰国してから数ヶ月で、新渡戸はまた太平洋を渡った。カナダで開かれた太平洋会議（環太平洋地域の代表的知識人の会合。その提言は各国政府も注目していた）に出席し、ここでも平和を訴えたが、出血性脾臓炎で倒れ、1933年10月15日、カナダのビクトリアで71歳の生涯を閉じた。

*

失意のうちに倒れた新渡戸とは対照的に、満洲事変の実行者たちは、陸軍の中樞を占めていった。柳条湖事件のあと、関東軍の全軍出動を命じた関東軍司令官・本庄繁中将は、その後、侍従武官長（天皇を身近で補佐するベテランの軍人）、大將、男爵、金鵄勲章（武功拔群の軍人にさずけた勲章）、枢密顧問官と、軍人として最高の名誉を受けた。本庄の次の関東軍司令官で、日本の「特命全權大使」として満洲国を牛耳った武藤信義大將も元帥（大將よりも権威ある称号）、男爵となり、金鵄勲章をもらっている。佐官クラス（40代）では、満洲事変の首謀者・石原莞爾中佐は陸

軍参謀本部の作戦課長という花形ポストにいた。石原とともに事変を画策した板垣征四郎大佐は、陸軍参謀本部長、陸軍大臣へと、石原以上の出世をとげた。

満洲事変は、外国を侵略した点で、当時日本が批准していた国際法（国際連盟規約、不戦条約、九力国条約）に違反し、天皇の事前の許可なく海外で軍事行動を起こした点で、国内法（帝国憲法第11条「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」、陸軍刑法第35条・38条擅権せんけんの罪、刑法第93条私戦予備罪）に抵触する違法性の高い行為であった。裕仁天皇は、自分の統帥権を無視して違法行為にでた関東軍を激賞し、首謀者たちの栄転を認可した。柳条湖事件から半年後、1932年3月に日本が「満洲国」をつくったころ、裕仁天皇は、「満洲に付ては此これまで都合よく進み来たり。誠に幸いなり」と、参謀総長に語ったと記録されている（『牧野伸顕日記』）。

*

日本の国際連盟脱退（1933年3月）は、ドイツの脱退（1933年10月）よりも半年ほど早かった。国際秩序を最初に破壊したのは日本帝国であった。

天皇は日本帝国の最大の後見人であった。満洲獲得は、天皇が肯定したこともあって、軍部、政党、新聞、民衆、議会、つまり日本帝国の総意となった。しかし、満洲獲得の代償は日本の孤立であり、孤立から脱出しようとして、日本は独伊と手を結び、盧溝橋事件（1937年7月）をきっかけに日中全面戦争に踏み切った。そして1941年12月7日、日本が真珠湾を攻撃しアメリカに宣戦布告したことに呼応して、数日後の12月11日、ドイツ・イタリアもアメリカに宣戦布告した。アメリカを戦争に引き込むことでアジアとヨーロッパの戦争を一体化させ、世界戦争にしたのも、日本帝国だったのである。

「朕^{よみ}ちん 深くその忠烈を嘉す」— あの戦争は、満洲事変を起こした関東軍を激賞し、日本帝国の侵略を「自衛」だとした裕仁天皇の勅語が招いた結果であるともいえる。しかし、当時30歳だった若い天皇に、私たちはどこまでどういう責任を問うべきなのか。

天皇の戦争責任というとき、最初にとりあげるべきは、この問題である。

引用文献

井上清『天皇の戦争責任』初版1975年、現代評論社。
現在、岩波現代文庫、2004年
『新渡戸稲造全集』第20巻、教文館、2001年
『関東軍へ勅語』（1931年1月8日）、山田朗編『外交資料近代日本の膨張と侵略』新日本出版社、1997年所収
『牧野伸顕日記』中央公論新社、1990年





Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 教授

森田 朋子 (Tomoko Morita)

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科（博士後期課程）単位取得退学。2003年、博士（人文科学）。専門分野は明治維新期の外交、領事裁判権問題。日本に住む外国人のトラブル、女性問題、結婚、また、日本から海外へ移民として出かけた人々のトラブルなどについて研究をおこなっている。



濃尾地震と名古屋養老院 ～キリスト教徒の役割：佐伯好郎と岩崎義憲

濃尾地震とキリスト教

1891年（明治24）10月28日に発生した濃尾地震は、日本史上最大の直下型地震といわれ、岐阜県本巣郡西根尾村（現・本巣市）を震源としマグニチュード8.0と考えられている。地震の揺れは北海道や南西諸島を除いて、全国で感じられたという。死者七千人、全壊の建物十萬軒を超える被害を出した。マスコミによって全国に被害状況が共有され、募金活動がおこなわれ、各地から被災地へ医療関係者が入りボランティア医療活動がおこなわれた。名古屋城に駐屯していた第三師団は、負傷者の救助や炊き出しをおこなった。

これらの救済慈善活動にキリスト教徒が果たした役割は大きく、岐阜盲学校や滝乃川学園などこの時の活動にルーツをもつものも多い。

とくに震災孤児が娼妓として人身売買されることを阻止することに力が入れられ、孤児の引き取りは愛知・岐阜だけでなく東京・岡山など各地へ広がった。1887年に岡山孤児院を始めた石井十次は、11月4日には岐阜・大垣で事務所を設置して孤児の捜索にあたった。12月23日には名古屋市白壁町の土地建物が購入され、名古屋震災孤児院が開設された。

カナダ聖公会宣教師ジョン・クーパー・ロビンソンと名古屋養老院

当時の名古屋には、内地開放前ではあるが外国人宣教師たちが居住していて、震災後は党派を超えて名古屋外国震災救済会を組織し

た。大量の義援金や救援物資が国内外の外国人から送られたが、それらを現地で受け入れ、そして日本人キリスト教徒組織などを通じて、分配をおこなった。

この組織のNo. 2、事務局長をしていたのが、カナダ聖公会宣教師のジョン・クーパー・ロビンソン（Robinson, John Cooper, 1859–1926）である。ロビンソンには1912年に日本での活動をまとめた著書がある。また、写真家でもあり、近年、カナダのプリティッシュコロンビア大学に七百枚のガラス乾板スライドを含む四千点以上の写真コレクションが寄贈された。その中には濃尾地震に関する写真も十数点存在している。彼の子孫でもある同大学のベンジャミン・ブライス氏によってロビンソン研究は進展をみせている。

さて、ロビンソンは震災後も各地を巡回していたが、社会的弱者である子供と老人のうち、子供への対策は取られつつあるが、老人に対して何も行われていないことを懸念した。東京在住の英国聖公会主教エドワード・ピカステスと相談して、12月9日の居留地新聞『Japan Weekly Mail』に施設の設置のための寄付を呼び掛けた。

1992年1月1日には、家を借り、寮母を雇って名古屋養老院の運営を始めた。岡本多喜子氏によると「養老院」と名付けられた嚆矢であるという。その後も入居者が増えたため、春に名古屋市横代官町一五番地（現、名古屋市代官町）の約300坪の敷地を購入して建物を新築し、翌年1月に入居したという。次の写真は1895年以前に敷地の南西角から撮られたものである。左の建物が建坪約72坪の寮、

中央が礼拝堂、右はこの時点では無料宿泊所である。庭では食用の野菜が作られていたというので、手前には畑が写っているのだろう。



佐伯好郎と岩崎義憲

養老院の最初の入居者は、ロビンソンが12月15日に帰宅途中に出会った84歳の女性である。5歳と7歳の少女を連れて、助けを懇願されたため、連れ帰ってきた。母親は既に病気で亡くなった夫の借金のため遊郭で働いていて、結局、少女は孤児院へ送ったが、老女を養うために計画を前倒しにして養老院を



最初の入居者。当時 89 歳

設置することにした。

なお、養老院の設置人の一人に、後に景況研究者として有名になる佐伯好郎（1871-1965）がいる。佐伯は築地聖パウロ教会青年信徒による罹災者救援隊の隊長として、被災地名古屋へ駆けつけた。佐伯の『年譜』には「此の時偶ま出会った罹災老婆の話に同情し、大須遊郭に娼妓となって居る其の嫁女救済のために奔走する。不幸成功は見なかったが、これが我が国に於ける娼妓解放運動の先倡となった。この時彼の主張に共鳴した名古屋地裁の検事が後に廃娼運動に挺身して名弁護士の名を謳はれた岩崎義憲（後の岳父）である」（『年譜』、p. 6）とある。

佐伯はその後、カリフォルニア、トロントへ留学し、帰国後、名古屋に戻り岩崎の長女と結婚した。トロントではカナダ帰国中のロビンソンと再会していたことも考えられるだろう。佐伯と岩崎は1895年に名古屋養老院の管財人を務めていて、法人化前の教会財産の保護のために活躍したと考えられる。

幼老院への改名そして閉院へ

1893年末に名古屋の震災孤児院は資金不足のため、岡山孤児院への吸収合併という形で閉鎖された。おそらくその関係だと思われるが、1894年から9名の少年を名古屋養老院で引き受けることになった。Yoro-Inという音が同じであり、実態を表すことができるとして、養老院を幼老院と呼ぶようになった。1895年時は障害者を含む15名の成人と13名の少年が在籍していた。

震災孤児院のシステムに倣い、少年たちは午前中は普通の初等教育を受け、午後は仕事あるいは職業訓練のような形で将来設計を立てさせるようにした。老人たちだけの時も、生活のためというよりも生きがいのために様々な仕事を探してきて、入居者にできる仕事をさせていた。綿の紡績と機織り、衣服の制作や補修、わらそうり・簀・扇子の製作、帽子のためのわら編み、磁器絵付けのための研磨絵の具、園芸などがおこなわれたようである。

その後、幼老院は新規の老人入居者をやめて、青年院へと移行しようとした。彼らの中からキリスト教に入信し、聖職者への道へ入るのができることを期待していたと考えられる。しかし、年頃の少年たちが集団で生活するには様々な問題も起こったようである。キリスト教

養老院として、職員は無償奉仕、居住者にも無償で仕事に従事することを求めたが、さまざまなトラブルが起きたようである。

ロビンソンはカナダに帰国したり、必ずしも名古屋に配属されなかったこともあり、最終的には1906年に閉院し、その後はキリスト教青年の下宿となった。

名古屋養老院の運営

養老院では年報を毎年400部印刷し、内外の寄付者へ送付していた。本稿のもとになっているのは、イギリス外交文書の中から見つかった2冊の年報である。数年分ではあるが、養老院の実態、財政状況が確認できる。

1895年の収入は約660円、支出は約490円だったが、居住者は多少の仕事をおこなっていたが、収入のほとんど約510円は寄付によるものであった。寄付の内訳は、国内からが約166円（14件）、海外からが約346円（32件）であった。国内の寄付は、先述のピカステスをはじめ、聖公会などのキリスト教宣教師または神戸などキリスト教会から贈られたものであった。もちろんロビンソンからの寄付も含まれている。海外からの寄付は、多くはカナダからのものである。

寄付金は、最初の年に約1200円ほど集まり、約800円ほどが土地の取得や建物建設に使われた。災害後であり、新規事業立ち上げに賛同した人が多かったからこそ、これほどの寄付金が集まったのであろう。しかし、継続的に寄付金を集めていくことは簡単なことではない。

ロビンソンは養老院が運営されていた15年の間に2度ほど本国カナダへ帰国している。一度目は1894年から95年にかけてである。1895年のカナダからの寄付金収入は、ロビンソンのカナダでの活動が大きかったと考えられる。ロビンソンはカナダ各地の教会で精力的に講演会を開いた。ロビンソンは写真家であることも述べたが、講演では「幻燈」（ランプとレンズを使いガラスの画像を幕に投影するもの）が使われ、未知の国日本を存分に紹介できたと考えられる。ロビンソンは生涯を日本伝道に費やすが、移民問題で日本人排斥が起こるカナダでの講演会はその後も続けられた。カナダでの日本イメージは決して一面的なものではなかっただろう。

カナダからの寄付は、決して大口寄付ばかりではなく、教会・日曜学校や一少女の寄付

など様々である。たとえおやつのための1ドルでも日本では2円以上になった。

なお、幻燈は当時の日本でも寄付集めの手段として用いられ、震災後に長崎で開かれた「慈善音楽幻燈会」約は560円の収益を被災地に送り、やや時期は遅れるが岡山の音楽幻燈隊なども有名である。

養老院のその後

1892年にロビンソンのもとで始動した名古屋養老院は、1906年には閉院された。しかし、養老院の試みは、一般的に養老院の嚆矢とされる1895年設立の聖ヒルダ養老院へとうつがれる。聖ヒルダ養老院は東京の英国聖公会が女性のために設立したもので、形を変えながら現在も存続している。

次に開設された老人施設は、実態はほとんど不明であるが、1898年設立の名古屋市中区松江町の帝国養老教会であるという。名古屋には1901年に仏教系として最初の施設である空也養老院が名古屋市中区養老町に開設されている。これは1906年に名古屋養老院と改称され、少なくとも1935年まで活動している。

ロビンソンの養老院が開設されたとき、仏教徒との間にトラブルもあったが、キリスト教の慈善活動という行動は、仏教徒にも大いに刺激になったと考えられる。

引用文献

- 森田朋子（2024）「濃尾地震と名古屋養老院・幼老院—カナダ聖公会ロビンソンの活動について—」『年報近現代史研究』16号。
- 岡本多喜子（2011）「明治期に設立されたキリスト教主義養老院の研究」『明治学院大学社会学部付属研究所研究年報』41号。
- 林上（2010）「濃尾地震再考—過去の震災に学び未知の地震に備える」、『アリーナ』9号。
- 法本義弘編（1970）『佐伯好郎先生年譜』佐伯好郎遺稿並伝 佐伯好郎伝記刊行会。
- 大江真道（1988）『名古屋幼老院について』、『現代社会福祉の源流—日本聖公会社会事業史』聖公会出版。
- Bryce, Benjamin (2022), Seeing Japan: A Canadian Missionary's Photography and Transpacific Audiences, 1888-1925, "Pacific Historical Review" 91 (2).
- Ruxton, Ian, (ed.) (2014), "The Correspondence of Sir Ernest Satow, British Minister in Japan, 1895-1900", Vol. 3, Lulu.com.
- Robinson, J.Cooper, (1912) "The island empire of the East: being a short history of Japan and missionary work therein with special reference to the mission of the M.S.C.C", Toronto: Prayer and Study Union of the Missionary Society of the Church of England in Canada.



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 准教授

佐々井 真知 (SASAI Machi)

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻博士後期課程修了。博士（人文科学）。専門分野は中世イングランドの都市社会史。14・15世紀のロンドンに関心があり、とくに商工業者の生活について、同職組合の役割や人々とのつながりに注目して論じてきた。現在は「外国人」というテーマからロンドンを考えることを試みている。



中世イングランド史に関するデータベースとその利用



はじめに

近年、英米で相次いで中世ヨーロッパの個人に焦点を当てたオンラインデータベースが公開されている。そのうち中世イングランドに関する3つ“England's Immigrants 1330-1550, Resident Aliens in the Late Middle Ages”, “Medieval Londoners”, “The People of 1381”を取り上げ、紹介と若干の考察を試みたい。いずれのデータベースも、登録不要で無料で利用できる。

中世イングランドの「外国人」に関するデータベース

2012年から2015年に実施されたイギリスのヨーク大学を中心とするプロジェクトの成果として公開されたのが、“England's Immigrants 1330-1550, Resident Aliens in the Late Middle Ages”である。これは、当該時期にイングランドで活動していた“Alien”すなわちイングランド外から来た人びと（便宜上「外国人」と記す）について、出身地、居住地、職業、デニゼーション開封書状（イングランド内で生まれた者と同様の扱いを受ける権利を王が認めた書状）取得の年月日などをまとめたものである。現時点で65,000名近くの「外国人」の情報がある。男性が57,900名と圧倒的多数を占めるが、女性も6,331名が掲載されている（551名については不明）。これらのひとりひとりにつ

いて、課税記録や裁判関連文書、各種の公文書、同職組合が作成した文書、遺言書など、多様な史料からの情報がまとめられている。先行研究がある場合は、その文献名も挙げられている。さらに、「外国人」の出身地、職業分布、イングランドにおける居住地などの統計が地図、グラフ、表という様々な形で可視化されている。表示する項目を自由に選択して地図、グラフ、表を作成することもできる。

このデータベースの画期的な点は、言うまでもなく、個々の「外国人」について複数の史料を横断的に用いたデータが得られる点、当該時期にイングランドに居住していた「外国人」の全体像をつかむことができる点である。このデータベース公開後、データベース作成プロジェクトの関係者をはじめとする複数の研究者が「外国人」の分布や「外国人」とホスト社会との関係などについて論じている（Ormrod, Lambert and Mackman, 2019など）。

中世ロンドンの人びとに関するデータベース

“Medieval Londoners”は、アメリカのフォーダム大学が中心となって作成しているデータベースで、1100年ごろから1520年までのロンドン（ロンドン市居住者）に関する情報を、個人を単位として集めたものである。2020年の公開後も随時データが追加されており、2024年9月6日時点で19,981

名のロンドナーが登場している。先述の“England's Immigrants”と同様、個人に関する複数の史資料（刊行された一次史料あるいは先行研究）が一度に表示されるため、特定の個人について調査する際に有益である。

また、データベース作成プロジェクトのリーダーであるコワレスキーが強調するように、このデータベースは大学生の教育を目的の一つとして作成されており、中世ロンドン史研究の基本情報の解説が充実している（Kowaleski, 2021）。ロンドン史に関する各種の史料の概要が刊行史料や先行研究の書誌情報とあわせて詳細に説明されていることに加え、地図や印章などについても史料の概要の説明と先行研究の紹介がある（ただし、一次史料の所蔵先や史料番号の記載はない）。また、学生を指導する中で「人文系の学生に対するデジタル・トレーニングの重要性を認識した」というコワレスキーは、データベース作成の作業そのものの一刊行史料や先行研究に登場するロンドナーのデータを入力し、データベースに追加するという作業—を学生に体験させる場としてもこのデータベースを活用しているという。現在もデータ収集を広く呼び掛けていることから、私たちも授業で活用できるかもしれない。

農民反乱に関与した人びとに関するデータベース

“The People of 1381”は、1381年にイングランドで起こった農民反乱に関与した人

びとの情報をまとめたデータベースである。イギリスのレディング大学が中心となって作成し、2019年に公開された。対象は農民反乱に「関与した人びと」であり、反乱を起こしたことで訴えられた人びとに加え、被害を受けた人びと、反乱に関する裁判に関わった法律家などもカバーし、その合計は2万人以上とのことである。中央政府および各地の自治体の史料、裁判関連文書、人頭税課税記録などの複数の史料から、これらの人びとの情報がまとめられている。

特筆すべき点は、関連する史料がSource(史料)、People(人物)、Incident(できごと)の3つに分類されてそれぞれでデータ化されている点である。Sourceのページでは、反乱に関する史料がその所蔵場所(文書館・図書館など)ごとにリストアップされており、史料番号を単位としてその史料の概要と史料の英訳が掲載されている。さらに、その史料に登場する人物の一覧が付されており、そこからそれぞれの人物のページに移動することができる。Peopleのページでは、ひとりひとりにつき、彼／彼女が登場する複数の史料が示され、わかる場合は職業や居住地などの詳細がまとめられている。Incidentのページは、史料番号単位ではなくひとつひとつのできごとを単位としてまとめたものである(たとえば、1つの史料番号を付された裁判関連文書に複数のできごとが列挙されている場合があるため)。いずれのページでも、史料の概要だけでなく、史料すべての英訳と場合によっては原語(ラテン語)が記されている。さらに、史料の写真が添付されていることもある。すなわち、史料によっては、パソコンの前に居ながらにして手書き史料を目にし、それを活字化したものと英訳したものを見ることができるのである。史料からの情報を余すことなく分類し、複数の視点からの検索を可能にしているという点、また、何よりも農民反乱をそれに関与した人びとと一女性や使用人も含む広範な人びと一の視点から捉えなおすことに貢献するという点で、有用性の高いデータベースではないだろうか。

データベースの利用について

紹介した3つのデータベースは、様々な点で活用する価値があるだろう。しかし同時に、特に個人に焦点をあてた研究で利用する際には、留意しておくべき点もある。

第一に、3つのデータベースとも、現存する史料のすべてを網羅しているわけではない、という点である。とくに「外国人」とロンドンについて、データの根拠となる史料は少なくとも現時点では限定されている。実際に、筆者が3名の「外国人」金細工師について論じた際に史料から収集した情報の一部は、いずれのデータベースにも掲載されていない(佐々井、2022)。それゆえこれらのデータベースは役に立たないと言いたいのではない。それぞれのデータベースが取り込んでいる一次史料(刊行史料も含む)や先行研究を理解したうえで使用するという、利用者側の意識の重要性を強調したいのである。しかし反対に、利用者が見いだせなかった情報をデータベースが教えてくれることもあることを考えれば、データベースも史料目録や先行研究と並ぶ一つの情報源として活用可能だと考えればいいのではないだろうか。ただし、データベースで得た情報をその根拠すなわち一次史料にさかのぼって確認するという作業は必要である。

第二に、そもそもデータベースから抜け落ちている個人がいる、ということである。言うまでもないが、中世イングランドや中世ロンドンに関して現存する史料のすべてをくまなく調査し、登場するすべてのロンドン人なり「外国人」なり農民反乱に関与した人びとよりのデータをとり、というのは膨大な時間と手間と費用が掛かり、現状では不可能に近い。つまり、データベースがカバーしきれていないだけで、実際には史料上に登場する個人はデータベースに登録された個人の何倍もいる、ということである。筆者はこれまで個人を取り上げてその生涯から社会を読み解くことを何度か試みてきたが、取り上げたいうちの一人、刃物工のRobert Pykmereのデータは“Medieval Londoners”にはない(佐々井、2015)。それどころか、「刃物工(cutler)」でこのデータベースを検索すると、1100年から1520

年に活動していた刃物工は29名しか登場しない。15世紀だけで58名分の刃物工の遺言書が現存しているにもかかわらず、である。データベース上の情報はあくまで全体の(ほんの)一部であり、データベースの検索で研究を終えてはならない、という点は常に意識しておくべきだろう。

データベースは完成がゴールではなく、利用されて初めて意味を持つ。多くの研究者があらゆる努力の末に作り上げたデータベースを、また別の研究者がその有益性と限界の両方を十分に認識したうえで活用することで、過去の世界のさらなる解明を期待できる。3つのデータベースのほかにも、1369年から1453年までの主にフランスとの戦いに従軍したイングランド軍の兵士に関するデータベース、1093年から1371年までのスコットランドの人びとに関するデータベース、中世パリの女性とその居住地に関するデータベースなど、中世の個人に焦点をあてたデータベースは多くあり、今後も大学や研究所、文書館などを中心に多様なデータベースが作成されていくだろう。データベースを適切に活用することで、中世を生きたひとりひとりの視点から、中世世界の解明に貢献できるのではないだろうか。

参考・引用文献

- (データベースは2024年9月6日最終アクセス)
 England's Immigrants 1330-1550, Resident Aliens in the Late Middle Ages, <https://www.englishimmigrants.com/>
 Medieval Londoners, <https://medievallondoners.ace.fordham.edu/>
 The People of 1381, <https://1381.online/>
 The Soldier in Later Medieval England, <https://www.medievalsoldier.org/>
 People of Medieval Scotland 1093-1371, <https://poms.ac.uk/>
 Mapping the Medieval Woman, <https://mappingthemedievalwoman.com/>
 W. M. Ormrod, B. Lambert and J. Mackman, *Immigrant England, 1300-1550* (Manchester, 2019)
 M. Kowaleski, "A New Digital Prosopography: The Medieval Londoners Database", *Medieval People* 36(2021), p. 311-332
 佐々井真知「刃物工ロバート・バイクメアが生きた15世紀ロンドン社会」、『アリーナ』18(2015年)、p. 362-366
 佐々井真知「15世紀ロンドンの『外国人』金細工師—3名の『外国人』の活動と金細工師ギルド—」、『中部大学人文学部研究論集』48(2022年)、p. 59-85



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 教授

大塚 俊幸 (OTSUKA Toshiyuki)

1987年に筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了後、大阪、名古屋の都市計画・まちづくり系コンサルタント会社に15年ほど勤務。2006年名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程修了。博士（地理学）（名古屋大学）。日本都市学会理事、中部都市学会理事（事務局）、名古屋地理学会会長など。現在、小牧市、稲沢市などの都市計画審議会をはじめ、名古屋圏の自治体において各種委員会等の委員を務める。専門は都市地理学・都市政策論。



都市の持続可能性についての一考察



はじめに

都市は、様々な要素により成り立っている。その中心となるのが、「住む」と「働く」である。自給自足の村落では、住む場所と働く場所は一致していたが、工業が発達していく過程で、住む場所と働く場所が分離していった。工業は、原料産地や消費地との関係で立地場所を選び、労働力も重要な立地要因となっている。また商業は、消費者の集住状態などに左右され、それらの変化に合わせて立地場所を移動させてきた。このように、産業の高次化は都市の立地や形態に変化をもたらしてきた。そして、今日のように人口が減少し、社会や産業構造が大きく変化するなかで、住まい方や働き方は多様化し、それらの関係性も時代とともに変化している。

従来、地方自治法や都市計画法上では、集住がなされ、商業や工業などの経済活動に従事する人々が一定割合を占める地域を、都市（市あるいは都市計画区域）としている。しかし筆者は、都市の捉え方を今後はこれまでの「働く」から「住む」に重きを置いた捉え方に転換すべきではないかと考えている。つまり、「働く場所に住む」のではなく、「住みたい場所で働く」という考え方で今後の都市を捉えることが必要になっていくのではないかと考えている。

以下では、こうした観点から、今日の都市や社会の変化を踏まえたうえで、都市の持続可能性について考えてみたい。

都市・社会を取り巻く環境の変化

日本の総人口が減少するなかで、これまでの

ように大都市への人口集中が継続すれば、地方都市の人口は減少の一途を辿るのは言うまでもない。社会の成熟化に伴い人々の価値観も多様化し、少子高齢化が進むなかで、福祉分野をはじめとする様々な行政ニーズが拡大している。そうした多様なニーズを満たすためには、ある程度の都市規模が必要であり、小規模自治体では、市町村合併により一定の財政規模を確保しなければ自治体経営が立ち行かなくなっている。

国は地方創生を進め、地域格差の是正を図ろうとしているが、東京をはじめとする大都市への集中を抑制しない限り、格差拡大は止まらない。現在の日本の都市システムが、市場原理に基づいて成立しているものである限り、行政が介入しても大きな変化をもたらすことはできず、できたとしても限界がある。これまでも、大都市圏への工場立地を制限するなどして、国土の均衡ある発展を国土政策の柱として施策を展開してきた。しかし、地方が活性化する前に大都市の衰退を招いてしまい、大都市の再活性化施策に再び方向転換を図る破目に陥った。過去を振り返ると、日本の産業立地政策では分散化政策と集中化政策が繰り返して行われてきたのである。

限界集落や消滅可能性自治体という用語が使われている。その町や村に住んでいる人への配慮に欠ける表現とは思いますが、余ほどの危機意識の必要性を訴えることが狙いであろう。人口減少が続く限り、村落や都市として機能しなくなってしまうことは容易に想像できよう。特に村落においては、高齢化率が50%を超え、地域社会において共同生活が維持できなくなる。また地方都市においては、商店街がシャッター街化したり、条件の不利な郊外住宅地で空き

家が増えたりするなど、都市のスポンジ化が進行し、都市の持続可能性が問われている。

多様化する住まい方

コロナ禍を機にリモートワークが普及し、それに伴い在宅勤務やオンライン会議などが急速に拡大した。コロナ禍の経験を経てリモートワークに適した職種と、そうでない職種が明確になった。ソフトウェア開発や、インターネットで世界と繋がっていれば、毎日、都心のオフィスに通勤する必要がない職種が存在することがクローズアップされ、そうした職種では、居住地選択の自由度が増している。

コロナ下における東京都から隣接県への人口の流出超過はその表れである。居住地を2つ持つ、いわゆる二地域居住も増えており、そうした現象に対する研究も行われている（住吉2021）。地方への移住も選択肢の一つであるが、いきなり地方への移住はハードルが高いと考える人も多いだろう。またリモートワークといっても、月に何度かは都心のオフィスに出勤しなければならない。となると、ある程度、大都市圏からの距離というのも重要な条件となる。何れにしても、就業形態の多様化が進んでいるのは確かであり、居住地選択の自由度を拡大させている。量は多くはないが、もともと地方への移住ニーズは存在していた。多様な働き方を可能にする社会の変化がこれを後押ししている。

少子高齢化が進行し、家族の形態にも変化をもたらしている。核家族が一般化した今日、高齢の親との近居ニーズが高まっている。近居とは、かつては「スーパの冷めない距離」と言われていたが、今日の近居は車ですぐに駆け付け

ることのできる距離ということになる。親世代が元気なうちは問題ないが、両親の何れかが亡くなり一人になったときに、近くに住んで日常生活を支援したり、何かあればすぐに駆け付けられるよう、近居を望む声が多い（2023年度地理学野外実習報告）。近居は、高齢の親世帯のためだけでなく、子育て中の子ども世帯にとっても望ましい居住形態である。出張や急用などの際に、孫を預かって面倒をみってくれる親世帯が近くに住んでいることは大変ありがたく、今後も近居という居住形態は、少子高齢社会において重要な住まい方として選択されていくであろう。

変貌する都市のかたち

時代とともに都市は形を変えている。都市は器（基盤）であり、そこで活動する内容（機能）の変化に伴い、そのかたちも変えてきた。日本の都市は、都市化の段階から郊外化を経て、都心回帰にみられるように再都市化の段階に進んでいる。大都市の都心周辺部では、遊休地を活用し、タワーマンションが建設されている。また、郊外においても駅前でマンション建設が進み、さらに都市圏の外縁部では、既成市街地周辺の農地でミニ開発が行われている。このように新たな住宅供給が行われる一方で、中古住宅市場は限定的で、空き家の増加をもたらし、都市のスポンジ化を促進させている。

都市計画における都市の位置づけも変化している。全国どこでも地方都市においてもコンパクトシティ政策が進められており、立地適正化計画と地域公共交通計画による、いわゆる「団子と串」による集約連携型都市構造への転換が図られている。都市経営の効率化という政策の意図は理解できるが、果たしてどこまで実効性があるかは、時間をかけてみていかないとわからない。また、都市における農地の位置づけも変化している。2015年の都市農業振興基本法の制定により、都市農業は良好な都市環境の形成に資するものとして位置づけられた。農作物の生産・供給機能だけでなく、緑地として、防災や都市にゆとりと潤いをもたらすものとして、市街地の農地が再評価されている。

今後の都市のあり方

今後の都市に求められるのは、大都市圏の中心都市や郊外都市、そして自然や個性豊かな地方の中小都市などにおいて、多様な生き方や暮らし方を実現できる都市の選択肢を用

意することである。大都市圏の中心都市において自己実現を可能とする生き方もあれば、郊外都市で都市的サービスを享受しながら快適に暮らす生活もある。また、地方の魅力的な自然や文化に囲まれて、自身の理想とするライフスタイルを実現する生き方もあるだろう。今後は、そうした多様な生き方、暮らし方を通じて、生活満足度を実感できる都市づくりを進めていくことが必要となる。

いわゆる消滅可能性自治体といわれる都市は、今後の人口推移の見込みによって分類されている。しかし、人口が減少し、都市機能の集積が低下したからといって、それだけで持続不可能とはいえない。人口が減少しても、そこで、それぞれにとっての生活満足度を実感できる日常生活を送ることができれば都市は存続する。人口減少が避けられない状況下においては、住みたいと思う人が住み続けられるまち、いつかは戻ってきたいと思えるまち、暮らしてみたいと思えるまちが持続可能な都市といえるのではないだろうか。

高齢になっても長年暮らしたまちを離れたくない、できることならそこにずっと住み続けたいと思う人が多くいるのではないか。なかには歳をとったら、公共交通の便が良く、医療・福祉サービスが整った歩いて暮らせるまちに住み替えたいと考える高齢者もいるだろう。現に、従来、住宅双六のゴールとされていた郊外戸建て住宅地から、都心周辺部のケア付きマンションなどに住み替えている例もみられる。何れにしても、住み続けたいと考える高齢者が安心して住み続けられるまちであることが、持続可能な都市であるためには必要である。

また、若者が大学進学や就職を機に、地方都市から大都市に流出していくことを引き留めることはできない。将来、何かをきっかけにふるさとに戻ろうと思えるまちであることが重要である。それと同時に、生活の糧を得ることのできる機会を提供できるまちであることが必要である。

さらに、住んでみたい、暮らしてみたいと思えるまちであることも重要である。場合によっては、仕事はどこでもできる。自然環境や子育て環境などが魅力的であれば、大都市圏からの移住も期待できるであろう。

持続可能な都市づくり

これからの都市を考える際に重要なことは、「住む」ことであり、「暮らす」ことである。都市は、人々が暮らし、生きていくための条

件を備えたものでなくてはならない。必ずしも経済活性化がすべてではない。経済活性化を最終目的とするといずれ破綻する。全国の多くの都市で観光による地域活性化を目指し、その結果、地域の収容力を超え、オーバーツーリズムの問題を引き起こしている状況をみればわかる。市場原理で成り立っている大都市は別として、地方の中小都市では、市場原理で都市を考えることはできないし、これまでの画一的な都市計画では対処できない。集積による経済的メリットを享受する都市と、必ずしも集積の経済に依存せず、市街地密度を低下させてゆとり空間を創出していく都市とを分けて考える必要がある。都市のスポンジ化が問題となっているが、多孔質のスポンジは吸収力がある。店舗や住宅で孔を埋めることができなくても、工夫次第でそのまちや都市の質を高めるための魅力を生み出すことも可能である。各地で観光まちづくりが行われているが、観光に何を期待するのか。経済活性化もあるが、目指すは豊かな暮らしではないだろうか。その暮らしのために都市のスポンジ化をどう活かしていくかが問われている。

まちづくりに終わりはない。外部資本により大規模開発を進めていけばいずれ破綻する。まちに関わる人々が地道に取り組んでいくこそが、持続可能なまちづくりにつながる。そのためには、まず自分たちにとって豊かな生活とは何か、住民たちが納得できる共通理解を得ることが重要である。何を豊かと感じるか、それは人によって異なる。異なる価値観をもつ人々が共感できる「想い」を見い出ることがまちづくりの原動力となる。目指す方向が違う者同士が集まってもうまくいかない。他都市での取り組みをまねるだけでは、一過性の効果しか得られない。もちろん連携・協力は重要であるが、その先にあるまちの姿を共有できているかが、何よりも重要である。それができれば、都市やまちは持続するのではないだろうか。持続可能な都市をつくるためには、従来の都市全体の効率性から個人の生活に重点を置き、精神的豊かさを軸とした都市づくりを進めていくことが必要である

引用文献

- 住吉康大 2021. 日本における「二地域居住」の実態と地域振興との関係性—千葉県南房総市および周辺地域を事例に—。地理学評論94-5: 348-363。
2023年度地理学野外実習報告 2024「桃花台の住みよさに関するアンケート調査報告書—桃花台の魅力再発見—」中部大学歴史地理学科。



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 准教授

安本 晋也 (YASUMOTO Shinya)

英国イーストアングリア大学環境学研究科 Ph.D. 課程修了。Ph.D. (環境学)。専門は GIS (地理情報システム) を用いた人文地理学・環境学の研究。近年では GIS を用いた脱炭素社会実現に向けての関連研究や、環境の健康影響の研究を行っている。



近隣環境による健康影響を分析する



1. 近隣環境の健康影響

居住地の近隣環境が人々の健康に重要な影響を与えることは、これまでの研究蓄積から明らかになっている。Laaidi et al.(2012)は、2003年に熱波が起きたパリを対象に、その暑熱環境を人工衛星からのリモートセンシングで捉えた地表面温度の分布データを用いて把握した。そして表面温度で表される暑熱暴露量が、居住者の死亡との間に統計的な関連性があったことを見出した⁽¹⁾。またVos et al.(2022)は、近隣に緑地が多いと居住者の心理的ストレスを減少させる効果があることを示した⁽²⁾。

日本においても注目されている、スーパーマーケット等の生鮮食料品店が近隣にない状況を指すフードデザート(食の砂漠)問題も、近隣環境の健康影響に関する問題の1つとして捉えることができる。日本ではフードデザート問題が起きている地域では居住者の食糧事情の悪化が懸念されており⁽³⁾、米国やオーストラリアでは生鮮食料品店が少なくなった地域にファーストフード店が集積し、近隣の居住者に対して肥満などの問題を引き起こしていると指摘されている⁽⁴⁾。

2. 格差の観点からみる近隣環境の分析

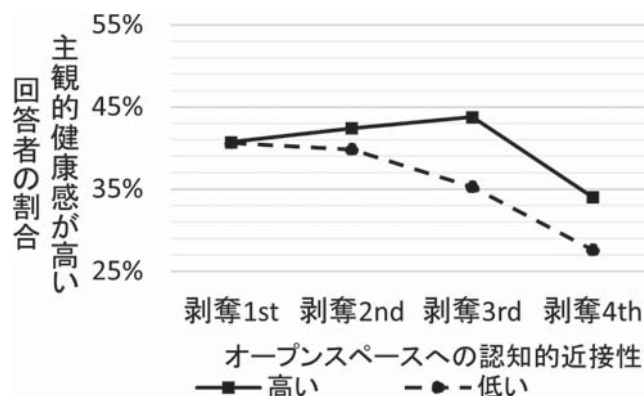
人の健康水準を決めるものは近隣環境の質だけではなく、性別や年齢、収入、ライフスタイル等、他の様々な要因も影響している。特に高齢者や貧困層等、社会的弱者に位置付

けられる人々は環境による健康影響を受けやすいといわれており、この点についても研究が進められている。

筆者らの大阪府を対象にした郵送質問紙調査による分析では⁽⁵⁾、地域レベルの貧困度が高い地域に住む居住者ほど、近くに都市公園等のオープンスペースがないと感じる近隣環境に対して脆弱であることが示された。図1の横軸は大阪府の町丁字ごとの地理的剥奪指標(地域レベルの貧困指標)を表している。この指標は2010年の国勢調査をもとに、地域の貧困度と関連する8つの指標(高齢単身世帯割合、高齢夫婦世帯割合、母子世帯割合など)を算出し、これらの指標に貧困世帯を推計する個票データ分析により得られた重み付け係数をかけ合わせ、合成することで作成した。地理的剥奪指標の値が高い町丁字ほど地域レベルの貧困度が高いことを示しており、これを四分位に分類した。

縦軸は郵送質問紙調査の回答者のうち、町丁字ごとに主観的健康観が高いと回答した者の割合を示している。主観的健康観とは現在の自分自身の健康状態を自己評価した指標で、質問紙調査を通じて得ることができる健康指標である。主観的健康観が低い場合、実際に健康水準が低く、死亡リスクが高いことが過去研究によって示されている⁽⁶⁾。

そして図1の実線の線グラフは郵送質問紙調査における質問によって近隣がオープンスペースの近接性に恵まれていると感じているグループを指し、一方で点線の線グラフは恵まれていないと考えているグループを指す。図1が示すことは、地理的剥奪指標が高い地域(すなわち、地域レベルの貧困度が高い地域)の居住者は、オープンスペースへの近接性に恵まれていないと感じている場合に、そうでない場合と比べて主観的健康観が低い傾向があるという点である。他方、地理的剥奪指標



剥奪 1st : 地理的剥奪指標の値が最も低い四分位
剥奪 4th : 地理的剥奪指標の値が最も大きい四分位

図1 主観的健康観と地理的剥奪指標(地域レベルの貧困度)との関係
安本・中谷(2022) p456 第2図を編集して引用

が低い地域（地域レベルの貧困度が低い地域）では、オープンスペースへの近接性に恵まれているかどうかという点は主観的健康観との間に関連性がみられなかった。したがって、地域レベルの貧困度が高い地域の居住者ほど、オープンスペースへの近接性が劣るときに健康影響を受けやすい可能性があることが見出された。

これはいくつかの重要な政策的含意を示唆しているかもしれない。都市公園に代表されるオープンスペースは、地域レベルの貧困度が高い地域に優先的に置いたほうが、健康保全という目的においては効果的である可能性がある。さらに、「近隣環境はオープンスペースへの近接性に恵まれている」と主観的に感じているかどうかは、オープンスペースの有無のみならずその質や、近隣の治安、交通事故リスクなど多様な要因に関連している。これらの要素を改善するには、保健医療や都市計画などの部門、および警察機関などによる多部門間の行政の連携が必要かもしれない。

3. GIS（地理情報システム）の貢献

GIS（地理情報システム）とは、コンピュータを用いて様々な地理情報を取得・管理し、地図を用いた可視化や分析を行うシステムを指す。GISの原型は古くは1960年代までさかのぼるが、その後のコンピュータやインターネットの発達、そして近年のスマートフォンの普及によって、GISはより身近な存在となった。例としてスマートフォンのアプリとしてお馴染みのGoogle Mapsが提供する目的地探索や道路混雑度表示などの様々な機能は、GISの

発展によって実現したものである。

近隣環境の健康影響の分析においても、GISが活用されてきた。前述の地表面温度を暑熱暴露量の指標とし、人への健康影響をみた研究⁽¹⁾は、GISやその関連技術であるリモートセンシングを用いた近隣環境による健康影響の研究の一例である。

筆者らのGISと質問紙調査を併用した研究によって、各家屋が享受する日照も健康に影響を与えることが分かった⁽⁷⁾。この研究ではまず郵送質問紙調査を行い、横浜市の調査対象者の社会的属性や主観的幸福感（心理的健康を表す指標の1つ）を尋ねた。次に図2で示されるように、横浜市都市計画基礎調査によって作成された建物の形状と高さ情報を示すGISデータを用いて、各家屋が享受する日照時間を計算した。統計解析の結果、各家屋が享受する日照時間が主観的幸福感に正の影響をもたらしていることが分かった。GISを用いれば、このように広域の日照時間も容易に把握でき、人々への健康影響を統計的に分析することも可能となる。

4. まとめ

以上みてきたように、様々な近隣環境の質が健康影響を及ぼす可能性があり、本稿では郵送質問紙調査や、GISを用いての検証例について紹介した。特にGISやリモートセンシングは昨今、データの精緻化やオープンデータ化が急速に進んでいるため、同研究分野における活用が今後も広がっていくと考えられる。

参考文献

- (1) Laaidi, K., Zeghnoun, A., Dousset, B., Bretin, P., Vandentorren, S., Giraudet, E., &

Beaudeau, P. (2012). The impact of Heat Islands on mortality in Paris during the august 2003 heat wave. *Environmental Health Perspectives*, 120, 254-259.

- (2) Vos, S., Bijmens, E.M., Renaers, E., Croons, H., Stukken, C. Van Der., Martens, D.S., Plusquin, M., Nawrot, T.S. (2022) Residential green space is associated with a buffering effect on stress responses during the COVID-19 pandemic in mothers of young children, a prospective study. *Environmental Research*, 208, Article 112603.
- (3) 岩間信之・田中耕市・佐々木緑・駒木伸比古・齋藤幸生 2009. 地方都市在住高齢者の「食」を巡る生活環境の悪化とフードデザート問題—茨城県水戸市を事例として. *人文地理* 61: 139-156.
- (4) Walker, R. E., Keane, C. R., and Burke, J. G. 2010. Disparities and access to healthy food in the United States: A review of food deserts literature. *Health Place*, 16, 876-884.
- (5) 安本晋也・中谷友樹 2021. オープンスペースへの認知的近接性が健康格差に与える影響—大阪府の事例—. *人文地理* 73: 445-465.
- (6) Idler, E. L. and Benyamini, Y. (1997). Self rated health and mortality: A review of twenty seven community studies. *Journal of Health and Social Behavior*, 38(1), 21-37.
- (7) 安本晋也・中谷友樹 2019. GISを用いた客観的および認知的日照アクセスの健康影響の分析—横浜市の事例研究—. 日本地理学会春季学術大会, 2021年3月26日, オンライン開催, 口頭発表.

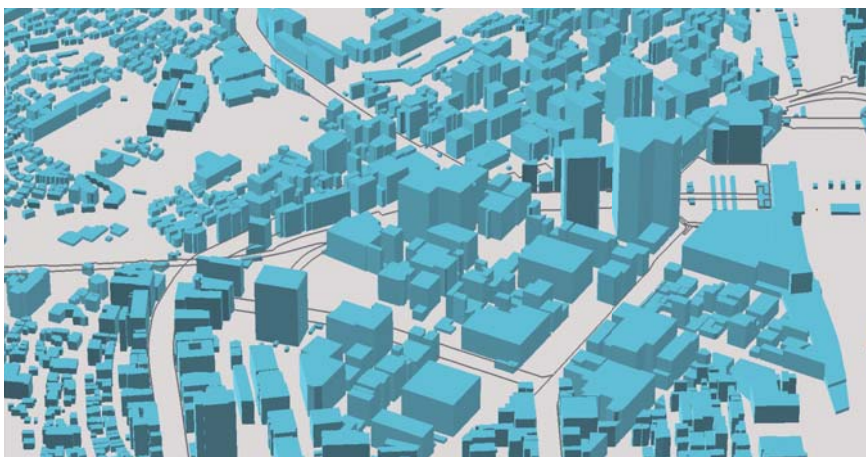


図2 横浜市都市計画基礎調査による建物形状と高さ情報をGISで3次元表示した例



国際人間学研究科 国際関係専攻 博士後期課程 3 年

王 莹雪 (WANG Yingxue)

中部大学の国際人間研究科国際関係学専攻博士後期課程 3 年

中国天津市出身。修士（国際関係学）。専門はインバウンド観光学。研究テーマは中国人訪日客の観光行動の特性に関する研究などである。主な論文「中国人訪日客に対する観光案内に見る添乗員の「仲介者」としての役割—高山市を例として」（第 35 回日本観光学会全国大会学術論文集、2020）などがある。



中国人訪日客の日本観光における添乗員の役割



はじめに

日本政府は2023年3月に策定した「観光立国推進基本計画」のなかで、2025年までに訪日外国人観光客数が2019年の3,188万人を上回ることを目指している。

そのためインバウンド旅行の手配やアレンジをし、同行する添乗員に重要な役割が求められている。しかしながら、そのような人々について注目した研究はまだ少ないように考えられる。

私の研究課題は中国人訪日客の日本観光旅行に添乗員が果たす役割としている。本稿ではその一部を紹介する。特に中国人訪日客の日本観光をアテンドする添乗員の属性について述べたい。

中国人の訪日旅行における添乗員の重要性

2019年までに中国人訪日客は観光目的入国者のうち、団体ツアーは40%ほど占めていた。2020年以降、中国の「ゼロコロナ」政策の影響で低迷したが、2023年の4月ごろから、中国からの個人の旅行者が増え続けている。

2023年8月日本の水際規制緩和により、団体旅行、パッケージツアーも解禁されたことで、今後、日本を訪れる中国人訪日客の数は大幅に増えるだろう。

添乗員は団体ツアーだけではなく、個人客でも全行程中の2、3日添乗員を雇って観光する人も多い。英語も日本語も話できない中国人訪日客にとっては添乗員が日本の観光地や

観光関連業との唯一の接点である。添乗員は多様化する中国人訪日客の日本観光を一手に引き受けている印象である。

添乗員の属性とツアーのトラブル

添乗員は中国人訪日客について旅程管理をはじめ、様々な業務を行う者であり、日本の「国内旅程管理主任者」の資格を有している。

これらの添乗員の属性を見ると、専業添乗員と兼業添乗員がある。中国国籍の者では専業と兼業が見られたが、日本国籍の兼業添乗員はいなかった。専業添乗員は旅行会社に所属している社員であり、兼業添乗員はいわゆる資格をもつアルバイトである。中国人訪日客に関わる添乗員はこのような雇用形態である。（図1）

この中で兼業添乗員は、経験があまりないにもかかわらず、専業添乗員と同様に添乗することで、様々なトラブルが報告されている。筆者の調査では、食事の管理、客との連絡の問題、代金支払いのトラブルが多く見られた。特に支払いトラブルが多発している。それに対して専業添乗員は手慣れており、トラブルが少ない。添乗員の雇用形態の違いは、様々な問題に影響を及ぼしている。

兼業添乗員の雇用は、これまでに見られた中国人客の急増に対応するには便利であるだろうが、何らかの形で訓練等が必要と思われる。

まとめ

今後日本のインバウンド観光の中で、中国

人訪日客は再度増加し多様化することが考えられる。今後のインバウンド観光を考える上で、中国人訪日客に関わる添乗員は重要な役割を担っている。

団体ツアーだけでなく、個人客も添乗員を雇用していることなどは、日本であまり知られておらず、このような添乗員についての研究は、日本の経済発展および日本の観光産業の発展に寄与できると考える。



図1 中国人団体客を案内する添乗員（2018年、筆者撮影）

参考文献

- JNTO(2019)『訪日旅行データハンドブック』pp. 47-50, 日本政府観光局
- 橋本佳恵(2000)「海外主催旅行における添乗員の役割に関する研究」『大阪明浄大学紀要』（開学記念特別号）, pp. 73-81



国際人間学研究科 国際関係学専攻 博士前期課程 1 年

野崎 日向歩 (NOZAKI Hinaho)

2002 年愛知県生まれ。2024 年 3 月に中部大学国際関係学部国際学科を卒業。同年 4 月に中部大学大学院国際人間学研究科国際関係学専攻に入学。現在、悪女のイメージが強いとされるクレオパトラ 7 世の人物像について研究を進めている。



邦語文献から見るクレオパトラ 7 世像の変遷と今後の研究について



はじめに

古代エジプト文明最後の王であるクレオパトラ 7 世については、さまざまな見解が存在する。悪女、世界三大美女、策略家、聡明な女性、など、彼女の人物像についてはこれまで多く語られてきたが、未だ解明されていない。そこで学部卒業論文では、彼女の政治的手腕、容姿、カエサルとの関係、アントニウスとの関係、死因の 5 つの項目を 1970 年代～1990 年代、2000 年代、2010 年代～現在（以下、順にⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期と記す）に出版された邦語文献（海外の代表的な文献を翻訳したもの）においてどのように論じられてきたかを確認し、調査や研究の進展がクレオパトラ 7 世像の変遷に与えた影響を探った上で、今後の研究の方向性について論じた。

クレオパトラ 7 世の人生

前 69 年にプトレマイオス 12 世の第二子又は、第三子として生まれ、プトレマイオス 12 世の死後、前 51 年には弟のプトレマイオス 13 世と共にエジプトの共同統治者となった。前 48 年にカエサルの協力を得て、プトレマイオス 13 世と対戦したアレクサンドリア戦争に勝利。前 47 年にはカエサルと子、カエサリオンを出産する。カエサルの死後は再びローマと関係を築くため、前 37 年にアントニウスと結婚。その後、前 31 年にはアクティウムの海戦でオクタヴィアヌス率いるローマと戦うが、敗北。前 30 年に 39 歳で自害し、人生の幕を閉じた。

邦語文献から見る クレオパトラ 7 世像の変遷

政治的手腕について、Ⅰ期の文献では、対ローマの外交政策についての記述が多い。Ⅱ期の文献では、前王プトレマイオス 12 世と比較され、内政についての内容が増加する。Ⅲ期の文献では、ローマの 2 人の有力者との間に子供を作ったという事実に焦点があてられ、「性」を利用したとする記述が見られる。

容姿について、Ⅰ期の文献では、彼女は必ずしも美人ではなかったとされる。Ⅱ期の文献では、コインや胸像で当時の一般的なギリシア人と比較し、具体的な顔や体のパーツについて記述された。Ⅲ期の文献では、ブルタルコスという言葉から、魅力は容姿ではなく、内面にあったとする記述が増える。

カエサルとの関係について、Ⅰ期の文献では、政治的な目的から始まり、後に愛情が芽生えたとされるが、Ⅱ期の文献では、カエサリオンの誕生により、性的な関係が強いとしている。Ⅲ期の文献では、これまで参照されてきた文献がクレオパトラ 7 世と同世代の作ではないことから、政治的なものか、愛情があったのか意見が分かれるようになった。

アントニウスとの関係について、Ⅰ期の文献では、政治的に必要不可欠な存在だったとされるが、Ⅱ期の文献では、クレオパトラ 7 世は政治上の目的だったのに対し、アントニウスは性的な遊びであったと記述が変化する。Ⅲ期の文献では、クレオパトラが嘘の伝言をし、アントニウスを自殺に追い込んだことから、最終的に足手まといになったことが挙げられている。

死因について、Ⅰ期の文献では、ヘビを用いて自害したとされ、Ⅱ期の文献では、コブラかクスリヘビか、胸か腕かを噛ませて自害したと記される。Ⅲ期の文献では、これまでの説に異を唱え、ヘビの特性と彼女の性格を背景に、ヘビではないが、毒を用いたと見方が変わった。

これら一連の評価は、ローマやギリシアの歴史家、詩人の著述を基にしており、どの資料を用いるかで彼女の人物像が変わり、かつ同時代の資料が乏しいため、推測による記述が多い。

今後の展望

まずは、こうした記述の基になった原資料を読み込み、研究の糸口を探りたい。またクレオパトラ 7 世のみに注目するのではなく、当時の時代背景やエジプト・ローマの政治社会状況において、プトレマイオス王朝の他の高位女性がどう表現されていたのかという点につき、資料の特性なども考慮しながら検討し、クレオパトラ 7 世と比較していく。

なお、クレオパトラ 7 世はギリシア・ローマ世界で人気を博したイシス女神に例えられることも多く、女神に関する記述の特徴が影響を与えていた可能性もある。そこで従来の研究では欠落していた同時代資料について、イシス女神からのアプローチも試みていきたい。

参考文献

- 仁木めぐみ（訳）2011. 『クレオパトラ (Schiff, S. 2011. Cleopatra: A life. Back Bay Books.)』早川書房。
Jones, P. 2006. Cleopatra: A Sourcebook. University of Oklahoma Press: Norman.



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 1 年

藤吉 宙 (FUJIYOSHI Sora)

1999 年アメリカピッツバーグ生まれ。2023 年名古屋商科大学を卒業後、2024 年 4 月中部大学国際人間学研究科 言語文化専攻に入学。現在、音の言語化をテーマに修士論文を執筆中であり、主に音声認識 AI を中心に音の文字化について研究している。



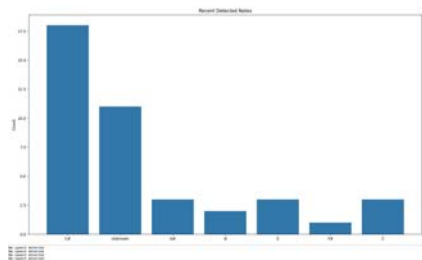
音声認識AIによる音の文字化



はじめに

近年、音声認識技術と人工知能（AI）の発展により、音声言語処理の研究が著しく進展している。本研究では、高度化した音声処理システムによる未学習の音の文字化に焦点を当てた。このような音声処理の高度化は、動画コンテンツの文字化した音からの検索を可能にするなど、聴覚情報のバリアフリー化に大きな可能性を秘めている。

検討素材として、Whisperモデルのファインチューニングと日本語音声の特徴抽出を対象とし、現在の推論中心のシステムでは「unknown」と出力してしまう音の強制的な文字化がどのように実現できるか考察した。



音声認識 AI の概要

音声認識AIとは、人間の音声を自動的にテキストに変換する技術である。近年では、深層学習の発展により、音声認識の精度が飛躍的に向上している。

Whisperは、OpenAIが開発した音声認識モデルである。このモデルは、大規模な多言語・多タスクのデータセットで訓練されており、様々な言語や話者に対して高い認識精度を示す。

【OpenAI2022】

ファインチューニングの手法

ファインチューニングとは、事前に学習済みの大規模なモデルを、特定のタスクや領域に適応させるために再学習させる手法である。本研究では、Whisperモデルに対して日本語のオノマトベに特化したファインチューニングを行った。具体的には、日本語の擬音語・擬態語に加えて「unknown」に対応させるための音素データセットを用意し、モデルの出力層を調整しながら再学習を行った。

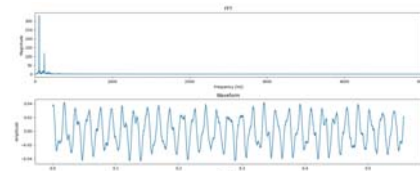
音声認識 AI の開発

本研究では、独自に用意した日本語単語の発音データを用いてファインチューニングを行い、日本語に特化したモデルを開発した。また、クラウドベースのGoogle Colaboratory環境を活用することで、大規模なモデルの学習や実験を効率的に行った。この手法により、入力された音声を日本語の音素に分解することが可能となった。音素とは、言語において意味の弁別に関与する最小の音声単位であり、日本語では約50種類存在する。本モデルは、これらの音素を正確に識別し、オノマトベの生成に活用する。

リアルタイム処理と音階抽出の試み

現在、入力された音声データをフーリエ変換し、スペクトルの最大成分を抽出することで音階を導出する機能の実装を進めている。フーリエ変換とは、時間領域の信号を周波数領域

に変換する数学的手法であり、音声信号の分析に広く用いられている。この変換により、音声に含まれる各周波数成分の強度を可視化することが可能となる。音階の抽出は、フーリエ変換後のスペクトルデータから最も強度の高い周波数成分を特定し、その周波数に最も近い音階を判定することで行う。これにより、環境音や音楽の音階情報をオノマトベ生成に反映させることが可能となる。

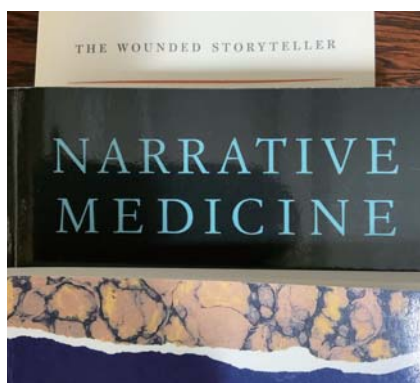


おわりに

音声認識の分野では、AIは人間の音声のみを対象とし、環境音や効果音などは処理できないという見解が強かった。しかし、本研究は、そうした固定観念を覆し、AIによる音声処理の範囲を大きく拡張する可能性を模索している。本研究の試みは、音声認識AIの新たな可能性を示すものであり、引き続きこの分野の発展に貢献できるよう、さらなる研究を進めていきたい。

引用文献

- A. Radford, J. W. Kim, T. Xu, G. Brockman, C. McLeavey, and I. Sutskever, "Robust speech recognition via large-scale weak supervision," Tech. Rep., OpenAI, 2022.
- A. Baevski, Y. Zhou, A. Mohamed, and M. Auli, "wav2vec 2.0: A framework for self-supervised learning of speech representations," in Advances in Neural Information Processing Systems (NeurIPS), 2020.



国際人間学研究科 言語文化専攻 博士後期課程 3 年
原 由美子 (HARA Yumiko)

愛知教育大学大学院教育学研究科英語教育専攻課程修了（教育学修士）。修了後は英語圏文学文化研究、主にアイルランド文芸復興時のアングロ＝アイリッシュ文学を対象とした研究を行う。近年はコメディカルの専攻学生に向けた英語学習教材の開発に従事。



ナラティブ・メディスンにおける医療の物語 —そのテキスト・アプローチの特徴とは—

異なる分野における 「ナラティブ（物語）」の捉え方

物語論とは文学における用語・理論であるが、医療系分野における「物語（ナラティブ）」という用語の扱い方、対象は文学のそれとは異なるとナラティブ・メディスンの提唱である米国コロンビア大学医学部のCharon（2006）は述べている。ではどのように異なるのか。本研究では「物語」という概念の発祥分野である文学の物語論の視点から医療系分野の物語を捉えた場合、どのような特徴が浮かび上がるのかを明らかにすることを目的にする。

研究のプロセス

医療系分野において「ナラティブ論」と称される論考が現れるのは1990年前後のナラティブ・ターンと呼ばれる学術的転回期である。

まず先行研究であるこの時期に発表された論考を取り上げ、ナラティブ・メディスンの誕生に影響を与えたと考えられる学術的な医療にかかわるナラティブ論を精査する。

それらの研究を踏まえ、主にナラティブ・メディスンの誕生以降の医療者が扱うナラティブの分析事例を取り上げ、医療系分野の専門家がどのように物語と対峙し、どのように分析しているのか、その傾向について明らかにする。

ナラティブ・メディスンのテキスト

Montgomery-Hunter(1991)は患者と

の関係性において医師の立場を「患者というテキストを読むための高度な訓練を積んだ批判的な読者」とであると表現するに至っている。

それに対する患者の立場はと言えば「医師によって吟味され、研究され、理解されるべきテキスト」である。批評の知識と技術を持った読み手である医師／医療者が向き合う「患者というテキスト」によって紡ぎ出されるのが「患者の物語」であり、この論はナラティブ・メディスンへと引き継がれていると言える。

また、Frank(1995)が論じる「病いの物語」は身体を通じて語られる「身体化された物語」である。身体を物語の「原因であり主題、手段である」と定義づけ、傷病によって変化してしまった身体に与えられた声をテキストと捉えている。

医療者が扱うナラティブ事例

医療系分野におけるナラティブ研究は、研究デザインとしては質的研究アプローチに分類され、またアプローチ方法に関しても各種カテゴライズされている。

その中で患者の物語として「ナラティブ」の分析を標榜している研究事例を本研究の対象とした。分析アプローチ方法として、質的記述的研究、グランデッド・セオリー、科学的現象学的方法を始めとする6種のアプローチについて、それぞれのナラティブ・アプローチ法を「研究デザイン」として明記した研究事例を医療分野系論文データベースから抽出し、物語論の視点を基に検証を行った。

その結果、医療系分野に特徴的なナラティ

ブ分析に関する質的研究の要素が明らかになった。

医療者の ナラティブ・アプローチの特徴

医療系分野におけるナラティブ分析研究（質的研究）のほとんどは物語内容の概念の抽出と、それらのカテゴリー化を手段としており、断片的言説のデータ化、分類、テーマの提示という一連のプロセスに特徴を見出すことができる。そこでは物語はデータとして扱われ、そのデータの単位はコード化され、またカテゴリー化され、物語の連続性や患者個人の差異に対する視座が欠如する傾向があることがわかった。

今後、上記の結果を踏まえ、語り手と視点、語り手、あるいは登場人物の語り方、時間、物語の背景、テキストのテーマといったポイントを押さえたうえで医療者教育を目的としたナラティブ・メディスンのための文学作品精読を実践するための教案の提示を行う。

引用文献

- Charon, R.(2006). *Narrative medicine, honoring the stories of illness*. New York: Oxford University Press.
Frank, A.(1995, 2013). *The wounded storyteller*. Chicago: The University of Chicago Press.
Montgomery-Hunter, K.(1991). *Doctors' stories: the narrative structure of medical knowledge*. Princeton, NJ: Princeton University Press.



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 1 年

青木 利華 (AOKI Kazuha)

2001 年愛知県大府市生まれ。2024 年に中部大学大学院に進学。卒業論文では、書き言葉と話し言葉における終助詞「に・へ」の使用について研究した。修士論文では、日本語学習者における終助詞「ね・よ」をテーマにし、その習得状況について執筆中。



日本語学習者から見る終助詞



はじめに

日本語学習者が日本語を学習する際、学習が難しいとされている学習項目に、オノマトペやカタカナ語、終助詞の習得などがあげられる。日本語学習者が日本語を学習する最終目的は人によって異なるが、日本語母語話者と同じレベルまで習得したい場合、これらの学習項目は避けて通れない内容である。本稿ではその中でも終助詞について紹介し、最後にこのテーマに関する修士論文の概要を説明する。

終助詞について

終助詞とは、『日本語大辞典』によると、「文末に用いられ、文を終える働きをする助詞」（掲載ページ記載）とされているが、終助詞の定義についての共通認識がなく研究者によって見解が異なるとされている（木曾：掲載ページ記載、西郷も同）そして西郷（2016）によると終助詞「ね」は相手とのあいだに良い雰囲気を作りたい、または提案の前の土台（前提、共通認識）を作りたいなどなど、何らかの目的があって、「あなたからの同意が欲しい」と伝えたい場合は「ネ」を用いる。とされ、同じく西郷（2016）で、終助詞「よ」は同意よりも話を一歩前進させたいという話し手の意図を伝えたい場合「ヨ」を用いると述べている。

終助詞には、文を終わらせる働きだけでなく、文や会話に様々な意味を添える働きも持っている。

終助詞「ね」「よ」の使用例

「今日は良い天気だ。」という文に相手に同意を求めたい場合は「ね」を用い、「今日は良い天

気だね。」と投げかける。相手は「そうだね。」や「良い天気だね。」という返答をし、同意を得ることができる。しかしそこで会話が終わってしまうことが多く、その後の展開に繋げることは難しい。

一方、終助詞「ね」ではなく終助詞「よ」を前述した文に使用すると、「今日は良い天気だよ。」となる。「良い天気だから何？」という返答になるが、何かやりたいことがあるのだろうかという相手にも思わせることができる。「だから買い物に行こう。」「だから洗濯をしよう。」など、会話を広げることができる。

また終助詞「よね」では確認要求の意味を更に強くさせる働きを持つ。

このように終助詞が異なるだけで文の意味が全く異なる。

日本語学習者から見る終助詞

私たち日本語母語話者はこのような文の微妙な違いを会話や文章において瞬時に判断し、会話を成立させることができる。しかし非日本語母語話者にとって、この微妙な違いを判断し、最適な返答をすることは難しい。

それは学習者の母語に同じ意味を持つ表現があるかということに関係する。例えば同意を求める意味で使われる終助詞「ね」は中国語には存在するが、韓国語には管見の限り存在しない。母語に同じ意味を持つ表現が存在しないと、どのような意味なのか、どのような状況で使われるのか、などを想像することは難しい。それにより使用を避け、学習が止まってしまうこともある。

楊（2010）では、中国人日本語学習者2名に対し終助詞「ね」「よ」の習得状況について調査を行った。その結果、共感を示す相槌「そうですね」の使用が多く見られるが、

その他の意味機能を持つ終助詞「ね」の使用は少なかったこと、また質問の際に使用される終助詞「か」との誤用が見られたことが明らかになった。この2名は中級・中上級レベルであるが終助詞「ね」「よ」の習熟度は低かった。そしてこの学習者2名は2名とも母国である中国で日本語を学んでおり、日本語母語話者と会話する機会が少なく、終助詞「ね」「よ」が実際に使用される場面を想像することは難しい。この学習環境が言語習得与える影響も今後の研究に取り入れたい。

おわりに

本稿では終助詞が文に与える影響、学習者から見た終助詞の学習に関する先行研究について紹介した。これまでの先行研究では、中国人日本語学習者を対象にした終助詞「ね」「よ」の研究が多く見られ、韓国人日本語学習者を対象にした終助詞「ね」「よ」の研究は管見の限り十分ではない。そこで自身の修士論文では、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者を対象に終助詞「ね」「よ」を学習環境と母語の影響の観点から、両者の習得状況について明らかにしたい。

引用文献

- 木曾美那子（2013）「中国人日本語学習者の会話における終助詞に対する母語話者評価」『國分論叢』46、30-47、神戸大学文学部国語国文学会
- 西郷英樹（2016）「終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察—大規模談話完成テスト調査報告—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』26号、95-120、関西外国語大学留学生別科
- 楊虹（2010）「中国人日本語学習者の終助詞の使用に関する一考察」『お茶の水女子大学人文科学研究』6、199-208、お茶の水女子大学



国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 1 年 韓 戔 (カン イク)

2000 年中国大連市生まれ。2023 年 7 月ハルビン理工大学を卒業し、2024 年 4 月に中部大学大学院へ進学。専攻は日本語教育。修士論文では、中国人日本語学習者の和製英語の理解に影響する要因について調査を行う予定である。趣味は旅行。自然の風景を楽しんだり、その土地ならではの名物を味わったり、新しい場所での発見や体験は、大きな喜びである。



中国人日本語学習者の 和製英語の理解に影響する要因



はじめに

日本語の中に、「和製英語」と呼ばれる語が存在する。小林 (2013) によると、日本のテレビのCMの9割に和製英語が登場しており、平均すればCM1本につき2語現れているという。すなわち、日常生活では和製英語を見かける機会は少なくない。これらの語彙は、もともとの英語の意味とは異なり、日本人が独自に作った語彙である。日本語学習者の理解に関する研究が少なく、見解は統一されていない。張ほか (2014) は、英語では品詞が意味理解に影響し、特に動詞が成績を促進するとしつつ、日本語語彙知識には関連がないと述べている。一方、呉 (2020) は、日本語語彙知識が意味理解に影響を与えると指摘し、呉 (2022) では、母語知識が複合和製英語の意味理解に役立つと報告した。調査方法の違いから単純比較は難しい。語彙知識が中国人日本語学習者の和製英語理解に影響するのかがどうか検証が必要である。本研究では、中国人日本語学習者の和製英語の理解に影響する要因を明らかにするために、日本語語彙知識、英語語彙知識と中国語相当語と和製英語の理解の関係を調査する。そして、3つの要素それぞれの影響の程度を明らかにする。

和製英語の定義と分類

本研究では、日本語教育において数多く利用されている柴崎ほか (2007) の定義を採用する。柴崎らは、「英単語を短縮したり英単語を組み合わせたりして作られており、英語には存在しない日本語化された語彙」を和製英語と定

義する。さらに、柴崎 (2007) は、和製英語を4つに分類した。そのうち、実際に存在する英単語を組み合わせて新しい意味を表す複合語タイプの和製英語は、単純語より構成が複雑であり、意味の理解も容易ではないと推測される。例えば、「ベッドタウン」は「大都市周辺の集合住宅地」を意味する。「モーニングサービス」は「喫茶店などで、午前中にする割引メニュー」を意味する。そのため、本研究では、この複合語タイプの和製英語に焦点を絞って検討する。

研究方法

本研究では、中国東北部にあるハルビン理工大学で日本語を専攻する2年生 (20名)、3年生 (20名)、4年生 (20名) および大学院生 (9名) の合計69名の日本語学習者を調査対象者とする。これらの日本語学習者に日本語と英語の語彙テストと和製英語の理解テストを実施する。重回帰分析で和製英語の理解と各要因の知識レベルとの相関関係を分析し、上記の要因 (日本語語彙知識、英語語彙知識、中国語相当語) が和製英語の理解にどの程度影響するかを統計的に分析する。

仮説の提示

今回議論した三つの要因、日本語語彙知識、英語語彙知識、および中国語相当語は全て複合和製英語の意味理解が成績に影響を与えることが予測される。

まず、日本語語彙知識について、日本語語彙が豊富であれば、多様な語彙知識を活用しながら意味理解に成功する可能性が高いため、和製

英語の意味を理解しやすくなると考えられる。

次に、英語語彙知識が豊富であるほど、和製英語の意味理解の成績が低くなると予想する。和製英語はしばしば元の英語の意味から大きく離れているため、英語の知識がむしろ「負の転移」を引き起こし、和製英語の日本語的な意味にアクセスするのを妨げると考えられる。

最後に、中国語相当語がある場合は相当語のない場合より意味理解の成績が高くなると予想する。母語に相当する語があれば、母語の知識をそのまま活用して正確に意味が理解できることが学習者にとって認知の負担が少ないと考えられる。具体的に、和製英語の理解に対する影響の程度は日本語語彙知識>中国語相当語知識>英語語彙知識と予想する。

最終的な分析は、今年12月に中国に戻り、ハルビン理工大学での実際のデータを基に行う予定である。

引用文献

- 小林善久 (2013) 「TVCMにおける和製英語のパイロット調査—文字テキストと音声テキストの対照を軸に—」『国立国語研究所』117-126。
呉梅 (2020) 「中国語を母語とする日本語学習者の複合語形式の和製英語の意味推測に関する研究—日本語の語彙知識から—」『国際日本学術論集』(12)、79-103。
呉梅 (2022) 「中国語を母語とする日本語学習者の複合和製英語の意味推測に影響する要因」『国際日本学術論集』(16)、13-26。
柴崎秀子・玉岡賀津雄・高取由紀 (2007) 「アメリカ人は和製英語をどのくらい理解できるか—英語母語話者の和製英語の知識と意味推測に関する調査」『日本語科学』21、89-110。
張婧禎・玉岡賀津雄・早川杏子 (2014) 「和製英語の理解における英語および日本語の語彙知識の影響—中国華東地域の日本語学習者を例に—」『日本教科教育学会誌』36(4)、23-32。



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 1 年

劉 雪婷 (RYUU Setutei)

2000 年中国大連市生まれ。2023 年中国のハルビン理工大学を卒業。2024 年に中部大学大学院へ進学。卒業論文では、日本語における日常用語の「誤用」をテーマにした。現在、中国人日本語学習者における日中同形類義語の誤用について研究している。趣味は旅行、撮影。



中国人日本語学習者における日中同形類義語の誤用 —JFL環境とJSL環境の比較—

はじめに

中国語と日本語は漢字という共通の文字を使用している。ただし、同じ漢字を使っている、必ずしも両言語における意味が同じとは限らない。本研究では、中国人日本語学習者にとって誤用しやすい日中同形類義語に焦点を当て、JFL環境JSL環境の比較を通して、類義語の誤用の実態を明らかにすることを目的とする。

日中同形語について

日中両言語における字体の差を問わず、同じ漢字を使う語は「日中同形語」または「同形語」と呼ばれる。中国語と日本語の辞書の意味記述に従い、同形語は、同形同義語、同形類義語、同形異義語に分けられる(文化庁, 1978)。日中両言語においては、多くの同形語が存在していることから、中国語を母語とする日本語学習者の日本語習得を促進する一方で、課題も存在する。特に、日中両言語を比較した際、意味が一部重なっているが、両者の間にずれのある日中同形類義語(以下O語)については、学習者が語彙を共有義の部分のみ理解・推測してしまうため、より誤用を引き起こしやすいことが問題であると先行研究で指摘されている(加藤, 2005; 小森・玉岡, 2010)。

王(2013)は、単語は意味と品詞の統一体であるため、同形語を分類する際に、意味と品詞を結びつけて行えば、より同形語の全体的な特徴を把握できると述べている。

従来の研究では、ほとんどの研究が同じ学習環境の中国人日本語学習者を対象としていた。また、多くの日中同形類義語についての先行

研究では、意味と品詞とを切り離して捉えてきた。つまり、O語の意味と品詞の二重誤用についての研究はこれまで十分になされていない。

そこで、本稿では、JFL環境とJSL環境における中国人日本語学習者を調査対象とする。そして、O語の意味及び品詞を結びつけた「二重誤用」について、異なる環境での学習者の誤用実態等を明らかにする。

本研究の目的と調査方法

以上のように、本研究では、O語の意味及び品詞を結びつけた「二重誤用」について、中国人日本語学習者がどのO語を最も誤用しやすいかという点について考察する。またJFL環境とJSL環境を比較し、学習環境の違いが学習者の誤用にどのような影響を与えるかを考察することを目的とする。

調査対象は、JFL環境での中国人日本語学習者として、中国のハルビン理工大学に在籍する学生30名を対象である。JSL環境での中国人日本語学習者として、日本の中部大学及び他の大学に在籍し、日本に滞在している1年以上の学生30名を対象である。なお、計60名の中国人日本語学習者は、全て日本語中上級者とする。(日本語能力試験N1かN2に合格している。または、N1かN2のレベルに相当する。)

調査はアンケート調査を用いる。コーパスや先行研究などを参考にし、学習者が誤用しやすいO語については、30語を抽出し、60の問題文を作成する。そして問題文におけるO語の意味と品詞の使用が正しいかどうかを60名の調査協力者に正誤判断文の形(「O／×」を選ぶ)でおの60問に回答してもらう。

60の問題文について、1問につき1点を配点し、60点満点にする。そして調査協力者全員に実施した正誤判断アンケート調査の統計の結果と標準偏差を計算する。さらにアンケート調査の結果をもとに学習環境によって日本語学習者が誤用しやすいO語のタイプを分析する。その結果をもとに、JFL環境とJSL環境における中国人日本語学習者のO語の誤用について対照分析を行う。

最後に、学習者による各下位分類の習得を予測するため、分類木分析を統計的手法とし、O語の習得及び誤用における要因を分析する。

おわりに

本研究の考察により期待される効果は以下の通りである。まず、JFL環境とJSL環境における中国人日本語学習者の誤用しやすいO語の共通点と相違点が明らかになる。次に、学習環境がO語の習得と誤用にどのような影響を与えるかが明らかになる。以上の分析により、O語の誤用に対する理解が深まり、効果的な日本語教育方法の開発につながることが期待される。

引用文献

- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』東京：大蔵省印刷局。
- 小森和子・玉岡賀津雄(2010)「中国人日本語学習者による同形類義語の認知処理」『レキシコンフォーラム』5, 165-200。
- 王燦娟(2013)「品詞と意味における二重誤用しやすい日中同形語に関する研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』16, 29-56。
- 呂偉蘭(2023)「JFL環境における中国人日本語学習者の日中同形類義語(Overlap語)の誤用：意味と品詞の誤用をめぐって」『大阪大学言語文化学』32, 83-98。



国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程 2 年

中島 亮 (なかしま りょう)

1995 年生まれ。愛知県名古屋市出身。中部大学応用生物学部環境生物科学科卒業後、一般企業での勤務を経て、同大学人文学部歴史地理学科編入学。卒業後、同大学院歴史学・地理学専攻に進学。研究対象は近世イギリス史。写真は今年行ったエジプトのピラミッド。



18世紀イギリス史料を用いた 計量テキスト分析の試行



はじめに

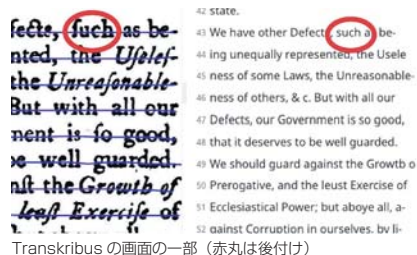
昨今ではデジタル技術の発展に伴い、博物館や図書館が所蔵する様々な資料がオープンデータとしてインターネット上で閲覧できるようになってきている。例えば、筆者が研究対象としている18世紀イギリスは多くの新聞や雑誌が創刊された時代であり、デジタルアーカイブ上に膨大な史料が存在する。大量の史料が利用可能であるという利点を活かすためには、史料を量的データとして分析することで全体的な傾向や特徴を把握し、その上で抽出された意味を読み取る、というアプローチが有効だと考えられる。本稿では、そうした計量的な分析を行うために用いる Transkribus と KH coder について紹介する。

Transkribus

Transkribus は、オーストリアで開発された HTR を行うためのソフトである。HTR とは、画像データとして取り込んだ手稿史料の文字をテキストデータ化する技術のことである。このソフトが優れているのは、文字認識のモデルをユーザー自身が作成できる点で、自動認識だと読み取ることができない癖字なども、複数のデータをトレーニングモデルとして積み重ねることで、任意の文字へと読み取らせることができるようになる。

18世紀イギリスの史料の場合、現在では使われていない字形の認識に効力を発揮する。19世紀初頭までの文書には(ロングエス) という文字が頻繁に出てくるが、これを自動でテキストデータ化すると、多くは f に変換されてし

まう。計量的な分析において、基本となるテキストデータに誤りが混入することは致命的である。Transkribus では、このロングエスを手動で認識させたデータを積み重ねることで、正確に小文字の s に変換可能なモデルを作成することができる。また、上部に印字された雑誌名やページ番号など、本文に含まれない部分を文字認識の範囲から除外するようトレーニングすることもできる。このようにして、認識範囲や字形についてのモデルを準備できさえすれば、大量の史料画像であっても短時間でテキストデータ化することができる。



KH coder

準備したテキストデータを計量的な分析にかけられるために用いるのが、KH coder である。これは社会学者の樋口耕一が計量テキスト分析を行うために開発したソフトで、単語の出現率などを算出するだけでなく、解析結果を可視化したりすることもできる。例えば、文学作品の中に出現する単語の頻度を章ごとに計測して図示することで、潜在的なテーマの変遷を読み取る、といった分析が想定されている。

KH coder の特徴的な機能の一つは、コー

ディングルールの作成ができる点である。例えば、文章中に議会や政府という単語が登場したら、その文章は「政治」というカテゴリーに属する、というような仕分けのルールのことである。このコーディングルールを任意に設定することができる。ユーザーの研究方針に沿ったコーディングルールによる分析を行うことで、単語同士の関係だけでなく、意味付けされた文章のグループ同士の関わりなどを見ることができる。

おわりに

本稿は2つのソフトの紹介に留めるが、こうしたアプローチに基づいた研究構想について簡単に触れたい。筆者の研究対象は近世のオックスフォード大学およびケンブリッジ大学である。中世以来の伝統を誇る両大学だが、18世紀は低迷期にあったとされ、この時期に各方面から提起された批判がやがて19世紀の大学改革へと結びつく、という記述がなされる。ただし、大学批判の実例として引用されるものには、エドワード・ギボンやアダム・スミスなど著名な人物が書き残したものが目立つ。これに対し修士論文では、より広範な史料から記述を集め、計量的な分析を行うことによって、大学批判のあり方や、大学そのもののあり方について、客観的な再検討を試みることを目指している。

引用文献

- 小風綾乃「Transkribusを使った18世紀フランス語手稿史料の翻刻実践」『西洋史学』第269巻(2020年)
後藤真・橋本雄太編著『歴史情報学の教科書 歴史のデータが世界をひらく』(文学通信、2019年)
樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』(ナカニシヤ出版、2014年)



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程 1 年

伊藤 優太 (ITO Yuta)

2000 年生まれ。三重県桑名市出身。2024 年 3 月に愛知文教大学人文学部・人文学科を卒業後、同年、中部大学大学院国際人間学研究科歴史学・地理学専攻に進学。専攻は、日本中世史。卒業論文では、「戦国期における美濃明智氏の実態について」という題名で伝記史料や系図を用いて明智氏の実態に迫った。修士論文では、南北朝から戦国期かけての土岐氏・斎藤氏と室町幕府との関係性を幕府儀礼を通して明らかにしていこうと試みている。



南北朝期における土岐氏と室町幕府の関係



はじめに

2000 年代以降、足利将軍や室町幕府に注目が集まり研究が進歩している⁽¹⁾。とりわけ、将軍と有力大名という関係を中心に論じられてきた⁽²⁾。その中で、守護大名である土岐氏の研究も様々な視点から進展を見せる⁽³⁾。そこで本稿では、南北朝期における土岐頼遠・頼康を中心に室町幕府の関係について政治史という面から先行研究を踏まえた上で紹介していく。最後に修士論文に関する概要を説明する。

土岐頼遠と室町幕府の関係

土岐頼遠と室町幕府の関係は、政治史的に説明するのは難しい。なぜなら、頼遠に関する史料が乏しいからである。ただ、頼遠は数々の戦で武功をあげ勇将として捉えられている一面がある。例えば、青野原の合戦において「難太平記」に「青野原の軍は土岐頼遠一人高名と聞えし也」と記載されている⁽⁴⁾。その事から、軍事面において幕府は土岐氏に期待していたと考えるべきであろう。

しかし康永元年（一三四二）に、光厳上皇に狼藉を行った事で幕府の信用が低下したのは間違いない。それどころか、一族滅亡の可能性もあったと考える。それ故に、頼遠の印象は勇将というより傍若無人なバサラというイメージの方が強いといえる。その後、頼遠は六条河原にて処刑され家督は土岐頼康に引き継がれる。

土岐頼康と室町幕府の関係

次に、頼遠の死後、家督を引き継いだ土岐

頼康と室町幕府との関係を見ていく。結論から言えば、足利尊氏・義詮期に関しては、信頼が高いとされている。理由は二つある。第一に、軍事面である。頼康は、先行研究でも明らかにされているように合戦時において一貫して尊氏・義詮に与したとされている。例を挙げると、観応の擾乱である。観応の擾乱において幕府は、近江・美濃・尾張の三か国に対して半済令を出した。中でも、美濃・尾張の二か国は頼康が守護している地域である。そのようなことから、幕府は頼康に対して期待していたことが窺える。それと同時に、山田徹氏は「尊氏・義詮にとって美濃は生命線ともいえる肝心な地域であり（中略）土岐氏は外様守護ながら死活を握る重要な与党だったといえるであろう。」と土岐氏が守護している地域の重要性を論じている⁽⁵⁾。その後、乱が消息するにあたり土岐氏は、京都の治安維持にあたっており頼康や直氏が侍所頭人を勤めている。その甲斐あってか、頼康は仁木義長失脚後、義詮に伊勢守護を任じられ合計三か国の守護大名となる。このことから、土岐氏は軍事面に限らず在京活動にも力を入れていたことが先行研究からわかる。

第二に、幕府の重鎮として扱われていた点である。頼康は、幕府の重鎮として応安元年（一三六八）から三年（一三七〇）まで評定衆として出仕している。また、評定衆以外にも訴訟問題に関わっている。その他、頼康以外の土岐義行（後に康行）は義満の近習を勤めているだけでなく将軍から「義」の一字を賜っている。以上のことから、尊氏・義詮期においての土岐氏は幕府からの信頼が厚かったのは間違いないだろう。

しかし、義満期には頼康は幕府の中枢から外

れている。理由は、皇位継承問題等がある。それをきっかけに頼康は管領細川頼之との対立が生じその結果、応安の政変や康暦の政変が勃発する。その事により、義満との関係悪化にも繋がったと考える。ただ、山田氏は「一族全体でいえば幕府に奉仕する姿勢は崩したわけではなかったし、（中略）頼康は守護に在任し続けていた。」と述べているが、後に起こる土岐康行の乱を鑑みれば、応安の政変や康暦の政変がきっかけになったのは間違いない⁽⁶⁾。

小結

以上のように、南北朝における土岐氏と室町幕府の関係を政治史的に見てきたわけだが、全体的に見れば土岐氏は室町幕府と友好的な関係を築いているといえる。そこで、修士論文では政治史的視点を持ちつつも幕府儀礼（偏諱・官職・家格）を中心に南北朝から戦国期にかけての土岐氏・斎藤氏と室町幕府との関係を論じていきたい。

引用文献

- (1) 丸山裕之『図説室町幕府』（戎光祥出版、平成三〇年）、木下昌規・久水俊和編『足利将軍事典』（戎光祥出版、令和四年）
- (2) 亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武將列伝 北朝編』（戎光祥出版、令和三年）、谷口雄太『足利一門と動乱の東海』（吉川弘文館、令和六年）
- (3) 谷口研語『美濃・土岐一族』（新人物往来社、平成九年）、横山住雄『美濃土岐氏』（戎光祥出版、令和六年）
- (4) 『難太平記』（『群書類従』二一輯、（続群書類従完成会、昭和七年）
- (5) 山田徹『土岐頼康と応安の政変』（『日本歴史』、七六九、平成二四年）
- (6) 山田徹『南北朝後期における室町幕府政治史の再検討（中）一康暦の政変以後の政治過程と細川氏・山名氏・土岐氏』（『文化学年報』、六七、平成三〇年）



野中 亜紀

国際関係学専攻博士後期課程
2021 年度修了 大学非常勤講師

私は古代エジプト音楽を研究するため、中部大学大学院国際人間学研究科博士後期課程に入学しました。和崎春日名誉教授、中野智章教授、中山紀子教授、財部香枝教授、主指導・副指導の先生方には本当に多くのご指導を賜りましたこと、感謝しております。特に中野智章先生には、私の知識を博士課程レベルまで引き上げていただき、時に厳しく、優しくご指導くださった御恩は、生涯忘れることはありません。

古代エジプト音楽研究に限らずではありますが、考古学研究では『遺物資料』『図像資料』『文献資料』が重要な一次資料となります。特に遺物資料の出土遺物を見るには、日本国内のみで研究を遂行するのは不可能でした。

研究対象となる実物の楽器はエジプトだけではなく、世界中の博物館に所蔵されていたため、実際に資料を見るためには渡航費をはじめ、莫大な費用が必用でした。しかし、中部大学の博士課程において研究費をいただけたことで、多くの博物館に赴くことが可能になりました。

カイロのエジプト博物館はもちろん、イギリ

スの大英博物館、フランスのルーブル美術館、ドイツのベルリン博物館、トリノのエジプト博物館、アメリカのメトロポリタン美術館、、、世界中の一次資料に触れた体験は中部大学に所属していなければ不可能でした。本当に感謝しております。

先生方のご指導を賜り、研究結果として『古代エジプト第18王朝トゥタンカーメン王墓出土の楽器—エジプト学と音楽学の観点から—』を博士論文として発表できたことは、中部大学に所属できたからこそだと確信しております。また2023年7月、博士論文を加筆修正いたしまして、出版することが叶いました。

中部大学サテライトカレッジで担当させていただいた「古代エジプト歴史講座」はシニア講座として今も継続させていただき、今年で10年目になります。現在は愛知文教大学・愛知文教女子短期大学にて、非常勤講師として勤務しております。中部大学の先生方に教えていただいた御恩を忘れず、教員として私も学生一人一人に親身に接しつつ、今後も研究も続けていきたいと思っています。ありがとうございました。



セレンメン

国際関係学専攻博士前期課程
2019 年度修了 修士(国際関係学)

卒業生のセレンメン（斯仁門）です。私は中国のモンゴル民族で、内モンゴル自治区のロシアとモンゴルとの国境に近いフルンボイルという地域の出身です。2015年に中部大学大学院国際人間研究科と提携のある内モンゴル大学の蒙古歴史学系旅行管理専攻を卒業し、2018年より中部大学国際人間学研究科の国際関係学専攻に2年間留学していました。

当時は、瀬谷先生のご指導の下、内モンゴルで草原観光の拠点になっている「ゲルキャンプ」という観光施設の形成と運営について研究しました。ゲルは、本来モンゴル族の伝統的移動式の住居で、遊牧を行ったモンゴル族の文化的象徴です。ゲルキャンプは、外来の観光客がモンゴル文化を楽しむためにできたもので、固定されたゲル群で寝泊まりができ、乗馬や民俗芸能などを楽しむこともでき、各地に作られるようになりました。故郷のフルンボイルでゲルキャンプの現地調査をしたことは今も記憶に残っています。

大学院を卒業後は、日本企業ダイキンの蘇州研究開発センターに就職し、PCB開発の部長通訳として3年間働きました。その後オンラ

インで日本の医療通訳士の資格を取って転職し、今上海の医療系の貿易会社に総経理アシスタントとして勤めています。卒業後もずっと日本と中国を結び仕事についています。

ところで、今の総経理の人は、名古屋出身の日本人の方で、名城大学農学部出身です。中部大学のこともよく知っていて知り合いも多いようです。今でも名古屋と中部大学の縁も繋がっています。



授業で訪れた愛知県の産業観光施設



宇津野 健太郎

言語文化専攻博士前期課程

2005 年度修了 フリーランスカメラマン

私はドキュメンタリー映像について研究をしていました。映像で伝えるということはどうか、考えておきたかったからです。その中で研究テーマの中心においたのが森達也監督です。1990年代を中心に日本を騒がせたオウム真理教を取材した、「A」と言う作品を制作した人です。私は彼のその作品を見た時に、テレビのニュースなどから感じていた教団に対する印象との違いやそれを取り巻く社会のあり方に衝撃を受け、伝え方ひとつで大きく見方が変わることを知りました。このことから、そんな作品をつくった森達也監督の映像観を追求してみたいと思い、彼を中心にしながらドキュメンタリー映像の在り方を研究しました。

大学院生活は、先生方に論文執筆を通して厳しくも優しく指導をいただきました。また、各分野の院生仲間から刺激を受けて気が付いたことも多く、ご指導いただいた先生方には今まで考えもしなかった視野も与えていただきました。こうして振り返ると自分自身の研究だけでなく、いろんな分野の専門性をもった人たちと過ごす環境にいたことは本当によかつ

たなと思います。

そして、縁あって、テレビや車などのプロモーションビデオを手がける制作会社に勤めることになり、動画のカメラマンになりました。現在はフリーランスとして仕事をしています最近の就職スタイルはわかりませんが、当時は、マスコミでかつテレビ系の職種では、遠回りといえる道のりでした。入社後もカメラアシスタントから入り、下積み生活は当然同じようにしました。でも、カメラを持つにあたって、周りよりも就職するまでに時間をかけたからこそ、様々な思いに目や耳を傾けることができ、そのおかげで丁寧な画づくりにつながっているのではないかとと思っています。

今年は縁あって約1ヶ月、オリンピックの取材に行く機会を得ました。大学院時代に「伝える」ということを考え、あの日々の中でいろんな方向に目を向けられるようになり、視野を広げられたおかげであると思っています。これからも伝えることを考えながら、目の前にあるものだけをみるのではなく、どのように表現でき、また社会にどんな形で貢献できるか考えながら仕事をしていきたいと思っています。



間地 悠子

言語文化専攻博士前期課程

2022 年度修了 英語教諭

私は博士前期課程で「トランスランゲージング教育」について研究しました。トランスランゲージングとは個人が有する言語リソースを日本語や英語などと個別の言語として区別するのではなく、言語および非言語もコミュニケーションをとるためのリソースとしてとらえ、それを最大限に活用して目標やタスクを達成するという考え方です。この研究では中部大学の学生に協力していただき、日本語の文字だけ書かれたレストランのメニューを春日井に住む外国人に向けて、メニューを作成するというトランスランゲージングを活用した授業を実践しました。多くの学生が絵やイラストを使用し、日本語だけではなく英語や韓国語、中国語などを使用していました。

学生のコメントには、「これからは伝えたい相手のことをよく考え、言語や非言語を使用していきたい」など、外国人とのコミュニケーションの意識の変化がみられ、「相手にもっと伝えたいことが伝わるように、英語やほかの言語などのリソースを増やしたい。」など学習意欲にも変化がみられました。

私は現在、中学校の英語教師をしています。

トランスランゲージング教育の研究を生かして、「相手に伝わる」、「相手を理解できる」ということを実感できるような授業づくりを心掛けています。

最近の授業では、ALTに部活動を紹介するためのポスターを作る活動をしました。生徒たちは絵や、デザインを気にしながら、ALTのことを考えた言語選択をしてポスターを作っていました。どうやったら伝わるかを考えながらも、楽しそうに活動する様子が見られました。

また、私は毎回授業の導入部分で英語の歌を歌っています。トランスランゲージングにおいての非言語リソースの中には音楽や映像なども含まれます。生徒にとっては気軽に英語を使用する機会になっていて、上手に歌えなくてもわかるところだけ歌うなど、楽しく英語を使用しながら活動することができています。

研究を通して学んできたことで、私は毎日楽しく生徒と一緒に過ごしています。たくさんのことを教えてくださった先生方に感謝の気持ちをもって、先生方に支えていただいたように私も生徒の明るい未来を支えていきます。



徳永 辰通

言語文化専攻博士後期課程
2007 年度修了 大学非常勤講師

国際人間学研究科に入学したきっかけは、修士課程の時に安達隆一先生の「係助詞『コソ』の構文史」に出会ったことです。修士課程では天草版『平家物語』を用い、係り結び衰退の様相を研究していました。その時に「係助詞『コソ』の構文史」を読みましたが、不勉強であったため理解できず、3ヶ月読み続けました。そうしているうちに、安達先生にご指導いただきたいと思うようになり、安達先生に手紙を書きました。お返事をいただき、2003年12月24日に中部大学で安達先生とゼミ生の方々に会いしました。帰り際、「今度私の家に招待します」と仰っていただいたことを、今でもクリスマスが近くなると思い出します。

国際人間学研究科に入り、「広がり」を感じました。安達ゼミの院生、学部生の研究分野は語彙論、文法論、語用論、国語科教育と、様々でした。毎週ゼミ生以外の院生や学部生、時には先生方も参加し、勉強会をしていました。そこでは、日本語学、国語科教育のほか、文学、思想史など、様々なテキストを読みました。勉強会により、知識、興味、関心が広がりました。

また、授業の繋がりのない人文学部の先生

方にたいへん気にかけていただきました。人文学部教員の研究会や、歌舞伎鑑賞、犬山散策などの学部生のイベントに誘っていただき、多くの先生方や学部生と知り合えました。他にも、安達先生の中部大学以前の教え子（大先輩）をお迎えし、研究会をしたこともありました。その時に安達先生の古稀を記念した論文集（『ことばの論文集』）を刊行することになり、私は編集委員をしましたが、この時も多くの方々と知り合えました。

修了後も、安達先生のご自宅で勉強会を年に数回おこなっています。この勉強会は、安達ゼミ以外の方も多く参加し、各自研究を持ち寄り、発表をしています。新型コロナウイルスの影響で、勉強会のできない期間もありましたが、2024年7月14日に約4年ぶりに勉強会が開けられました。勉強会が開けなかった間も各自研究を進めており、持参した研究が多かったこともあり、いつも4時間半くらいの勉強会なのですが、当日は6時間近くにも及びました。コロナ以前を思い出すとともに、たいへん刺激になりました。

このように、国際人間学研究科を修了した現在も、知識と人のつながりを広げられています。



伊木 治子（獣医師）

心理学専攻博士前期課程
2022 年度修了 修士（心理学）

※現在名古屋大学大学院教育発達科学研究科
心理発達科学専攻心理危機マネジメント
コース（博士後期課程）在籍

はじめに、心理学科の先生方に感謝申し上げます。私は小鳥を診る獣医師です。大学院で取り組んだ研究テーマは「ペット喪失体験（ペトロス）」です。日本では約3人に1人がペットを飼い（内閣府、2010）、人に純粋な愛情を向けてくれるペットは家族の一員として、飼主の心を支える大切な存在になっています。愛するペットの病気や死への不安から生じる飼主の葛藤は、ときに獣医療従事者に向けられます。一方で、獣医療従事者がグリーフケアを学際的に学べる機会は少なく、この問題について解決の糸口を見つけることは、大きな課題です。

コロナ禍での対面調査にはとても気を遣いつつ、高齢のペットを看取った10名の語りから質的分析を行いました。結果から、ペット喪失体験は人との死別と比べて「死別したペットに抱く負の感情、アンビバレンス、軋轢や葛藤は少ない」という特徴と、亡きペットは飼主の人生を意味づけ、その人生の再構築を促すプロセスがみられました。また、家族や友人との関わりは、飼主の悲嘆を支える場合もありますが、怒りや孤独の要因にもなり得ること

が示唆されました。これらのことは、飼主や家族、獣医療従事者にとってグリーフケアの指標となるでしょう。中部大学大学院での研究は、「中高年におけるペット喪失体験プロセスの検討」として、東海心理学研究17巻（2024）に掲載されました。

社会活動では、認定NPO法人TSUBASA（埼玉県.飼鳥里親団体）が運営する飼主セミナー「愛鳥塾」で、ペトロスの講演を担当しています。また、2024年4月に、実話にもとづくセミフィクション、「みさとマロンの一三年 小鳥との日々、そして別れ」を出版しました（空とぶロバ出版 https://ehonnakama.theshop.jp/items/84191954_104p、ルビあり）。少女が小鳥と出会い、一三年間ともに暮らし、やがて老いた小鳥を家族とともに看取っていく物語です。子どもから大人まで、多くの方に読んでいただければ幸いです。現在は、ペットの看取りや死について、修学前より広がった視野から丁寧に言葉を選び、飼主や家族と話し合うよう心がけています。今後も、人とペットの関係性について「喪失」の視点から、より深く解き明かして行きたいと考えております。



佐野 浩彬

歴史学・地理学専攻博士前期課程
2014年度修了 研究職

中部大学には人文学部歴史地理学科3年次に編入学し、学部卒業後に大学院国際人間学研究科（歴史学・地理学専攻）の博士前期課程に進学しました。在学中は地理学を専攻し、都市経済地理学が専門の林上先生（現・名誉教授）のゼミに所属しました。

私が大学院に在学していた頃は、まだ2011年3月に発生した東日本大震災の影響が社会に広がっており、災害や防災への関心が高かった時期でした。私自身もその影響を受け、自治体の防災対策や地理情報システム（GIS）を活用した自然災害リスク分析などの研究を行いたいと考えていました。修士論文ではGISを用いた津波避難の分析を行いました。最初は入門書から勉強を始め、研究に関連する文献から分析手法やGISソフトウェアの使い方を勉強していましたが、なかなか自分が行う研究へどのように繋げられるかが分からず苦勞し、修士論文の研究を進める中でよく行き詰ったことを覚えています。

在学中には学会や研究会などにも参加しました。学会で様々な研究発表を聞いていると、研究分野や関連する領域の基礎知識が不足していることを痛感しました。そこで専攻してい

た地理学のほか、歴史学やそれ以外の学問分野の文献も幅広く読むようにしていました。また、歴史学・地理学専攻の先生方には本や論文だけでは得られない話をたくさん伺ったことを思い出します。自分自身の研究に対する考え方などはこの博士前期課程の頃の経験が基礎となっている気がします。

博士前期課程を修了した後は、茨城県つくば市にある国立研究開発法人防災科学技術研究所（防災科研）に研究員として就職しました。防災科研では、災害対策や災害対応における情報の利活用を研究し、災害による被害の低減を目指しています。自治体や地域等で活用可能な情報システムの開発も行っています。その成果である災害時の災害情報を一元的に集約したウェブサイト「防災クロスビュー（bosaiXview）（<https://xview.bosai.go.jp/>）」や地域の防災活動を支援するサイト「地域防災Web（<https://chiiki-bosai.jp/>）」などは私も開発に携わったものです。

近年も、地震や台風、豪雨などによる甚大な自然災害が発生しています。研究を通じて、自然災害による被害の軽減に向けて貢献していきたいと考えています。



林 泰正

歴史学・地理学専攻博士後期課程
2020年度修了 非常勤講師

昭和の名曲に「上を向いて歩こう」というものがありますが、院生時代の私は、いつも下を向いて、写真にあるような杭を探していました。土地の境界を示す杭です。

数百トンもの金属の塊が燃料や貨客と共に空を飛び交い、様々な情報が国境すらも越えて瞬時にやり取りされるようになった今日ですら、人類は、土地と無縁ではられません。多くの場合、何かを行おうと思ったら、それを行えるような場所が必要です。院生室の中で完結するような事柄であれば、調整が必要な関係者も、その調整に必要な労力もごく限定されています（よければ、2017年刊行のGLOCAL第10号に掲載された私の記事を読んでみてください）。しかし、事業の規模が大きくなればなるほど、きっと、より多くの主体同士の複雑な調整に多大な労力が求められるようになることでしょう。

私は、近現代の木曽川周辺を研究対象地域として、鉄道や舟運、あるいは観光施設のために必要だった土地、そして垂炭採掘のための鉱区の所有者がどのように移り変わっていったかを調べていました。

私の場合、学士論文のフィールドに恵まれ、修士2年の春に査読誌掲載にたどり着くことができました。しかし修士論文はついに投稿にすら至らず、博士後期課程に進学したのちにはじめた研究を何年も査読担当者とやり取りすることになりました。私が投稿した雑誌の査読担当者は、とても丁寧に査読してくださり、指摘がA4で十枚近くに及ぶことも珍しくありませんでした。そういった指摘に、林上先生をはじめとする中部大学大学院の様々な先生から指導をいただきつつ、ひとつひとつ答えていったものです。

今は、東海地方の色々な大学や高専で、非常勤講師として色々な授業を担当しています。レポートや論文の添削・評価をしていると、院生時代をふと思い出すことがあります。あの時の先生方のご指導、学術論文に投稿して何度も返ってきた査読コメント……。私もそういった丁寧で親身な仕事ができるように、当時の自分自身がかくあって欲しいと願い、憧れた講師・研究者になれるように、今日も下を向いたまま、あがいています。



「院生の力」の開催

国際人間学研究科では、年に2回、研究報告会「院生の力」を開催している。これは院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうのが主な目的である。また、指導教員がコメンテーターとして議論に参加する形式をとり、院生の研究能力を高める場としても位置づけられている。報告会終了後には会場を移して交流会を開催している。学部生の参加もあり、専攻や教員・院生・学部生の枠を越えた有意義な交流機会となっている。

第20回「院生の力」

第20回「院生の力」が2024年7月3日に開催され、歴史学・地理学専攻、言語文化専攻、国際関係学専攻の博士前期課程の院生3名が発表をおこなった。テーマは、イギリス史料の計量テキスト分析、日本語学習、クレオパトラ7世像と多岐にわたり、いずれも興味深い発表であった。

参加者はここ数年で最も多く、発表学生を含め院生18名、学部生1名、教職員20名、その他1名の計40名。質疑応答も活発になされ、たいへん盛り多い報告会となった。



大学院 国際人間学研究科 主催
第20回研究報告会
院生の力

大学院生が、一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。特に学部学生を歓迎します！

2024年7月3日(水) 15時20分～16時50分
2522 講義室 (25号館2階)
※終了後、第3学生ホールで交流会を開催予定。

第1報告 中島 亮 (歴史学・地理学専攻 博士前期課程2年)
発表題目：18世紀イギリス史料を用いた計量テキスト分析の試行
コメンテーター：佐々井 真知 准教授 (歴史学・地理学専攻)

第2報告 青木 利華 (言語文化専攻 博士前期課程1年)
発表題目：日本語学習者による終助詞の使用―「ね・よ」を中心に
コメンテーター：武藤 彩加 教授 (言語文化専攻)

第3報告 野崎 日向歩 (国際関係学専攻 博士前期課程1年)
発表題目：邦語文献から見るクレオパトラ 7 世像の変遷と今後の研究について
コメンテーター：中野 智章 教授 (国際関係学専攻)

第21回「院生の力」

第21回「院生の力」が2024年11月6日に開催され、言語文化専攻の博士前期課程1年の院生3名が発表をおこなった。このうち日本語日本文化コースの留学生2名は、中国人の日本語学習者を研究対象としたものであり、情報社会コースの院生はAIを用いた音の文字化に関するものであった。いずれもこれからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。

参加者は、発表学生を含め院生13名、学部生2名、教職員12名の計27名。



大学院 国際人間学研究科 主催
第21回研究報告会
院生の力

大学院生が、一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。特に学部学生を歓迎します！

2024年11月6日(水) 15時20分～16時50分
2522 講義室 (25号館2階)

第1報告 韓 域 (言語文化専攻 日本語日本文化コース 博士前期課程1年)
発表題目：中国人日本語学習者の和製英語の理解に影響する要因
コメンテーター：小森 早江子 教授 (言語文化専攻 日本語日本文化コース)

第2報告 劉 雪婷 (言語文化専攻 日本語日本文化コース 博士前期課程1年)
発表題目：中国人日本語学習者における日中同形類義語の誤用―JFL 環境と JSL 環境の比較―
コメンテーター：武藤 彩加 教授 (言語文化専攻 日本語日本文化コース)

第3報告 藤吉 宙 (言語文化専攻 情報社会コース 博士前期課程1年)
発表題目：AIを用いた音のオノマトペの研究
コメンテーター：終 和佑 准教授 (言語文化専攻 情報社会コース)

教員研究会の開催

国際人間学研究科では、年に2回、教員研究会を開催している。これは国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の4専攻の教員がそれぞれの研究内容を発表することを通して、分野や領域の枠を越えて教員間の相互理解を深めるとともに、新たな分野・領域の研究へのきっかけとなることも期待している。また、FD(Faculty Development)の一環として、大学教育の内容や方法の改善を図るための、教員の組織的な取り組みとしても位置づけている。

第21回教員研究会

第21回教員研究会が2024年7月24日に開催された。発表者は言語文化専攻情報社会コースの河村陽介講師と、言語文化専攻英語圏言語文化コースの安保夏絵助教の2名である。

河村講師からはメディアクリエイターとして地域で実践されている様々な活動を紹介していただいた。また、安保助教からは現代英米文学における人間/非人間の描写について大変興味深いお話をいただいた。いずれも本研究科が対象とする研究領域の幅広さが窺えるものであり、たいへん有益で示唆に富む内容であった。

限られた時間ではあったが、活発に質疑応答が行われ、充実した教員研究会となった。参加者は発表者2名を含め教員24名、事務員2名の計26名。



中部大学国際人間学研究科 主催

第 21 回教員研究会

2024年7月24日(水)
研究科委員会終了後(17時45分頃～)
2821 講義室(28号館2階)

河村 陽介 講師 言語文化専攻 情報社会コース
地域とメディア表現

安保 夏絵 助教 言語文化専攻 英語圏言語文化コース
失われつつある境界を探って
ー現代英米文学における人間/非人間の描写ー

院生・学部生の来聴を歓迎します。

第22回教員研究会

第22回教員研究会が2024年11月27日に開催された。発表者は言語文化専攻日本語日本文化コースの永田典子教授と、歴史学・地理学専攻の三浦陽一教授の2名である。

永田教授からは長年の研究成果を踏まえて、伝統的祭礼行事の継承に関する問題点についてお話しいただいた。また、三浦教授からは日中「事変」の人類史へのインパクトについて、大変示唆に富むお話をいただいた。いずれも本研究科が対象とする研究領域の幅広さが窺えるものであり、たいへん有益な内容であった。

限られた時間ではあったが、院生も参加し充実した教員研究会となった。参加者は発表者2名を含め教員19名、事務員2名、院生2名、その他1名の計24名。



中部大学国際人間学研究科 主催

第 22 回教員研究会

2024年11月27日(水)
研究科委員会終了後(17時45分頃～)
2821 講義室(28号館2階)

永田 典子 教授 言語文化専攻
伝統的祭礼行事の継承に関する問題点

三浦 陽一 教授 歴史学・地理学専攻
「これは戦争ではない。わざと市民をねらっている」
ー日中「事変」の人類史へのインパクトについてー

院生・学部生の来聴を歓迎します。

中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋して、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローバルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/健康心理学特論/認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/心理検査法特論/心理統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

情報社会コース

研究基礎(情報収集/メディア・クリティシズム)/現代社会特論/情報社会特論/情報文化特論/現代メディア特論/情報コンテンツ制作特論/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通科目

近代世界表象体系

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

情報社会専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

※各専攻での深い学修に加え、高度な俯瞰力や豊かな人間性を備えたリーダー人材の育成を目指した「持続社会創成教育プログラム」を入学時に選択することも可能です。

-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：大塚俊幸
 - 発行日：2025 年 1 月 28 日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200
 - 中部大学国際人間学研究科(人文学部事務室)
 - 電話：0568-51-4144(直通)
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
<https://www.chubu.ac.jp/academics/graduate-global-humanics/>
-

